

菅直人

市民、ケリ／フ国会に挑む

衆院選をかちとつた若者たちの論理と行動

●論考
篠原一「ホスト産業社会と菅直人」

●報告
「これが市民選挙だ」ドキュメント6・23

●対談
正村公宏「市民運動から国会へ」

●提言
私の市民政治宣言

菅直人 市民ゲリラフ国会に挑む

●論考
篠原一「ホスト産業社会と菅直人」
●報告
「これが市民選挙だ」ドキュメント6・23
●対談
正村公宏「市民運動から国会へ」
●提言
「私の市民政治宣言」

<菅直人とそのグループ>年表

- 1971年秋 よりよい住まいを求める市民の会
- 1973年6月 恐怖の化学物質を追放するグループ
消費を考える葛飾の会
理想選挙推進市民の会慶大グループ
横浜支部
- 1974年3月 市川房枝さんを勝手に推薦する会
6月 参院選。機関誌「シビルミニマム」創刊
9月 草の根市民選挙研究会
ハガキニュース「みにこみ」
青空テント'74
医療をいろいろな面から考える会
- 1975年1月 議会監視のためのネーダー研究会
3月 市民運動草の根キャラバン
4月 武蔵野市議選に仲間を立て次点
- 1976年6月 あきらめないで参加民主主義を
めざす市民の会
12月 衆院選東京7区から立候補、次点
- 1977年4月 社会市民連合VS参加民主主義を
めざす市民の会公開討論会
5月 社会市民連合代表に就任
7月 参院選東京地方区から立候補、次々点
- 1978年3月 社会民主連合結成、副代表に就任
- 1979年10月 衆院選東京7区から立候補、落選
菅直人株発行
- 1980年5月 リサイクル祭開催
1980年6月 衆院選東京7区から立候補、
トップ当選

菅直人●市民ゲリラ国会に挑む／目次

第一章 ●論考

ポスト産業社会と菅直人／篠原一

第二章 ●報告

これが市民選挙だ 21

I 市民選挙が実現された日 21

II 市民運動を市民政治へ 36

III 市民選挙はどう展開されたか 23

IV 終盤戦の燃える熱気 83

52

第三章 ●対談

市民運動から国会へ／正村公宏 ききて

97

7

第四章 ●提言

私の市民政治宣言

I 政治を市民の手に 151

II 社民連への参加 153

III 政治と市民参加 181

IV 市民政治の展望 194

菅直人●市民ゲリラ国会に挑む

篠原 一
(東京大学教授)

第一章 ● 論考
ボストン産業社会と菅直人

八〇年代初の選挙というはなやかなキャッチ・フレーズにもかかわらず、選挙の結果は意外にも自民党の圧勝におわり、歴史が十年ほど巻き戻されたような錯覚にさえおちいった。それだけではなく、総選挙後の首班えらびをみていると、そこには時代認識とかリーダーの抱負というものは一切なく、あるのは万年権力体としての自民党の安泰と派閥の力学のみであった。福田元首相は自民党総裁選に敗れたとき、「天の声にも変な声がある」といったことがあるが、大平前首相の遺影をかけて行われた喪服選挙と選挙後の霧の中の手打ち式をみていると、この「天の声にも変な声がある」という感想は今回の選挙にこそ使いたいような誘惑にかられる。

八〇年代の日本の政治は霧のうちに明けた。しかし、この選挙をみると、黒い雲の中にもいくつかの光がさしている。それは東京第七区における菅直人君の圧勝と、もう一つは同じく参議院選挙東京地方区における宇都宮対栗栖という戦いで、平和候補宇都宮徳馬氏の勝利であった。やはり東京はまんざらでない。こんご日本の政治を改革していくとするものは、これら乏しいが、しかし貴重な成果の意味を十分に反芻していくことが必要であろう。

もちろん、ここでの問題は菅君の勝利をどう考えるかである。さきに歴史が十年くらい巻き戻されたような錯覚に陥るといったが、たしかに自民党の得票率と議席数をみるとそのような気がしてくるが、一九七〇年以降の政治の流れを分析してみると、事態はそれほど単純ではない。結論的にいって、七〇年代からはじまつた政治の新しい潮流は、今回の選挙にもまた貫流している。つまり、一九七二年の田中内閣下の総選挙では、高度成長期の最後のあだ花であった日本列島改造論と高度成長がもたらしたマイナス面に対する批判が票のかたまりとなつて最左翼の共産党に流れた。このときの共産党の上昇は今回の自民党の再起と同じくらい勢いにとんだものであった。ところが次のロッキード選挙では、ごうごうたる自民党批判にもかかわらず、票は革新系には流れず、新自由クラブが流動票をかつさらつて躍進した。流動票の生態に人々が目をみはるようになつたのは、このロッキード選挙以来のことといつてよいであろう。一九七〇年代最後の総選挙は昨年十月に行われたが、新聞は自民党の勝利を予測していた。しかし、ふたを開けてみると、多くの人々が棄権し、流動票は突如投票の舞台から姿を消してしまつた。そしてその結果としての自民党の敗北。

このように七〇年代の流動票は一見気まぐれで、場合によつて共産党、新自由クラブ、棄権とところをかえて出没し、選挙の結果に大きな影響を与えてきた。七〇年代に入つて各政党の支持率には激変がなく、大局的にいつて横ばい状態がつづいているが、この横ばい状態のいずれかの政党に、この流動票が加担することによつて、政治変動が生じているのである。ところで、今回

の選挙においては、この流動票という運命の女神は自民党に宿つたのである。ここは選挙分析の場ではないので、流動票が自民党に流れついた原因についてはふれない。問題は、石油ショック以降、つまり低成長期に入つてからだけをとつてみると、この流動票は、保守系にいくか、棄権に廻るかで、革新系には流れていなといふことである。このことのもつ意味は大きい。政権交代が行われるためには、何よりも選挙の結果を定めてきた流動票が野党の方に向うようにならなければならぬ。連合政権のよびかけもそのための努力の一つであつたのである。しかし、それは成功しなかつた。

ここに菅君の問題が登場する所以があるのである。革新が流動票をうることに全て失敗したとき、ひとり東京第七区というもつとも都市的なところで、菅君は流動票をかつさらつた。投票率の上昇によって投票の場に登場した流動票の圧倒的部分が菅君に流れたであろうことは、すでに選挙分析で多くの人が指摘している。いくら数字をいじつてみても、それ以外の結論は出しがたい。新自由クラブの票を前回分にプラスアルファーしたものと考えても、菅君の一位はかわりない。こういうことを考えると、候補者のいかんによつては、流動票は自民党に流れず、革新派が把握しうることが明らかになる。何も三十三歳の若い新人が東京のもつとも都市的なところで圧勝したという個人的成功ものがたりに興味があるのでなく、問題は八〇年代の政治構造、とくにそこににおける革新のあり方に一つの問題をなげかけたところに、菅直人勝利の中心問題がある。

では、このような事態はどのようにしておこったのであろうか。この問題を考えるためにには、やや大ぶらしきめいた話になるが、産業社会の変貌というか、あるいはポスト産業社会と政治のあり方という問題を考えなければならないであろう。

最近の政治学においては、先進資本主義における政党の衰退ということがいわれている。第二次世界大戦後、先進資本主義においては歴史上まれにみるほどの経済成長がみられ、産業社会は一つの成熟した時代を迎えたが、一九五〇年代から一九六〇年代後半に至るこの成長の時代は、政治的にみれば政党政治がもともと安定した時代であった。産業社会の高度化した時代には議会の機能は次第に衰退し、行政権と官僚制が優位になりつつあつたために、議会制民主主義の可能性については多くの人が悲観的であったが、他方で議会を支配する政党の役割はますます高まり、政治の中心は議会から政党の手にうつりつあるものと考えられ、そういう意味で政党政治はかくたる位置をしめつづけるであろうと思われていた。

ところが、一九七〇年前後に学生の反乱と各種の市民運動にみられる単一争点をかかげた新しい政治運動がおこるに及んで、政党の機能衰退が明らかになつた。いまでもなく、既成の政党が新しい社会におこりつある問題を吸収して、その活動方針の中にとり入れることができないからこそ、単一争点主義の運動がおこってきたのであり、政治学者がこのような現象を「反政治」(Antipolitics)としてとらえていることは興味深い。これらの運動は明らかに政治的な運動だが、既存の政党システムと対比して考えた場合「反政治」という形態をとらざるをえない。政党シス

テムは安定しながら、その基盤にある社会が変容してきたため、そのきしみの中から各種の市民運動が「反政治」という形をとりつておこってきたのである。ところで、産業社会の成熟の中から生まれつある社会は、人によって命名の仕方にちがいはあるが、ポスト産業社会であるといつてよいだろう。このようにポスト産業化がすすむとともに、政治における争点の内容が変化し、そこにすむ人間の価値観もまた当然異つてくるが、古い政治のシステムがこれに適応しえないとするならば、新しい動きがでてくるのはむしろ当たり前である。

では、成熟した産業社会の政治とポスト産業社会の政治との間にどのようなちがいがあるのであるか。これは現代政治学の最大の課題の一つであり、ここで簡単に解説する」とはできないが、バージャーという政治学者の言葉を借りれば、それは、ハイ・ポリティックス (High Politics) とライブリ・ポリティックス (Lively Politics) の対立という現象にもつとも典型的にあらわれているという。ハイ・ポリティックスは文字通り高等政治であり、これまで政党が基本綱領として高々とかかげていたような政策を考えていただけばよいだろう。これに対してライブリ・ポリティックスというのは、生活の質に連関する生きた政治とでも訳すべきものであり、七〇年代以降に発生した反原発、公害反対、生活環境の改善、自然保護、障害者自立その他の福祉施策、消費者問題、資源保護、さらには市民参加と地域の自立など、身の廻りにころがっているが、新しい時代の生活にとって本質的な問題がこのライブリ・ポリティックスに当るといってよいであろう。いうまでもなく、これまでの政党は高等政治をかかげて生存競争をしてきたが、ポスト産業

社会に噴出してきた「生活の質に連関する生きた政治」に対してはなお鈍感であり、下からの運動にせつつかれない限り、なかなか動き出そとしない。ここに市民運動が多発すると同時に、一部の市民の間から政治不信がおこる所以がある。

このような「高等政治」と「生活の質に連関する生きた政治」との対比はたしかに有効であり、のちにのべるように、この構造的ズレが菅君の勝利した基本的原因であるが、私はこの分類法に加えて、もう一つインターレスト・ポリティックス (Interest Politics) という言葉を追加したい。つまり高度成長の時代はまさに「利益政治」が貫徹したときであり、利益団体自由主義といわれたように、利益団体が競争し、またそれらが政治の世界に殺到した時代であった。日本の問題は、これら圧力団体が政治の世界を闊歩しただけでなく、補助金システムと公共投資によって全国が自民党の利益体系の中にすっぽりつつみこまれたところにある。自民党の支持、とくに農村におけるそれが公明党の支持と同様にかたい支持であり、彼ら支持層は雨が降っても槍が降っても投票所におもむくだけでなく、野党の訴えにも頑として耳をかたむけようとしないのは、三十年近くにわたる経済成長期に与党によつて利益の還流が手厚く行われたからにほかならない。高度資本主義はいうまでもなく利益価値を中心とするものであるから、それによつて受益した人が利益信仰にとらわれるのはむしろ当然である。とくに若い人の間に安定志向がつよいといわれるのも、このような事態にもとづいている。

このように考へると、成熟した産業社会の政治は、「高等政治」 H と「利益政治」 I に象徴さ

れ、ポスト産業社会のそれは、「生活の質に連関する生きた政治」 L に典型的な特色がみられるといつてよいだろう。これを日本の政治に即してみると、自民党は I がもつともつよく、H の要素も前面に打ち出されることがあるが、L はほとんど存在しない。自民党が利益第一主義、生産第一主義の保守党だといわれるのはこのような事情に基く。社会党は万年野党として、一応組織労働者の部分的利益を代表するが、一般の眼には同時に抽象的な「高等政治」 H にもつぱらかわりあう政党として観念されている。共産党、公明党は自民党の利益体系からおちこぼれた層を活潑な組織活動、世話活動によつて吸収する政党であり、そういう意味では自民党とはちがつた意味ではあろうが、一種の利益政党 I としての特色をももつてゐる。共産党が「高等政治」をも高度に展開していることはいうまでもないが、しかしこの共産党もふくめて、これまでの政党には「生活の質に連関する生きた政治」 L の要素が十分にふくまれていない。野党の中にはこの L の要素を言葉としては重視しているものがないではないが、それは具体的な行動となつて体現されない。そこで別に思想的に左翼であるとか、ラディカルだというわけではないが、身近かな、生き生きとした新しい政治の不足を感じる人は、政治の世界において一種の流砂のようにただよわざるえない。流动票というものはそのような基盤の上に生まれる。注意すべきことは、これらの流动層は産業社会の成熟によつて豊かさの恩恵をうけており、そういう意味で、大きな変化をきらい、安定を求める人々によつて構成されている。ポスト産業社会は産業社会の後(ポスト)にくる社会であり、けつして反産業社会ではない。したがつて成熟した産業社会でつちかわれた

価値観はつよくここで受けつがれていることが忘れられてはならないであろう。だから、自分の感覚に適合する、生々とした身近かな政治が、政党として具体的な形をとっていないとすれば、それらの人はむしろ不満足ながら保守政党へ走り、あるいは政治の世界から逃避することになる。豊かさへの執念と生きた政治の二つの要素の間をゆれ動いているのが、これらの層の実態だと考えてよいのではなかろうか。石油ショック後の選挙において、流動票が新自由クラブ、棄権、そして自民党へ流れたのは、このような豊かさへの信仰と、ライブリ・ポリティックスの欠落という構造の下におこった動搖と解することはできないだろうか。

いうまでもなく、このようなポスト産業社会的な流動票は大都市に多い。だからこれら流動票の行方をつかむ試みも、おそらく大都市でもっとも成功するであろう。そしてこの試みが結実したのが今回の菅君の勝利にほかならない。菅君は自ら生活者としての立場に立つことを宣言してきたが、彼は文字通り「名もなく金も組織もない」人であつたにもかかわらず、このライブリ・ポリティックスを体現することによって、新しいイメージをつくり出していった。政治的志向をもつたタレントが勝利することは決して悪いことではない。しかし、それはしょせん例外的現象であつて、普遍性をもちえない。やはり、ふつうの市民がこつこつと市民運動をつづけながら、新しい政治のパターンをつくっていくことがもつとも大切である。菅君は既成の政治家からみれば、おそらくピンボケと思われるような争点をかかげて、しかも石の上にも三年がんばりつづけることによって、今日の勝利をかちえた。

菅君の行動の軌跡については、他の箇所で具体的にくわしく論ぜられるであろうが、彼はまず第一に政界浄化、選挙浄化、これに連動するものとしての市民選挙をかかげて出発した。日本の選挙がたかりの構造をもつてていることは周知のことであるが、これはさきの言葉でいえば、高度成長期の「利益政治」の申し子であり、これに挑戦すること自体一つの時代に対する挑戦であった。そして彼の選挙は選挙 자체が市民参加の実践の場であり、したがつて当選のよろこびの表現として行われる胴上げも、まず参加した運動員から行われるというスタイルが生まれる。

第二に、菅グループのこれまで行つてきた運動の数々をみればわかるように、それらはすべてポスト産業社会に特有なライブリ・ポリティックスに関するものであつた。消費者運動、リサイクル運動などが票になるとは考えられていないところで、これらの運動を連続的につみ上げることによって、新しい時代にふさわしい、ふくらみのある政治家のイメージをつくり出した。

第三に、これは第二の問題と連関することであるが、彼の活動はつねに地域的、辻説法的であった。タレントは広域的にはつよいが、地域的にはよわい。選挙の勝利のち彼はタレント的存在に近づきつつあるが、彼のもちあじは元来まちかどに立つて一定の人間に語りかけ、またグループ活動を通して小集団づくりをしていくところにあることが忘れられてはならないだろう。ポスト産業社会は別名情報化社会ともいわれるよう、多量の情報が広域に迅速に流通する社会であるが、ここでは核家族ないし自己自身という小宇宙にこもりがちな小さな個に対して、とほうもなく大きな大社会が対峙していて、その中間が欠落している。産業社会の中でつくられた組織

が限界をもつもの以上のような新しい社会状況によるところが多い。こういう中で政治の改革を志すものは、地域の中で小集団活動をつみ上げていくほかはないだろう。しかもその活動の内容はライブリ・ポリティックスの内容が多様化しているのに比例して多様化せざるをえないであろう。菅君の活動にしてもこの点においてどのていど進展がみられるかによって、その将来が決定されるであろう。

菅君の勝利はたしかにポスト産業社会における政治のあり方の一端を示した。それだけに彼の勝利は個人的勝利であると同時に、そこにはより大きなひろがりをもちうるもののが内包されている。しかし、彼の活動はまだはじまつたばかりで、行き先には大きな難問がまちかまえている。

第一に、新しい酒は新しい皮袋にもるべきか、あるいは新しい酒を古い皮袋に入れて、中味を新しくしていくべきかという問題は、ポスト産業社会の問題としてまだ解決されていない問題である。西ドイツの「緑の政党」は市民運動がそつくり政党化した例であり、フランスのエコロジスト党もそうであるが、これらの新党が安定し、固定化した政党システムの中でいかなる発展をしうるか、また内的にも運動のもつ多様性をいかに統合していくかという点に、いくつか問題をかかえている。そうかといって、新しい酒を古い皮袋にもることによって、本当の改造がされうるかという保証はどこにもない。新しい社会に次から次へと生起してくる問題を政治の場にフレードバックさせていくことは共通の課題であるが、それに適合的な形式が未だ発見されていな

いのである。この点について確言はできないが、解決法はおそらくあれかこれかではなく、多様な形態で、あきらめることなく既成「政治業界」に対し接近していくよりほかに方法はないであろう。

第二に、政治の世界では数をもつてしなければ力となりえない。現在のところ菅君は「政治業界」に潜入した一人の斥候でしかない。したがって、菅君につづいて、ポスト産業社会の革新といふさわしい力が政治の舞台に登場しなければ、菅君のたたかいは孤独のたたかいとなり、ついには政治業界の論理にとりこまれてしまうという危険性がある。その勢力が何人であるべきかを確定する必要はないであろうが、ともかくじわじわとその論を広げていく必要があるであろう。菅君がそのために果すべき役割は、彼が市民に雇われた政治家として政治の世界で活躍することと同様に、あるいはそれ以上に重要であろう。

最後に、くりかえしていつてきたように、菅君は自ら意識すると否とにかかわらず、ポスト産業社会の政治的一面、あえていえばそのプラスの側面を代表しているのであるが、このポスト産業社会の政治の態度については、正直にいつてよくわからない部分が圧倒的に多い。これは政治学者の責任もあり、われわれもその生態の分析と予測に全力をつくしたいが、しかし政治は静観していくなるものではない。トライしない限り政治の展開はなされないのであり、菅君にはこの未開の原野にトライするという課題が課せられている。このトライは成功することもあれば、失敗することもあるだろう。しかし失敗とそれに対する批判をおそれてはなにもできない。必要

なものは開拓者の精神である。われわれは暖くこれらの活動を見守ると同時に、こんごとも惜しみなく協力をしていきたいと思う。

第二章 ● 報告

これが市民選挙だ——市民による市民政治実現のための序章

I 市民選挙が実現された日

●一九八〇年六月二十三日午前十一時七分

この日、私は朝九時ごろ目がさめた。選挙期間中は、日曜日を除いて毎朝七時から、東京七区内の各駅頭で街頭演説をするのが常だったのと、六時過ぎには起きたものだが、昨日の投票日のことなどをぼんやり思い出しながら平静な朝を迎えていた。

投票状況の分析や七区内のマスコミの調査から、当落が決まるのは午後に入つてからだらうといふ連絡をスタッフから受けており、昼前に事務所に行く予定でいた。

確か十時ごろだったと思う。スタッフの一人、片岡勝君(33)から電話が入つた。「当確の時間が早まるかもしれないからすぐ来い」という電話であった。票は、比較的弱いといわれていた東村山市あたりから開いていったらしいが、僅差ながらトップに立っているということである。

私は朝食がわりにミルクを飲み終えるとすぐ自宅から選挙事務所のある三鷹市へ向かつた。

私の家から選挙事務所までは、国電中央線でひと駅である。電車の中で私は「今度は勝てるかもしれない」という感じを強くもつた。

選挙事務所は三鷹駅北口ロータリーに面したビルの二階を借りてあったが、到着するとすぐスタッフの片岡勝、湯川憲比古(33)、宮城健一(33)の三君と、地階の喫茶店で打ち合わせをした。開票状況は順調らしい。どの地域でもトップに近い得票をしている。この様子だと、十一時すぎに「当確」が出そうだという。三人のスタッフと、当確が出た場合どんな対応をするかを簡単に打ち合わせた。

●市民の勝利

私たちの選挙事務所は決して広くない。もとはレストランだったところを事務所として使っているので、食事には便利(?)なのだが、少々狭い。そこにTV局が二局とラジオ局等、マスコミ関係の人たち、それに運動員が集まって熱気に溢れていた。

事務所に入ると、開票速報を知らせるテレビの前に坐られた。

この時の状況を、片岡勝君の言葉を借りていえば次のような。

「菅君と打ち合わせを終えて事務所に入ったとたん、NHKから電話があつた。『当確を出そうと思うのですが、どうでしょうか。票の出方からいって大丈夫だと思うんですが、間違いないでしようか』

そういうわれても、こっちだって知りたいくらいなのに、と変な気持だったよ。とりあえず『いいんじゃないですか』と答えたのだが……」

十一時七分、「電話を切つてわずか十秒後」と片岡君は後で語ってくれたのだが、NHKテレビに「菅直人当選確実」というテロップが流れた。

その直後のことば、私にも正確な記憶はない。事務所は興奮のるっぽと化した。ダルマに目を入れたり、バンザイをしたりするのは、運動員もやりたがらなかつたし、私も好まなかつた。私たちの勝利のポーズは「拍手」と「Vサイン」と決めていた。

私はマスコミのインタビューに答えて「市民の勝利」を何度も強調した。無所属で東京七区から立候補してから衆院選を二回戦い、参院選(東京地方区)にも立候補したことがあるが、あきらめないで今日まで私を支えてくれた市民全員の勝利だと思ったからだ。金に動かされず、組織に頼らず、市民の選挙で勝てたことを、私を応援して下さった人々とともに喜び合いたかった。今やつと、市民政治への足場ができた。

①お祝い電話録音プロジェクト

当確がテレビを通じて流れると、続々「お祝い電話」がかかってきた。私自身も何人かの人々と話をしたが、この時から「電話録音プロジェクト」の運動員が俄然忙しくなった。

「録音プロジェクトは投票日前日の企画会議で発足したんですが、この六・二三の電話を録音し

ようという企画なんです。十年前の六・二三は七〇年安保で何となく因縁めいたところがある。
市民のお祝いの声を録音することで一つのモニュメントを残したい」

録音プロジェクトのリーダー山田まこと君(29)は受話器に録音ピックアップ・コードを設定し、六台のカセットレコーダーを設置しておいた。しかし、このプロジェクトは、あまりにもたくさん電話が一度にかかるためパンク状態になってしまったようである。

開票日が月曜日であつたこともあるって、主婦の方々からの電話が多くなったようだが、あとで録音を聞いてみると、本当に心から喜んでいただいていることがわかり、ありがたかった。

私たちの運動を支えてくれたのは、老人から若い人まで、男女の比率もほぼ同数の市民の方。そういう人もテレビの前に出てきてほしかったが、「市民というのは非常に奥ゆかしくて目立つ場所にはなかなか出てくれない」(片岡勝君の弁)らしく、事務所の食事の炊き出しをしてくれたおばさん、ポスター張りやハガキ書きを手伝ってくれた人々は、きっと自宅のテレビの前で、この当選を喜んでくれたのではないかと思う。

● まず運動員を胴上げ

「当選が決まつたら外へ出て胴上げだ」というプランは、事務所へ入る前の打ち合わせでスタッフから聞かされていた。

当確が出て開票が進むにつれ、どの市でも得票状況が非常によく「ひよつとすると、トップ当

選！」という声が出はじめたころ、運動員は私を表につれ出した。

「胴上げは、まず運動員からだと思ったんです。菅さんは確かに当選の主人公だけれど、この当選を勝ちとったのは、菅さんも私たち運動員も同じレベルだと思ったんで、菅さんには悪かったかもしれないけど、ここはまず運動員を最初にやりたかった」

事務所の前には二〇人ほどの人が集まり、次々と胴上げが始まった。私の胴上げの時には五〇人以上にふくれあがっていた。どうも道行く人たちがかけ寄つて参加してくれたらしい。

● 「選挙は楽しかった」と運動員

胴上げが進む中で私は運動員の顔をながめていたが、みんな本当にうれしそうで笑顔が輝いていた。

勝てたからいわゆる「選挙ほど素敵なレジャーはない」と思ってしまう。選挙といふと、いわゆる三バン(地バン、看バン、カバン)がない出来ないという思い込みがいまだにあるが、それはウソだと思う。オートバイを飛ばすことも、アドベンチャーに生きることも、選挙とそう違ひはない。選挙をやるというのは、汗を流し、チャレンジすることだ。暑い中や雨の中をポスター貼りに走り回り、宣伝カーについて回るのは、他人からはバカじやないかと思われるかもしれない。しかし、私たちは敢えてやる。チャレンジという意味では、日本で一番大きく権力構造にクサビを入れようとするのだから、こんなスリリングなことはない。

政治参加が大きな楽しみであることは、私の経験からもはつきり言える。それが知られていないのは、今の政治のもつ「閉鎖性」のせいだと思う。

私の選挙を手伝ってくれた運動員は、マスコミのインタビューに答えて、次のように話していた。

「何か自信がわいてきた」

「選挙はこんなに身近かなものだったのか」

「まったく、この事務所に来ると、いろんな面白い人に会えるからたまらない」

「選挙中、いろんな人に声をかけた。こうなると責任感じちやうなあ」

● 「センセイ」とは呼ばれたくない

誰が書いたのか、選挙事務所の壁に「私たちには候補者を先生とは呼びません」と書いたポスターが貼られていた。

候補者と運動員が同じレベルであるという発想は、これまでの運動中、私たちの共通認識としてあった。「金と組織」をもたない候補者が勝つためには、市民の方々（運動員を含め）の支持が必要だった。「候補者」と「運動員」の役割上の分担はあるものの、私たちの理想実現に向けて、その存在意義の上で区別などつけようがないと考えている。

「センセイ」という言葉のもつ響きには、何か「市民的でないニュアンス」がある。それは、私

も運動員も常々思っていた。

当選が決まって、ある運動員が「菅さんもこれからは代議士なんだから、センセイと呼ばよう」と冗談で言っていたが、彼らはたぶん今後も私のことを「センセイ」などとは呼ばないだろう。私も「センセイ」と呼ばれたいとは思わない。

普通の市民生活者が、自分たちの日常生活に支障をきたさない範囲で、どれだけ参加できるかが大きなポイントで、私が立候補者になつたのは、私がその「役割」を果すために一番適したポジションにいたというだけのことなのだ。

以前、筑紫哲也さんと対談した時、彼は「市民は菅直人君を『道具』として使うべきだ！」と発言したが、「道具」としての菅直人に「センセイ」はあてはまらないと思っている。

● バンザイとダルマは市民的でない

「勝った瞬間のボーズは、やっぱりバンザイですか？」

開票日には多くのマスコミ関係者が事務所に来ることになつていたが、彼らは「絵になるボーズ」を求めていた。

勝利のボーズは常識的に「バンザイ」か、本人による「ダルマの目玉入れ」と決まっている。しかし、この事務所だけは、他のところとは一味違う。事務所には「必勝」の文字もなければ、当選ダルマもない。みんなそんなモノモノしい芝居がかつたセレモニーはやりたくないと思って

いた。

投票日の企画会議で、この件が議題になつた。

「バンザイとダルマは市民的でない。やめよう」

「それに代わるものは何だらう」

「Vサインはどうだ」

「拍手ぐらいかな」

「胴上げもいいぞ。野球の優勝のシーンは、ファンも一緒にやつてているからな」

私はこの企画会議に出たわけではないが、スタッフは当選の時の演出についても真剣に考えてくれていた。

私たちは、このことに限らず、選挙戦全体を通じて、常に「常識」を疑つてきた。現在の選挙が非市民的であり、市民が参加しにくいシステムになつてるのは、それなりの理由があるからだし、選挙を「市民選挙」にしていくためには、「選挙の常識」の一つ一つに疑問符をつけ、それを市民的なものに置きかえていくことが大切だと考えていた。

「バンザイ」と「ダルマ」は、「拍手」と「Vサイン」に置きかえられた。

●菅直人ファン・クラブ？

「菅さんがモテるのは団地の奥さんにだけかと思つていましたが、女子高校生にも人気がありますよ。意外だなあ」

電話プロジェクトを進めていた山田まこと君からそう言われて、私は何のことかよくわからなかつた。

「菅直人のポスターが残つていれば、ぜひほしいという女子高校生が何組も電話をかけて來たんですよ。彼女たちは将来の有権者ですから、あまりニヤけないで握手ぐらいしておくべきですよ」「菅直人ファン・クラブが出来るかもしれないなあ」

ポスター・プロジェクトが苦労して作つてくれた今度のポスターは、私も大いに気に入つていた。

このプロジェクトのリーダー鈴木恒一君(33)は、これまで私の選挙のポスターを受けもつてくれたが、私のイメージと市民選挙の流れを非常にスッキリとした構図の中に收めてくれた。

ポスターが欲しいと言つてきた女子高校生も、私自身よりポスターに魅せられたのかもしれない。今回の笑顔のポスターは「ひ弱だ」という支持者からの意見もいただいたが、いままで親が造つてくれた顔が七割。これから十年ぐらいかけて、自分の顔を造つていきたいと思う。弱く見られるのは、私にとつても運動員にとつても不本意である。

●思わぬ人からお祝いを言われる運動員

川田道子さん(25)という、会計全般をやつてくれた女性がいる。彼女は選挙が終わって二日後

に私にこうささやいた。

「菅さん、私の友だちで推せん葉書を書いてくれた人が何人かいるんですけど、その人たちは、ハガキを出した人から『おめでとう。よかつたわね』っていう電話をたくさんもらっているんですつて。それに、菅さんの選挙を手伝っていることを知っているらしい人から、運動員は『おめでとう。頑張ったな』って声かけられるらしいのね。運動員はその人をあまり知らないらしいんだけど、むこうは知っているのね。すごくいい話でしよう」

本当にいい話だと私は思った。私に対するお祝いは当選すればそれなりにあるのだけれど、多数の人が運動員にお祝いを言つてくれるというのは、本当に市民選挙をやったんだなという気分を改めて感じさせてくれる。

似たような話は他にもあった。

電話録音プロジェクトについてはすでに書いたが、これはお祝いを言つてくれる人の名前、住所、電話番号をついでに聞いておこうという目的もあった。しかし、何人かの人は名前や住所を教えてくれなかつたらしい。

「陰ながら応援している者です」

「名前はいいたくないのですが、息子夫婦といっしょに喜んでいますよ」

「運動員の人も本当にご苦労さんでしたね」

テープに録音された多数の市民の方々からの電話には、運動員、支持者一人一人を通じての支

持の輪の拡がりを実感させる内容のものが数多くあつた。

まさに、候補者と運動員が同じレベルで戦つてきて、この勝利を勝ち得たのである。

●恒例の「選挙反省会」

当選が決まって二週間たつた七月六日の日曜日。選挙事務所だった部屋に続々と運動員が集まつた。これまで選挙が終わるたびにやつてきた恒例の「反省会」である。

五〇人近い参加者が集まり、麦茶とお菓子だけの反省会が始まった。私はしばらくは聞き役にまわつた。

司会の片岡君がまず発言する。

「現在、マスコミの眼は自民党の総裁選びの行方にのみ向いています。自民党圧勝と野党連合構想の崩壊という状況の中では仕方のないことかもしれません、選挙前と後とで状況は全く変わっていないことがマスコミにはわかつていません。唯一変わったのが、この東京七区の市民選挙であり、菅直人の勝利であるということについても、マスコミの認識は今一步です。

この東京七区で、将来の政治状況を変える動きが始まっているということをマスコミに向けて宣言はじめているのが、この二週間の大きな運動です。市民選挙の意味を『菅vsその他全部の議員』という構図の中ではつきりさせようと、いま菅直人の声をマスコミの中で増幅させてくるところです」

彼の発言に続き、参加者の一人一人が、自己紹介のあと選挙運動中にやったことを発言し、反省や要望をおこなつていった。

「昔さんには市民感覚をいつまでも持ちつづけてほしい」（川崎卓）

「まさかトップ当選とは思わなかつた」（上野健二）

「昔さん、テレビに出るときはもつと背すじを伸ばして下さい」（梅田康子）

「選挙期間中に使つた物に対する責任感が薄い。もつと大切にしてほしい」（山田雅文）

「遊説では車長の役割が不十分だつた」（小桜初雄）

「スタッフとラインの連携がもう一つ」（木村良史）

「西部地区への浸透が今後の課題だ」（西村幹雄）

「時間はきちんと守るようにしよう」（高倉巖）

私は各運動員が提案した意見や疑問について答えると同時に、今後の抱負を述べた。いつもの反省会と違つて勝つた後だけに、かなり積極的な意見が出され、予定時間を大きく上回つた。

●市民選挙の実感

一九八〇年六月二十三日。私たちは勝利した。

市民選挙は合法闘争である。現在の公職選挙法は、市民常識からみても、かなりおかしな法律ではあるが、市民の力を結集した選挙をおこなうためには、あくまで「合法的なたかい」でな

ければならない。一般的の市民は、不正をしてまで選挙で勝とうとは思つていらない。自分たちは正しいやり方で政治に参加し、社会を変えていくのだ、という誇りが私たちを支えている。

金の面でいえば、私たちはカンパ、株による入金状況を公開し、また私自身の資産を公開することにより、議員、選挙活動のクリーンさを市民がチェックできるように可能な限りの手段をとつてきた。

そのことが、ロッキード事件以降より明確になつた自民党などの金権腐敗の政治体質に対して、市民の怒りを結集できたのだと考へてゐる。

私は「市民政治の実現」をメイン・スローガンにして戦つてきた。政治といい選挙といい、「金と組織」をもたない者には縁がないという「神話」が、いつのまにかつくられている。「市民政治」の実現をめざすためには、まずこの「金と組織」の神話を粉砕するところから出発しなければならない。金と組織がなくとも「出たい人よりも出したいと思う人」が政治に参加できるシステムを見つけ出さねばならない。これが私たちの基本認識であつた。

そして、そのためには、私たちの当面の戦いのフィールドとなる選挙戦を「市民的に」戦い、勝ちとることが必要だったのである。

「市民選挙」は「市民政治誕生」のための布石であり、「市民政治実現」のための実験であつたといえよう。

私はこの選挙に勝てたことで、いわゆる市民派を勇気づけることができたと思う。これまで市

民派がやれたのは地方議会と参院全国区だけだった。しかし、やれば衆議院でもできるということがだ。これまでの戦いを通じて「市民選挙のノウハウ」もある程度できあがつたと考えている。

そして、これがやれたことで、全国の市民派のネットワークを拡げることもできると思つていてる。

篠原一さんは「朝日ジャーナル七・四号」で次のように述べておられる。

「東京七区から立候補した市民運動家出身の菅直人氏は革新派として、この都市流動票をかづさらって断然トップの地位をかちえた。とすれば、この流動票は必ずしも革新派に流れないものということはできないだろう。革新派がその行動様式において、その政策において、そしてまたその人物において、時代に適合したフレッシュなものを提示することができれば、この社会層は元来安定志向の傾向がつよいにしても新しい身のおき場を見いだすことができるかもしれない」

II 市民運動を市民政治へ

●三度目の正直

私はこれまで衆議院選挙に二回、参議院選挙に一回立候補している。

第一回目の立候補は昭和五十一年初冬の衆議院選挙。東京七区から革新無所属で立候補したこの戦いは、七万一、三六八票で次点に終わつた。

第二回目の立候補は昭和五十二年夏の参議院選挙。社会市民連合の代表として東京地方区から出馬。この戦いは十九万九、一九二票を集めながら及ばなかつた。

第三回目の立候補は昨年秋の衆議院選挙。東京七区から社民連公認として立候補。雨にもたたられて六万七、四八〇票で落選した。

今度は通算すると四回目となるが、東京七区からは三回目の立候補なので、「三度目の正直」と言われたりした。

私が「政治」というものにかかわった原点は、こうした選挙への立候補よりはるか以前、東工大時代の学園闘争にさかのぼる。昭和四十年の入学だから、入学と同時に日韓闘争、そして卒業の頃は学園闘争になるわけで、私の大学時代は学園闘争抜きには語れない。

これが政治についての最初の経験だつたし、それが私に与えた影響も大きかった。学園闘争の中で私自身、全共闘、民青、体制側のグループなどのグループにも共鳴できず、第四のグループ「全学改革推進会議」を結成したこともある。

在学中から社会問題に关心を持っていたが、今の私のほぼすべては、この東工大時代に形成されたといつてもよいと思う。それほど私にとって、この五年間は大きな時代だった。

やがて就職、弁理士の資格をとり、昭和四十九年に独立して菅特許事務所を開設するわけだ

が、市民運動に本格的にのめり込んでいったのも、この頃のことである。

●住宅、都市問題から市民運動へ

昭和四十七年。当時は地価の高騰によって一般市民の住宅取得がますます遠のく感があった。この時期、宅地供給促進をねらった「市街化農地の宅地並み課税」が提唱されたが、自民党はもちろん他の革新政党も、この法案に骨抜きの圧力をかけた。

私は、住宅問題の解消につながる宅地並み課税の推進の運動を仲間と共に始め、「より良い住いを求める市民の会」（以下「市民の会」）を結成した。

この過程で、多くの学者、専門家の協力を得て勉強の機会をもつた。まず、昭和四十七年三月に「市民の会」の主催で市街化農地の宅地並み課税推進集会を開催、次いで十一月には「市民の会」と「都市問題行動委員会72」の共催で、一橋祭でシンポジウム「都市問題への挑戦」を開催した。副題を「革新都市自治体と市民の役割」とし、美濃部東京都知事、飛鳥田横浜市長、石塚國立市長、都留一橋大学長（いずれも当時）の出席を得ることができた。

こうした一連の運動の中で、住宅問題は広く都市問題全般の中で考えなければならないこと、あるいは都市経営の観点で考える必要を感じた。

住宅問題に取り組むなかで、いくつかの消費者グループと知り合い、協力して運動するようになつた。

●市民運動のテーマに取り組まない既成政党

そうした接触のなかで、洗剤や食品添加物の安全性を問題とするグループ「恐怖の化学物質を追放する会」が発足。無公害洗剤の普及の実践運動をはじめた。

私たちは大学祭や青空テントを利用して、無公害洗剤の販売などの運動を展開していくた。

住宅問題や都市問題、そして食品公害に取り組んできたなかで、私は既成政党が保革を問わず、いずれの政党の政策も極めて貧弱で、立ち遅れていることを知らされた。

自民党は、確かに産業化的展開という点で高度経済成長を推し進めはしたが、それに伴い当然予想された都市住民の増加や、都市化の進展に伴って発生する住宅問題には、全くといっていいほど無策であった。また革新のかなめであつた社会党の場合も、外交問題や賃上げには大きな関心を注いだが、所得の上昇という面ではとらえきれない都市住民の生活に必要な社会的設備や食品公害などには、ほとんど目を向けようとしなかつた。

私たち市民運動グループが提起する問題を解決しようとする場合、やはり政治の場での展開が必要なのだが、しかし、私たちの要求を真剣に受けとめ、それを政策化し、実現を図ろうとする政党は見い出せなかつたし、实际上これまで存在していなかつた。

このころから、私は政治の中に私たちの願いを実現するためのシステムをつくることの必要性を、漠然と感じるようになつていた。

● 拡がれ市民の理想選挙

昭和四十九年、オイル・ショックを契機に異常な物価高、企業のぼろもうけなど、社会体質がかなり金権化した。政治もその例外ではなかった。選挙は、政党、大企業、労働組合といった大組織に独占され、市民は観客席に追いやられていた。

そんな中で、私は選挙を市民の手に取り戻すべきであるという思いにかられていた。

すでに昭和四十八年九月、市川さんの主催させていた「理想選挙推進市民の会」に参加していった。市民の会は十一月、参院選に東京地方区から紀平てい子さんを、全国区候補者として市川房枝さんを推せんした。しかし、市川さんは辞退した。

私たちがあきらめることなく、「よりよい住いを求める市民の会」「恐怖の化学物質を追放する会」「消費を考える葛飾の会」「理想選挙推進市民の会慶應大学グループ」の四つの市民グループで市川さんに出馬を要請した。

昭和四十九年五月、私たちは「市川房枝さんに参議院全国区立候補を促すため、供託金を募る運動」を開いた。全国区立候補に必要な六十万円の供託金を集めると同時に、市川房枝さんに對し、「出たい人より出したい人を」これこそ理想選挙ではないか、断われないはずである、と強く立候補要請をくり返した。

そして五月二十八日、ついに市川さんから立候補の承諾をとりつけたのである。

紀平てい子さんの選対がすでに組み立てられていた関係から、市川さんの選対については私が選挙事務長となり、選挙態勢を組みはじめ、青年グループを中心に「市川房枝さんを推せんする会」を結成した。事務所を婦選会館内におき、活動を開始した。

私たちは運動の基本的な方針について、市川さんをまじえて何度も話し合った。その結果、「理想選挙」の基本は厳正に守ること、「理想選挙」の枠内で新しいアイデアに基づく運動をおこなうことにはかまわない、という方針を決めた。

私たちはこの理想選挙を一九三万八、一六九票、第二位の得票により勝利した。

● 市民運動の流れを議会へ

昭和五十年の統一地方選挙において、各地で市民運動グループから区・市議選に仲間を推し出す動きが拡まつた。

こうした動きに私は、各種の反対運動に代表される「否定論理型市民運動」から建設的提案を行い、さらには具体的改革のための立法を目指す「市民自治型市民運動」への流れを感じた。

私たちは、仲間の田中栄君を推し出し、武藏野市議選をたたかった。「市民運動の流れを議会へ」というスローガンのもとでたたかれたこの選挙では、参院選のさい全国キャラバンで知り合つた各地の市民運動グループなど二十近いグループとの連携をよびかけ、共闘することに成功した。

結果は一票差の惜敗に終わったが、政策作りなどを通じて自治体のもつ重要性を強く感じた。

この選挙とその前の市川選挙を通じて、市民グループによる選挙がやれることを私たちは認識した。機関紙『シビル・ミニマム』も定着し、月一回の市民セミナー、その他の各種研究会も日常化していった。グループの輪も拡がった。数度にわたるトレーニングを通して、私たちなりのやり方みたいなものも出来上がってきた。

●無から有への挑戦

昭和五十一年、ロッキード疑惑が発覚した。このロッキード事件は、戦後三十年の日本の政治を象徴する事件であった。保守の側にも革新の側にも、金でしか動かない構造が生まれ、状況の変化に少しも対応できない体质が政治を覆いはじめていた。特に「政治家」が生まれるルートが特定化し、それゆえに力量の低下、硬直化が表われてきていた。

この時までに、すでに市民運動を通して直接、あるいは間接にトレーニングされた市民が層として存在していた。私たちはここに「市民参加による政治」の可能性を見出すことができた。

こうした認識の下に、グループの中で何度も話し合いが持たれた。その結果、この衆院選に私が立候補することが決定された。

「今回の選挙が『既成政党のいづれかを選ぶだけの選挙』となれば、市民の意思表示の場となり得ず、ますますシラケが深まり、拡大するだけである。選ぶべき政党を持たない市民運動グルー

プが選挙に積極的に参加して自分達の仲間を立候補させることこそが、こうした状況を打破するため、今必要なのではないだろうか。

こうした観点から、今までそれぞれのテーマについて市民運動を続けて来た我々のグループは、仲間の中から候補者を推薦し、東京七区で闘うべく準備を進めている。我々だけでなく、全国の多くの市民グループが、自民党に対決する市民選挙に起ち上がるこことを強く期待する。

こうした市民選挙の拡がりが、これまで個別テーマ毎の市民運動や、自治体における直接的市民参加にとどまらず、国政選挙においても市民参加による新しい政治状況を生み出す第一歩となることを確信する」

これが昭和五十一年秋、立候補を決意して、各市民グループに対して行なった市民選挙の呼びかけ文である。私たちの選挙に対する考え方は、この中に要約されていると思う。が、呼びかけに積極的に応じたグループは少なく、結局は私たちのグループだけでやることになった。

結果は、七万一、三六八票で次点。予想以上というのがいつわらざる気持だった。

私は政治状況を変えようとする土壤が大きく拡がりつつあることを強く感じた。そして、市民のための政治勢力をつくるなければならない、多くの人がそれを望んでいると結論するに至った。

●江田三郎氏と社会市民連合

昭和五十二年三月下旬の江田三郎氏の社会党離党は、その余りにもハムレット的な行動のた

め、私たちには衝撃的とは言い難かった。しかし、無党派市民層の結集を呼び起こすかについては強い関心をもつっていた。

そんな時、同年四月二十四日、私たちが結成していた「あきらめずに参加民主主義をめざす市民の会」は江田三郎氏を含む社会市民連合のメンバー三氏を招いて公開討論会を行なった。その席で、新しい政党のあり方について話し合う機会をもつことができた。当日の江田三郎氏はかなり疲労の色が濃かつた。

しかし、話し合ってみて、利己的な欲をみじんも感じさせない本当に覚悟を決めて行動する人の迫力を感じた。

江田氏との話し合いでの印象と、氏に共鳴してすでに行動している人々に接して、彼らと協力していくべ、「社会市民連合」を旧来の硬直化した社会党に代わる市民の政党を作りあげていくことができるという可能性を感じた。私は、江田氏から参加の要請を受け、社会市民連合への参加を決意した。

こうして社会市民連合の本格的な活動展開の準備を進めていた矢先、五月二十二日、江田三郎氏は突然死去された。この突然の死は新しい政治の流れを一時は停止させるかに思えた。

●市民債と参議院選

「社会市民連合は、さしあたり、一つの大きな可能性をもつた小さな集団として出発する。

しかし、流動と再編成が不可避となっている時代には、力をもつのは、組織の大きさではなくて運動の質である。社会市民連合は、既成の諸政党の枠を破るまったく新しい集団として発足し、その現状認識の確かさと政策の革新性とによって、改革を求めつつ政治の現実に失望しているすべての意識ある人々の積極的な支持と協力を求めるなどをさしあたつての課題とする」

（社会市民連合「一九七七年四月の提案」より）

江田三郎氏の死は社市連にショックを与えたが、その死去を機に、彼の思想を支持する人々が結集したと思う。大柴滋夫氏の社会党離党、社市連代表就任、そして江田五月氏の代表就任、参院選立候補が決まった。

私も代表の一人となり、あわただしさの中にも、江田三郎氏の遺志を守り、それを実現させるべく、新しい体制をつくり始めた。

体制づくりのネットは党運営資金の確保であった。五月中旬、社市連が第一次公認候補を発表した時、六人の候補者は「企業・組合献金は一切受けない」という誓約書に署名した。しかし五月二十二日の江田三郎氏の死去、同二十五日の社市連準備会の発足などで会員の意識は大きく変化していった。

こうした中で「市民債」というアイデアが市民委員会を中心に生まれてきた。
社市連はお金については①個人からのカンパのみとし、企業・組合など組織からは一切金をもらわない②会計はすべて公開とする——の二原則を宣言していた。

市民債は単なるカンパと異なり、一年間に於いては売り払うことが可能、つまり、社市連を一年間見守る中で希望が見出せない時、あるいは社市連が市民債購入協力者からみて、ふさわしくない行動をとった時、払い戻しを請求できるシステムをとっている。

六月十一日、市民債の第一回街頭販売では、一時間半のうちに十九人が四万円余の債券を買つてくれた。こうして新しい資金集めのルートの展望が開けた。

私自身、この時、準備不足は承知しながらも参議院東京地方区に立候補した。しかし、一九万九、一九二票、第八位の得票に終わった。

●社会民主連合

この参院選で社会党は敗北した。七月十三日、社会党の中執委で成田委員長が退陣を公式発表。石橋書記長も同調。以後、党内主導権をめぐり協会派・反協会派の対立が再燃。

こうした状況の中で、九月二十七日、「新しい流れの会」の田英夫、檜崎弥之助、秦豊の三国会議員が離党を通告する。そして、三名の国會議員で「社会クラブ」を結成する。

五五年体制の崩壊がささやかれる中で、昭和五十三年一月二十二日、社市連と社会クラブの合流による「社会民主連合」結成準備大会が開催され、三月二十六日、「社民連」は正式結成大会を開催、田英夫代表ら執行部を選出した。この時、私は社民連副代表となり、市民委員長に選出された。

こうした経過を経て、昨年（一九七九年）の衆議院選を経験することになるのだが、この選挙は、社民連というものの中での選挙、さらに言えば、社会党といいうものの選挙を知る上で、すくいい機会であったといえる。

選挙戦のすすめ方において、私たちがこれまでイメージし、あるいは実践してきたやり方と、既成の社会党的選挙方法は、パターンが全然違うことが明確にわかつた。

結局、私たちがこれまでやつてきたやり方で行なう「市民選対」と既成の方法を踏襲する「社民選対」の二本立てで、この選挙態勢は組まれた。社会党スタイルを引きずる社民連選対は、情報についても小人数に限定し、ボランティアの運動員に公開するということではなく、選挙運動投入資金の予算化についても、最終的に本人におつかぶせればよいというスタイルをとるなど、これではいい選挙は出来ないと多すぎた。

こういうことは「体質」の問題だと思うが、選挙に限らず、既成政党的部分との違和感はいろいろあつた。

例えば、社民連の中でいろんな議論をやる際に、議会の会派問題や共闘問題、連合論、選挙候補者問題などについては非常に熱心に議論する。しかし、「リサイクルへの取り組みをどうするか」とか合成洗剤の運動にどう取り組むかといった話になると、トーンが極端に落ちてしまう。

こういう「市民派」と「社会派」の相互のカルチャー・ショックというのは、かなり大きいものがあった。そのいくつかは正直、現在もなお社民連がひきずつている問題である。

ただ、私たちの今回の勝利は、「市民選挙」方式で十分選挙が戦えるという「市民選対方式」

の有効性を実証し得たばかりか、社会党の都市部における低落を見ても、むしろこうした「市民型」の方式でしか、今後の選挙を勝ち抜いていく展望はないと言つてもよいことを示し得たと考えている。

社民連自体もこのようなやり方の効果について実感としてわかつてきた段階で、徐々に市民的体質が強まっていると思つていてる。

要は、行きどころのない革新浮動層をひきつける政治体制づくりを目指すためには、選挙においても、浮動層を巻き込む方式でその受け皿とならざるを得ず、既成政党的方法論では何もかわらないということである。

一般の人々はイデオロギーや理論上の議論を期待しているのではなく「生活の質的向上」という具体的な要求の実現を欲しているのである。

●雨にも泣かされた七九年衆院選

昨年の衆院選挙は、私にとって一番苦しい戦いだったといえる。

その一つの理由は、先にも書いたように「市民選対」と「社民連選対」の二本立てという変則的選対を組まざるを得なかつたという内部事情にあるが、さらに、この選挙は、かつてロッキー・ド事件のようなものが背景にあるわけではなく、いわば平時の選挙であつたためである。パワー

という意味でいえば、まだ平時の選挙において他の既存政党に真っ向から対抗するだけのものになかつたからである。

最初の衆院選での得票数が七万余票、その次の参院選東京地方区での七区における得票数が五万票と、七割に減少している状況から、今回は三万票しかとれないのではないか、という「七・五・三理論」がささやかれる中で、八〇年代に向けて、私自身がその挑戦権を失う危険性を大いにもつっていた。

この時期「ここで菅直人をつぶしてはいけない」というグループが湯川憲比古君を中心に生まれた。

大学を卒業して一年ぐらいからできていた広い意味でのネットワークの中で、私に対して「ここでつぶすのは、次へのつなぎとして、惜しい。しかし、放つておくとつぶれてしまいそうだ。客観的に社民連も大して強そうでないし、菅周辺も放つておくと危い」ということで強力なフォローが開始された。

このエネルギーが「市民選対」につながり、その結果六万七千票の得票につながったといえる。雨にもたたられ、結果的には次々点に終わつたが、得票率でみると前回の最初の衆院選で得た一一・七%がこの時一一・九%に上昇した。

この結果、私たちは「生き残り作戦」が成功したと考えた。今回の選挙結果をみても、この時の場面は相当大事な比重を占めているといえよう。

正直言つて、この時の善戦がなければ今回の圧倒的勝利はなかつたであらうし、市民選挙の実現も望めなかつたかもしだれない。

この選挙では今回の戦いの原型がいくつかつられたが、その一つに「菅直人株」がある。かつて社市連において党資金獲得のために「市民債」を発行したことがあつたが、「菅直人株」は個人カンパを集めるための道具として考案された。いってみれば「領収書」のかわりに「株券」をお渡しする仕組みである。

株券の裏には「菅直人株」発行の趣旨が次のように記載されている。

「『菅直人を応援する会』は一人一人の市民のお金と力と知恵をもちよる基本的な民主主義の原理によって市民参加の政治の推進をめざします。

この基本理念にのつとり、菅直人株を発行します。即ち、"株"とは、事業をおこす時、大衆（市民）がお金を持ち寄る仕組みです。菅直人君の政治活動を応援する市民が"菅直人"を買うことにより、市民の政治をつくろうとする趣旨です」

この菅直人株と共に当時、話題になつたものに「市民画廊」がある。

アマチュア画家の方々の作品を、「応援する会」で用意したギャラリーに展示し一般の人々に買つていただこうとするもので、売り上げの何割かをカンパしてもらつた。

こうした既成の方法を超えたいくつかのアイデアは一つ一つ「市民選挙のノウハウ」としてつみ重ねられていった。

●湯川憲比古君と新体制づくり

湯川憲比古君(33)が、私の選挙に直接かかわつたのはこれが初めてだつたが、選挙戦の終盤あたりから、この市民型選挙の可能性について、「いくつかの戦略を立てれば実現可能である」と判断し、自信を深めていた。

彼は、あの雨の中で菅直人に投票した六万七千余票は、菅直人のローア・リミット（最低得票数）であると判断した。この票に何票上積み出来るかで勝負が決まるからには、強力な地域の掘り起こしをするべきだ、という結論がでた。

湯川君の提案で選挙の後、毎月一回、企画会議がもたれた。出席者は、私、湯川憲比古、宮城健一、片岡勝、大宅憲一、貴島正道、羽場頼三郎、川田道子、神原正、永井秀哉、遠藤昌弘、佐々木五郎、星野隆、戸叶晴雄等のメンバーである。

この会議で、残務整理として今回の選挙ではつきり支持者とわかっている人々の名簿をつくること、それをマスター名簿として、各市別名簿と人脈別名簿をつくる作業を始めることが決められた。

また、遊説を細かくすることで各地域への浸透を図ることも決められ、実行に移された。

一方、湯川憲比古君は、自己の地域戦略に基づき各地域のキー・マンをさがし出そうと各地区を回りはじめた。

今から思えば、この次なる戦いへの準備が今回の突然の解散にスムーズに対応できる体制をつくったのだといえる。この時は、解散などまだ先のことだと思っていたのだが……。

III 市民選挙はどう展開されたか

●五月十六日深夜、突然の解散

その夜、私は参議院選挙の地方区での他党との選挙協力のため山形県にいた。社会党が内閣不信任案を提出するという話があり、衆議院議員である阿部選対委員長の代理で急ぎ山形に飛んだわけである。私を含めて誰もこの内閣不信任案が可決されるとは思っていなかった。東京にいる私たちのグループは、秦豊参議院議員の再選のために、この夜も取り組みについての協議をしているはずであった。

確かに夜六時すぎだったと思う。内閣不信任案が可決されたというニュースが飛び込んできた。自民党非主流派の造反によって可決されたこの不信任案に対し、大平首相は衆議院を解散すると発表した。

この時、湯川憲比古君は東京・中野の「秦豊を再選させる市民の会」の事務所で、メンバーの長友、田上、沖山君たちと協議していた。

一方、片岡勝君は自宅でこのニュースに接したらしい。

中野事務所から「菅直人を応援する会」の主要メンバーに電話が入れられた。「午後十一時に中野事務所に集結せよ」ということである。この時集まつたのは、宮城健一、片岡勝、湯川憲比古、羽場頼三郎、貴島正道、川田道子さんたちであつたらしい。田上等君は地元神奈川一区へ引き返し、自分の選挙態勢に取り組んだ。

「今回はいける」この中野事務所での結論は明快だった。その場が即選挙対策会議になり、そのまま手はじめに私のところへ電話が入つた。

私自身、迷いは全くなかつた。ロッキード事件から今回の浜田幸一ラスベガスとばく事件まで、金権一掃は遅々として進んでいない。しかも、このような解散は国民を全く無視したものであり、うまく市民に訴えていけば、市民政治の実現の展望は大いにある。

そう判断した私は、電話口に出た宮城君に「今夜の夜行で帰る。明日からのスケジュールについて話を詰めてほしい」と頼み、急いで帰京準備にとりかかった。

●五月十七日、吉祥寺駅頭で緊急演説

中野事務所に集まつた連中は、次の日の朝、国電中央線吉祥寺駅前で街頭演説することを決

定していた。

これまで何回か選挙を手伝ってくれている人たちに、電話で明朝のビラまきをお願いする一方、配布ビラの作成にとりかかった。ビラといつても、そんなに急に印刷できるものではない。過去につくったビラを切り貼りすることで大きなレイアウトを決め、あいている部分に今回の解散と自民党に対する私たちの見解を書くという簡単なものである。とりあえず三百枚ほど印刷する必要があったが時間的に印刷は間に合わず、さしあたり必要な枚数だけをコピーすることにした。

五月十七日午前七時。吉祥寺駅に集まってくれたのは約二十名。私は夜行で上野駅に着き、七時すこし前に吉祥寺へ到着した。

演説をはじめ、昨夜の解散劇に対する私たちの主張を出勤途上の人々に訴えた。なかには解散のことを知らない人もいた様子だが、ある程度の反応は感じられた。

約二時間、私たちは訴えつけた。午後になって「応援する会」のメンバーと協議に移った。

明日からの遊説計画のスケジューリング、選挙への態勢づくり、戦い方の意思一致等々「応援する会」が昨夜まとめた話を聞き、私の考えを述べる中で、当面の動き方についていくつか決定をおこなった。

一方、明日からの遊説のためのビラの作成にとりかかった。知り合いの印刷業者が、完全原稿なら明朝までに印刷できるといつてくれたので、大急ぎで手書きビラをつくり上げた。印刷は夜

を徹しておこなわれた。

●ダブル選挙と菅直人選挙態勢

解散が決まってからの選挙態勢がスムーズにいった理由の一つは、前回の選対の骨格がそのまま残っていたこと、そして、そのメンバーが秦豊候補の支援に向けて、臨戦態勢でスタンバイしていたこと、同時に、前回の選挙の残務整理がほぼ完了しており今回の選挙へうまくつなげることができたことなどであった。選挙とは「勢い」のことであるという感じを強くもつたのは、この時期からである。

五月十八日、日曜日。私の自宅で会議をもつた。片岡勝君と宮城健一君が座長となり、今後に向けての役割分担が決められていった。この時期は時間と状況との競争であった。全員で協議して決めるだけの時間的余裕はなく、役割と責任者が次々と決められた。各運動員は自分の担当を精力的にこなしあじめた。

事務所の選定、原稿の作成、ハガキ、ポスター、ビラ等の原稿づくり、立候補声明の記者会見……。

前回の選挙態勢が原型となり、この日の会議で、選挙対策事務局の機構図はほとんど決定した。この間の対応の素早さは、私自身も驚くぐらいの見事さで、おそらく、このダブル選挙を戦おうとしているどの候補者よりも早くかつたのではないかろうか。しかも、この動きは社民連関係者

ではなく、これまで私を支えてくれた普通の市民、サラリーマン、学生など、私たちが前回の選挙で「市民選対」と呼んでいた人たちの手で進められていったのである。

●あわただしいスタッフ

こうした素早い動きを見て、私は「今回は候補者としての役割に徹しよう」と心に決めた。市民運動を始めたころ、あるいは、市川房枝さんの選挙事務長を務めたころの経験から、私自身、候補者というより、実務家タイプであると自分で思っている。細かいところにまで眼がいくし、選挙法をはじめ選挙事務に関しては、おそらく私たちのメンバーの中で一番よく知っているといつていいだろう。そのため、つい他の運動員のやり方に口を出してしまう。

これまでの選挙でも、そういうことが何回もあった。運動員の眼からみると、いつも私はイライラしているらしく、「イラ菅」という、あまりいただけないニックネームをつけられていた。「今回は候補者に徹しても大丈夫だ。むしろそのほうがうまくいく」と思ったのは、この間のスタッフの対応ぶりを見、同時に今回の選挙戦の状況を見てのことであった。

不信任案可決、衆院解散、衆参ダブル選挙という異常な政治状況と金権腐敗政治への市民の怒りという社会状況の中では、私個人が一人相撲をとったところで意味はなく、この時代の流れを市民政治実現に結びつけるためには、候補者に徹し、候補者の役割を完遂することが重要だと判断したのである。

いいかえるなら、他のスタッフと同様、私自身も市民政治実現のためのスタッフの一人にすぎないということを自分に言いきかせようとしたのである。

同じように、他のスタッフも、自分の持ち場で最大限の役割を果そうとしていた。

湯川憲比古君——この類い稀な戦略家は、今回の選挙を“参加型市民選挙”でやりぬこうと考

え、そのための戦略を着々と進めていた。

川田道子さん——実務的作業の総元締めとしての彼女の役割は、まず選挙事務所をさがすこと。電話を申し込むこと。そして当面の資金をやりくりすることであった。

片岡勝君——私以上に活動的な彼は、政見放送や新聞広告の原稿づくりなど、主にマスコミ向けの様々な準備をはじめていた。

宮城健一君——これまで何度も私の選挙を手伝ってくれているこの男は、ポスター作成のための手配をすすめ、写真家の鈴木君との打ち合わせをはじめていた。

羽場頼三郎君——数少ない地元社民連メンバーとして、彼は「湯川構想」に基づく地元対策に乗り出していった。遊説や協力者さがしが主な仕事だった。

沖山一雄君——彼は今度の「秦豊を再選させる市民の会」の一員として「リサイクル運動」を展開しようとしていた。ゴミを資源として再利用することを呼びかけるキャンペーンのため、「全国リサイクル・キヤラバン」を編成、五月末からまず西日本をまわることになっていた。今度の選挙のため、とりあえず六月八日（日）、立川市の歩行者天国で菅直人選対とドッキングす

ることを打ち合わせ、五月末から福岡市を皮切りに広島、岡山、神戸、大阪、静岡、横浜をまわる予定で出発していった。

貴島正道氏——故江田三郎氏との会見の時に初めて会い、社会市民連合以来の活動を通して私の最も尊敬する人。地元武蔵野市在住ということもあって前回の選挙で選対委員長を引き受けてもらい、それ以来、私たちのグループのゴッド・ファーザー的存在。選挙戦では、みんなが働きやすい“環境作り”が自分の役目と自任させていた。

この他のスタッフも、自分の役割を自覚しながら、あわただしく態勢づくりを進めてくれた。

●東京七区とは

私の選挙戦場であつた「東京七区」について、ここでその概要を説明しておこう。

衆議院の東京都内の選挙区は十一区まである。このうち「第七区」は一般に「三多摩」のうち“北多摩”と呼ばれる区域で、武蔵野、三鷹、小金井、国分寺、国立、立川、昭島、武蔵村山、東大和、東村山、小平、清瀬、田無、東久留米、保谷の十五市によって構成されるエリアである。面積は約二〇万五、一〇三平方キロと広く、総人口一四九万三、二一六人、有権者総数一〇四万一、六六四人、普通世帯数五三万六、九五九世帯（いずれも昭和五十五年七月一日現在）という現状である。

定員四人。解散前の勢力分野は、自民党一人（小沢潔）社会党一人（長谷川正三）、公明党一人

（大野潔）、共産党一人（工藤晃）という配分で、これまで「無風区」とされてきたところである。

前回の選挙と比べ変化のあった点を簡単に拾つてみよう。まず、郵政大臣を務めたこともある自民党の福田篤泰氏が出馬を取り消したこと。これは後で保谷市議秋本文夫氏が後継者として擁立されるのだが、自民党の主流、反主流の内紛を引きずった立候補であった。

二つ目は、自民党の小沢潔氏が前回、大平正芳名で怪文書を流し、社会問題にまでなっていたということである。彼は、政界浄化が争点の一つとなっていた今度の選挙で、私たちの常識からして許しがたい存在であった。

三つ目は、新自由クラブが私の推せんを決定してくれたことである。前回の選挙では、牧山あきお氏が同党から立候補していたが、牧山票は私の支持層とかなりオーバーラップしていただけに、同党の推せんは私にとつて非常に有利な条件であった。

こうした変化を含みながら、定員四人の東京七区は菅直人（社民連）、小沢潔（自民）、秋本文夫（自民）、大野潔（公明）、長谷川正三（社会）、工藤晃（共産）の六人で争われることになった。

●立候補者のプロフィール

今回、東京七区から立候補した六人の候補者のうち、私を除く五人のプロフィールを簡単に紹介しておこう。

工藤あきら（共産・現）——東京生まれ。五十四歳。当選二回。商工委員、予算委員を歴任。

現在、党幹部会委員、経済政策委員長。

大野きよし（公明・現）——東京生まれ。五十歳。当選五回。党国会対策委員長、副書記長を歴任。現在、党中央執行委員、選挙対策委員長。

小沢きよし（自民・現）——五十二歳。都議三期。当選一回。地方行政委員、物価対策特別委員、党文教局次長。

長谷川正三（社会・現）——東京生まれ。六十七歳。当選五回。文教、通信、法務、内閣委員を歴任。党都本部委員長。現在、党中央執行委員、中小企業局長。

秋本文夫（自民・新）——四十二歳。保谷市議三期。福田篤泰秘書。三多摩道路及び上下水道委員会第二委員会会长。文教厚生委員長、自民党保谷支部幹事長を歴任。

（選挙公報より）

●問われる市民常識

立候補にあたって、私と「菅直人を応援する会」は五月十七日、次のような立候補声明を発表した。

「私は、今回の不信任案決議に伴う総選挙に、ここ東京七区から十年来の主張であります市民政治の実現のため、社会民主連合の公認と『菅直人を応援する会』の方々の推せんを受けて立候補することを決意しました。

今回の解散は、明らかに自民党政権の自らの腐敗、金権体質の隠ぺいと利権の温存を目的としたものであり、絶対に許すことのできないものです。
今や、腐敗した自民党政権に替わる清新な良識のある革新連合政権をつくることが目前の課題であります。

しかし、その新しい連合政権も、現在の既成政党の枠組みの中だけの動きにとどまるなら、八〇年代の新しい政治課題に十分対応できるものには成り得ないでしょう。

私は、この連合の中に市民の政治エネルギーを注入し、新鮮な市民感覚をふきこむことを私の使命だと考えています。

ご承知のとおり、私には組織も金もありませんが、すでに多くのボランティアの方々から力強いはげましと協力の申し入れを受けており、勇気と自信をもつてこの闘いに挑むことができると思っています。

多くの方々の御協力、御支援をお願いします。

次の声明は「菅直人を応援する会」の出したものである。

「市民感覚から遊離した既成政党。密室の中で取引される利権と腐敗の政治体質。私たちは、こうした政治体質を打破し、参加と公開による市民政治の必要性を訴えきました。

今回の解散劇も私たち市民の感覚、市民の論理から全くかけ離れたところで演じられたものです。

しかしながら、私たちがかねて問題にしてきた自民党中央のなれあい政治に亀裂が走ったことは事実です。

最早、私たち市民は無関心でいられません。再び党利党略のまかり通る政治が生まれることを許せません。

菅直人を先頭に、私たち市民がもつている怒りと宏大なエネルギーで参加と公開の市民政治の道を切り開こうではありませんか。

昭和55年5月17日

菅直人を応援する会

私たちの主張は明快であった。自民党自体が体質的に市民常識、市民感覚から遊離し、八〇年代への明確なプランを見出せなくなつており、しかもその状態でなお、これに代わる既成野党の市民的成熟がすんでいないのなら、私たちの手で市民の声を代弁する議員をつくろうというのである。

東京七区は日本の政治状況の縮図であり、私たちは、市民常識がどこまで通用するのか、その大いなる実験を始めようとしていた。

●小沢を落とし、菅のトップ当選を！

今回の選挙戦において、前半（大平首相の死去まで）の争点は「政治の浄化」であった。大平死

去以降、この争点は「弔い合戦」により奇妙にすりかえられた形になつたが、七区において「政治浄化＝金権体质の市民パワーによる一掃」は、私たちの強く訴えたテーマであった。

七区では、すでに述べたように、前回の選挙で「怪文書事件」をおこした自民党小沢候補が出馬していた。

私たちは「菅直人のトップ当選」を目指す一方、こうした金権体质をもつ候補の政界への進出阻止を大きな運動目標とした。

「出たい人より出したい人を」というキャッチフレーズは、市川房枝さんの長年の主張だが、小沢候補は私たちの感覚からして「出てほしくない候補」であり、それ以上に「当選してほしくない候補」であった。

この運動目標に従い、ビラ原稿、演説原稿、遊説計画等が用意されていく。

ビラでは「腐敗の政治に代わる“市民の政治”を」と訴え、街頭演説、立会演説においても、七区から立候補していた他候補があまり小沢攻撃をしない中で、終始、金権腐敗への市民の怒りを市民パワーに変えていくことを訴えつけた。

遊説計画も、第一声を小沢候補の地元である国立市の中央線国立駅前でおこなうことにし、正面からこの問題を取り組んでいった。

この戦術は、日数を重ねるうちに地元国立市民の支持を受けるようになり、「名前は言いたくありませんが頑張って下さい」といった激励電話も目に見えて増えていった。

私たちには、遊説先でも、事務所で電話受けをしながらも、運動に対する確かな手ごたえを感じていた。

●「金と組織」の神話

「選挙は金がかかる」「企業や労組などのバックをもたない人は当選できない」いつの間にかくられた政治神話が市民の上に重くのしかかり、市民の政治への無気力感を増幅させてきた。「金と組織」の神話が事実だとすれば、無党派の一般市民は、政治に対して何もできなくなってしまう。

確かに政治には少くない金がかかり、各種の圧力団体は政治に大きな影響力をもっている。しかし、私たちが主張する市民政治を実現させようとすれば、まずこの「金と組織」の神話を「選挙のレベル」で粉碎しなければならない。

「金と組織」型選挙を市民型に置き換えることが、私たちの当面の課題である。市民的に選挙戦を勝利した後でなければ、市民政治の展望は開けないと考えたからである。

「金と組織」型選挙に代わるものとして「カンパとボランティア」をキーワードとした運動論が登場するのは、私たちのそれまでの活動から考えて当然の帰結であった。

「金のある人はカンパを、時間的余裕のある人はボランティアに、両方ともに制約をもつ人は知恵を出し合う」ことで「金と組織」にかわる運動形態を創出できる——この可能性は、これまで

の何回かの選挙戦を通じて実証されていた。今回の選挙で勝利するためには、まずこの構図を明確にし、増幅することが必要であった。

●カンパとボランティア

菅直人選挙事務所の作戦参謀であった湯川憲比古君は、自在の構想力で「参加型市民選挙」の構想をめぐらしていた。

「普通の市民生活者が、自分たちの日常生活に支障をきたさない範囲でどれだけ参加できるかが、大きなポイントだ。

例えば、ポスターを自分の家のまわりに貼ることは出来る。一投票区七~八枚だが、一応可能だとみてよい。東京七区は二百五十四投票区あるから二百五十四人の主婦をさがせば、ポスターを一時間で貼ができるわけだ。

ハガキにしても同様、一人が十枚書くとして公選ハガキ三万五千枚は三千五百人で全部書けることになる。しかも、そうして貼ったり書いたりしてくれた人は、確実に菅直人を応援してくれるはずである」

この湯川構想は、彼を補佐していた山田君の手によって「必勝作戦」として具体化していくことになる。

湯川君は、この構想を前回の選挙終盤ごろから考えていたようである。投票者を運動員にして

しまうことで、心情レベルでの支持者を確実な支持者としてしまうという“参加型市民選挙”構想は、「選挙事務所に出てこない運動員」を東京七区内の各地に創り上げていった。この結果、「ボランティア参加型市民選挙」はより一步進み、「地域^{コミュニティ}参加型市民選挙」と呼ぶほいうがふさわしいような形態を実現したと思つている。

● 菅直人株倍額増資

大きな資金源をもたない私たちの選挙運動は、必要な選挙活動費用をほとんどカンパに頼つた。現在の公職選挙法は支出項目についても細かい規制があるが、総枠として千六百七十万円まで使えることになっている。衆議院選挙に立候補するために必要な供託金百万円は、法定得票数をとれば戻ってくるものであるから止むを得ないとしても、一千万円を超す選挙費用は、とても一市民の手に負える額ではない。

私たちは、過去もそうであったように、カンパを呼びかけていった。

すでに紹介したが、カンパ収集のアイデアとして「菅直人株」というものを考案した。これは前回の衆院選で始めたものだが、かつて出した「市民債」の変型でもある。市民から単にカンパを集めのではなく、カンパの領収書がわりに「株券」を発行し、カンパしてくれた人を「株主」として登録していくこうというアイデアである。

もちろん商法上の株券ではないから金銭的な配当はないが、「社会をよくする」という形で「利

益配当」をしていこうというものである。

一株五百円とし、五百円株、千円株、五千円株、一万円株の四種類の株券を用意した。

会計責任者の川田道子さんは、今回の選挙における入金状況を次のように報告している。

「とにかく、今度の選挙はこれまで以上の勢いでカンパや株券の売り上げが増加しました。当初から『菅直人株倍額増資』を目標にしていたんですけど、選挙戦中盤すぎに前回のカンパ額を突破し、株券のうち一番出やすい千円券が売り切れになつたんです。

いつものように『カンパ・株の収入額』を公表したんですが、六月二十一日〆めで、カンパは一千二百八十四万九千六百五十五円、株は百七十二万三千五百円にも達しました。
カンパ収入は支持層の拡がりと比例するよう伸びたということかしら」

● 必勝作戦——クリーン・アンド・パワフル

湯川構想に基づいて、衆院選公示の前日に「菅直人必勝作戦」が発表された。

作戦を具体化した山田まこと君の弁。

「とにかくクリーンに戦うということは大前提としてありました。僕だつて選挙違反をしてまで菅直人を当選させたいとは思いませんからね。

そこで、クリーンを維持しながら、いかに菅直人選挙をパワフルに展開するかということが戦略のポイントだったわけです。湯川構想は実にその要請に応えるものをもつていましたから、僕

の役割は、それを菅直人選対の力量に合った水準にまで修正し、達成目標を明確にするために数量化しただけなんですね」

こうして決定された作戦のいくつかを紹介してみよう。

「二百人選対実現作戦」——これはポスター貼り、ハガキあて名書き協力者を除いて、菅事務所運動員を二百人まで拡大しようとする作戦。

「ハガキあて名書き協力者一千人獲得作戦」——三万五千枚出せる公選ハガキに、それぞれの人が自分の知人、友人に菅直人を紹介するという形であて名書きを頼もうという作戦。特に七区内の協力者には直接事務所の運動員が配達、回収にまわった。

「ポスター貼り協力者二百五十四人獲得作戦」——七区には二百五十四投票区千八百十八か所の掲示板があるが、一人一投票区を担当してもらおうとして、二百五十四人の人に協力してもらおうという作戦。

「協力依頼電話一万本作戦」——前回の選挙でこちらが名簿として保持している一万人にポスター貼りやハガキあて名書き、個人演説会会場設定のお願い等の協力を要請する作戦。

「立会演説会等お知らせ電話二十万本作戦」——こういう趣旨のお知らせ電話は「ガチャン」と切られることは少い。政見放送のお知らせ、立会演説会等のお知らせ電話を総数二十万人の人におけることにした。

「個人演説会百か所作戦」——六月五日～十九日の十五日間に、井戸端会議的演説会も含め区内

で百か所個人演説会をやろうという大胆な作戦。

これらの作戦は必ずしも百パーセント達成されたわけではない。しかし、かなりの部分、それなりの達成状況であり、着実にパワー増大を図れたといえよう。

●ミニコミ誌

菅直人選挙事務所の入口を入れると、右手の掲示板に二種類のミニコミ誌がいつも掲示されていた。

一つは菅直人を応援する会が出している「菅直人を応援する会ニュース」（編集長は片岡君、アシスタントは大岩たまみさん）。もう一つは、菅直人選対内部広報誌と銘うつてある「The Challengers」（編集長は山田君、アシスタントは藤瀬素子さん）。

両誌とも隔日刊で「応援する会ニュース」は五月二十五日創刊で十四号まで発刊され、「ザ・チャレンジャーズ」は五月三十日に創刊され、十三号（ほかに一回号外がある）まで発刊された。

それぞれの編集長は、お互いにライバル意識をもちながら、楽しそうにこう話してくれた。
まずは片岡勝編集長。

「応援する会ニュースは、運動員にももちろん読んでほしいと思つたんだけど、本当のねらいは

マスコミ対策にあつたわけ。目立つようにコピーの上から一枚一枚たまみちゃんに色をぬつてもらい、朝日、毎日、読売、サンケイ、東京、夕刊フジ、日刊ゲンダイの各新聞社、NHK、週刊誌ではポスト、新潮、現代、プレイボーイ、平凡パンチなんかに送りました。適当に効果あつたんじゃないの」

一方、山田まこと編集長。

「市民選対が百パーセントの力を發揮するには、情報の共有化が大事だと思ったんですよ。二百人選対なんかが本当にできると、どうしても市民的でなくなる部分もふえる。だから今、全体がどうなつていて、自分のしている仕事がどんな役割を果たしているか知ることができたらいいなと思って……。情報は一方通行じゃいけないと思って、運動員からの意見収集のために『目安箱』を設けたんだけど、これはあまり機能しなかつたみたい。なぜかというと、みんな不満をこつそり投書なんかしないで、大きな声で議論するんだから」

● 摺れた遊説計画

私たちの選挙運動の中で最も弱かつたのは、遊説計画であった。それは、私以上に七区内を知っている人が選挙事務所にいなかつたことと、参議院候補との合同遊説による複雑な配慮の必要性、「車長」と呼ばれる遊説部隊長に十分な経験者がいなかつたことに原因がある。

五月三十日の定例会議で遊説計画の基本コンセプトが確認された。

「最初の三日間に七区全体をひと通りまわることにする。次の五日間は三市ずつまわる。八日の日曜日は立川市歩行者天国、十六日の日曜日は団地まわり。中盤の四日間は協力体制にある宇都宮徳馬氏、はた豊氏と共同行動を含め補完的に。最後の六日間はそのうち最初の三日間に全市をまわり、次の二日間は重点市を、そして最後の一日は立川駅より中央線を東上し吉祥寺駅で打ち上げる、というスケジュールである。一日の行動は朝、夕は駅頭又は商店街、昼間は団地、アパートをまわる」

おおむねこのコンセプトで実行に移されたが、「イラ管」と呼ばれた私のイライラが何度か運動員に向けられたらしく、特に中盤あたりは、ぎくしゃくした遊説が続いた。

● 每夜の議論

公示を三日後にひかえた五月三十日夜。第一回目の定例打ち合せ会が開かれた。選挙戦中盤一時中断はあつたが、基本的に毎夜十時から約一時間、その日の報告、反省と明日の打ち合せがおこなわれた。

定例会は原則として誰が出席してもよい形式で、一応、各セクションの責任者は必ず出席することとし、運動員も時間に余裕のある人は参加し発言できた。

玉置春仁（25）、山田雅文（25）、近藤近衛（20）、川崎卓（25）、三浦仁（25）君等といった、選挙運動をほぼ常時やってくれた連中は毎夜顔を出した。たまたま遅くまで仕事をしていた運動

員も参加してくれた。

運動は指揮一命令系統がはつきりしていなければ動きがとれなくなるから、ある程度上下の関係があるのは止むを得ないが、議論の場では、運動員全員がまったく同レベルだというのが私の考え方である。この会議の方式は、自由な討論と共通の問題意識を共有するという点で成果を上げたと思っている。

●二〇〇人選対の実現

選挙事務所の入口を入った正面に、名刺大の名札がずらりとかけてある。多くのボランティア運動員の顔と名前を一致させるための名札で、事務所内では必ずつけなければいけないことになっている。

必勝作戦の中に「二百人選対実現作戦」というものがあることはすでに述べた。パワフルな選挙活動を開いていくには、一人でも多くの人に選挙に参加してもらうことが大切で、私のこれまでの選挙経験からして、得票数は運動員の量と比例している。ほとんどをボランティアに頼る私の選挙態勢は、運動員の数が増えたからといって必ずしも人件費の増加にはつながらない。

六月二日の公示日ごろには約五十人の人が何らかの形で手伝っていてくれたが、公示直後には百名近くになり、やがて選挙戦が本格化し、各地区に地域担当をおいてきめの細かい戦術展開に着手しはじめた中盤以降は、文字通りの「二百人選対」が実現された。

もちろん、この中にはかなりのアルバイトもあり、一日だけの協力者もいる。私たちの選挙のやり方は「市民の日常生活に支障がない範囲で参加してもらう」というのが大原則だったから、常時参加してくれている人より、パートタイムの人の方が多い。

二百人選対実現作戦を管理していた山田君の話。

「二百人選対で一番の問題は、ボランティアとアルバイトの人の調整です。なにしろ金銭的なものがからんでくるだけに、この二つのグループの間に溝ができるよう配慮しました。

しかし、僕はいつもこう言つてたんです。他党の選挙を手伝うより、菅直人の選挙を手伝うのは分が悪い。つまり安いということ。たとえば、ウグイス嬢は一日四千五百円と公選法で決まっており、これは他党の半分か三分の一程度でしかない。だから、菅選対の場合、アルバイトも半分はボランティアなんだ、と。

幸い、『バイト料は安いけど、雰囲気がいいし、面白い』といつてくれる人が多く、助かりましたけどね」

しかし、パートタイム型ボランティア選対の悩みは、まだまだあった。また山田君の話。
「パートで来てくれるのとてもありがたいのですが、仕事量と人間量の調整がとつても難しいんです。せっかく事務所まで足を運んでくれた人に、やってもらう仕事がないこともある。

免許証をもっている人は外まわり、そうでない人は電話作戦やビラにシールを貼る作業をやつてもらつたんですが、八万枚のシール貼りも異常なスピードで貼り終えて、その後、パートの人

の仕事をつくるのに苦労しました」

●選挙とは「出会いの場」

こういう選挙のやり方をしていると、思わぬ人に出会うことが多い。選挙とは単に「勝つ」とを目的としたイベントなのではなく、「出会いの場」としてもっと重視してもいいのではないだろうか。

内部広報誌「ザ・チャレンジャーズ」に、アシスタンントの藤瀬素子さん(22)が、この選挙事務所の感想を次のように書いている。

「六月十日（火）から茨城県桜村村議村上仁士さん(28)が応援に来て下さいます。また、六月七日（土）にはアメリカのスタンフォード大を出て現在東大大学院生のニール・フリーマン氏が研究のためおみえになります。

まったく、ここは、いろんな人に会えますね」

候補者である私は、一人でも多くの人と会うことが役割の一つだが、運動員自身も「選挙」に参加することで自分の人的ネットワークを拡大していくようだ。

私以上に人と会うことを趣味としている湯川君の話。

「選挙というのは面白い人さがしという点で素晴らしい場だ。今度の選挙でも多くの人と出会えたが、学生村議の村上君、カンボジア救援グループの諸君、新自由クラブの皆さん、宇都宮徳馬

さんなど、個人的にも得ることが多かった」

私にとっても、学生村議村上仁士君(28)との出会いは、非常に重要だった。彼は湯川憲比古君をどういうきっかけからか知るようになり、一度会いたいとこの事務所に来ててくれたのだが、湯川君の「百人市議構想」に非常に魅せられたようで、当選後、「週刊プレイボーイ」誌にこんなことを書いている。

「われわれは自らを”市民の会”と名づけ、この五年間に首都圏の地方レベルで百人の若い議員をつくるうという運動を始めたんです。市町村議会、大きくとも県議会というレベルだと、われわれの意見もかなり反映できるし、それが首都圏で百人という数にまとまれば、そういう力になり得ると思うんです。

そういうわけで、国会議員までは考えていなかたし、菅さんが国会に行つても、一人じや何もできないのは事実です。ただ、キミも代議士になれるんだ、学生とか若い人が本気で選挙をやれば必ず勝てるんだ、というアピールの効果は非常に大きい。だから菅さんは、”社民連の菅直人”という看板はなるべくひっこめてもらって、われわれの運動のブリリアントな看板にしていこうと考えています」

選挙戦は非日常の世界だから、日常性の中ではつかまえられない人間と接することができる。私たちのネットワークは、それをくり返して「三百人」になった。しかし、これにボスター協力者百人、ハガキあて名書き協力者二百人などを加えると五百人以上のネットワークができている

ことになる。

① 支持者からの手紙

選挙戦に入ると、いろんな人からの手紙が急増してくる。肉体的に「疲れたな」と感じる時、名前も書いていない支持者からの手紙に出会うと、本当にうれしくなって、疲れもふっとんでしまう。

次の二通は「応援する会ニュース」にも採りあげられたものである。

「前略 ぼくの選挙区には社民連の候補がいません。又、社民連がすいせんしたからといっても民社や公明の候補には投票したくありません。そんな気持をせめて表現しようと菅さんにカンパを送ります。社民連が出来た時、その宣言を読んでほんとうに心から感動しました。この世の中で政治勢力として力がなくても、ぼくはこの党を支持しつづけようと思いました。

けれども、支持しようにも、ぼくは何もできませんでした。仕事も忙しく、今のはくには政治運動、市民運動のボランティアをすることも出来ません。その上、市民として最低限の意思表示である投票すら社民連にできないのです。もどかしいといったらありません。

今、何も出来ないぼくが、只あなた達への期待だけをこうして述べることはあるいは不当なことかもしれません。

一緒に運動へ飛び込み、ポスターをはり、選挙カーのマイクを握るべきなのかもしません。

でも、せめてと思う今、手許に自由に出来るわずかのお金を添え、はげましのお便りをお送りする次第です」

「過去、中央線国立駅北口で、貴殿の演説の一部を拝聴しました。通勤途上のことで全部を聞いたわけではありませんが、今回の選挙に賭ける意気込みが伝わってきました。

私の住んでいる国分寺市は一握りの地元の大地主が力を持っています。私のような会社勤めには想像もつかないような莫大な資産をもち、それを切り売るだけで楽々生活ができるのが現状です。

これらの不公平は語りつくされていますが見通しは決していいものではありません。何はともあれ、いい政治を切実に望むものです。

折がありましたら菅直人株も買わせて下さい。何かの新聞で、株の配当は「少し世の中が良くなるくらいかな」という談話の一部を記憶していますが、やはり我々としては当選してもらうことが大切だと考えています。

ぜひ、力一杯戦って、勝つて下さい。
切に祈っております」

● 一時間にもおよぶ電話討論

「一般人からの電話による討論や苦情への対応、時々かかるイヤガラセ電話などには本当

に気をつかいましたよ」

他の運動員が東京七区をところ狭しと走りまわっている中で、終始事務所から出なかつたという山田まこと君は、「僕はついにこの三週間、オテントサマを見ませんでしたよ」と皮肉っぽくこう語つてくれた。

「菅直人が外に向けて出す活字媒体には、全部住所と電話番号が入つていてるでしょう。あれはとっても親切でいいんですが、対応するほうは大変なんですよ」

「特に、選挙管理委員会が選挙公報を出した六月十七日は大変でした。あの公報を見てもわかるようすに、七区内の候補者の中で事務所の電話番号が入つてるのは菅直人だけなんですよ。他の候補者は電話対応の大変さを知つていてるから電話番号を入れないんですかねえ」

「公報をみて一番多かったのは、『菅直人は外交、防衛についてどう考えているんだ』とか『エネルギー問題についての考えを聞かせて下さい』といった政策面での問い合わせですね。市民が候補者の考え方を十分聞いて判断しようとしていることがよくわかりましたよ」

新自由クラブとの連携のことや選挙戦術について、こうしたほうがいいんじゃないですか、なんて教えてもらつたこともあるし、リサイクル運動をやつてることを知つている人からは『古紙をもつていきたいんですけど』という電話もありました。

こっちの言い分を理解してもらうのに一時間以上受話器を握りしめていたこともあります。最終的には意氣投合して、お互い頑張りましょう、なんてことになりましたが……。

おかげで終盤近くには、のどが痛くなつて、候補者よりガラガラ声になりましたよ」

●運動員との個人演説会

選挙戦中盤のころ、私のところへ「最近、運動員が少々オーバーワーク気味で不満もたまつているみたいですね」という話が伝わってきた。

はじめは状況の良さも手伝つて、一気にエンジン全快で飛び出したのはよかつたのだが、運動の規模が拡大していくにつれ、単純作業ばかり次々とさせられる運動員の間に不満が生まれはじめたらしい。

このことを一番早く察知したのは、以前から私の選挙を手伝つてくれた玉置君だつた。

「こういう状態だとヤバイなと思ったんです。外に出て運動している人は、それなりに気もまぎれるし発散できるんだけど、内で仕事しているとうつ積してくる。それに運動の手ごたえが、内にいる人には直接伝わらないから、よけいにメゲてくるんです。外にいる人と内にいる人のボルテージを均質にする必要があると思って……」

そこで玉置君は山田君と相談して、六月十五日（日）夜九時に、「運動員と菅直人の個人演説会」を開催することに決めたらしい。この日が選ばれたのは、立会演説会がなかつたからである。

私も、毎日増えていく運動員と話をする機会がなかつたので、これはいい機会だと思った。集

まったくのは総勢三十三名。一人一人自己紹介をした後、私への質疑応答をやった。

「菅さんのいう『市民』のイメージは？」（山崎喜代美）

「当選してまずやりたいことは何ですか？」（玉置春仁）

「菅さんは外交、防衛問題に興味ないんですか？」（三村さよこ）

「こういうミーティングを何回かやればいい。もっと市民的になりそうだ」（藤田俊男）

私も時間の許す限りこうした集まりを持っていくつもりだ。

ちょうどこの日は「父の日」。選対委員長の貴島さんに運動員がカンパしてネクタイとバラの花を贈るというプロジェクトが組まれ、非常にいいムードで終盤へスタートが切れそうな予感がした。

玉置君の感想。

「あれで運動員の不満は完全に解消したとは思わない。でも、誰もこの日のミーティングでリフレッシュしたと思う。

誰もが多少の不満はもつてているんだし、行きあたりばつたりで改善していくのが市民選挙じやないんですか」

●アマチュア選挙の面目

ともかく菅直人選挙事務所は、素人の集団で、候補者である私と数人の選挙経験者と私を応援

してくれた市会議員や区会議員を除いては、全く選挙の経験のない人がほとんどだった。

湯川憲比古君は、このアマチュア選挙について次のようにコメントする。

「一人がポスターを五枚貼る、ハガキを十枚出すという範囲で、しかし、引き受けたら絶対に責任を持つということで、何百人という市民が駆けつけてくれたわけだね。十七歳の高校生から上は七十七歳の老人まで。公示日のポスター貼りの機動力はなかなかのものでしたよ。二百五十四投票区を振り分けてやったんだが、夕方までに終わってしまった。まあ、プロなみですね。もっとも突っ走ったのはよかつたが、小平市全域をまるまる忘れていたという凡ミスもあつたけど」

山田まこと君は、アマチュア選挙について次のような感想をもらした。

「アマチュアのこわさは『のる』ことなんですよ。『のった時』のアマチュアは本当にすごい力を出す。そのエネルギーはプロの計算からは生まれ得ないんじゃないかな」

すでに出来上がっている体制や慣習や制度にとらわれず、それを常に疑い、おかしいと思つたら遠慮なく改革していく力——それがアマチュアには残っている。民主主義とは与えられたものを素直に受け入れるのでなく、それは自分たちがつくり変えられるんだ、という認識をもつているところで成立するものだと思う。

市民選挙はアマチュア集団だからできたのかもしれない。

片岡勝君は次のように言う。

「他人に命令されて動く時代ではなくなった。下からの自發的エネルギーこそパワフルなのだとと思う。

構造が変わったんだ。組織を動員したり、金で票をとる時代が終わったんだ。構造を変える一つの役割を、われわれアマチュア選対が果たしたことは誇りにしてもいいんじゃないの」

●宇都宮徳馬氏のこと

私は、どうしてこの人のことを書いておきたい。

かつて自民党ハト派と称され、当選十回という輝かしい経歴をもちながら、ロッキード事件に憤慨して自民党を離党、今回の選挙には参院東京地方区から無所属で立候補された。

社会民主連合と新自由クラブは宇都宮さんを推せんしており、東京七区では私と共同行動をとることになっていた。

宇都宮さんは、立候補の抱負を次のように語っておられる。

「軍拡の声が政財界に日に日に高まる今だからこそ、冷静な目、客観的判断力が必要。外交なくして何の軍備かといいたい。国内の一基のミサイルより海外に一人の友人をつくる方が日本のためになる。幅の広い平和外交を推進する決意だ」

選挙期間中三回、氏と共同行動をとった。宇都宮さんの防衛、外交の演説を聞いていると「この人にはかなわんな」と思ってしまう。お年の割に（失礼！）柔軟なものの考え方を失わず、し

かも外交については燃えるような理想と体験に基づいた迫力がある。

生活に直接かかわるテーマを中心に市民運動をやつてきた私にとって、外交という面については、積極的発言や行動はこれまでひかえていた。これからはじっくり外交、防衛も自分のテーマとして取り組み、そのためにも宇都宮さんからいろいろ教えていただこうと思っている。

IV 終盤戦の燃える熱気

●世論調査と勝利への展望

普通、選挙期間中に各新聞社は二回世論調査をおこなう。序盤戦と中盤すぎにおこなうのが恒例のようだ。

マスコミの情勢分析は、それが当たっていようがいまいが、有権者に微妙な影響を与える。

「出遅れている」などと書かれると、有権者は逃げてしまい、また「すでに当選圏に入った」など書かれても、楽観ムードに流れる为了避免の手立てが必要となり、どちらも大変である。

これまで、この東京七区は「無風区」「指定席」などとマスコミに書かれ、何度か苦汁を飲ま

されてきた。それだけに、私も運動員もマスコミの扱いには大きな関心をもっていた。

六月五日、各紙は序盤戦の情勢分析をおこなった。内部広報誌「ザ・チャレンジャーズ」は六日に号外を出し、その概要を次のように伝えている。

「・菅直人の動きに注目する朝日新聞

・菅直人を『当選ライン上に急浮上』とみるサンケイ新聞

・『好ダッシュ』から『前職の巻き返し』と菅直人にシビアな評価の読売新聞

・『台風の眼』とはみるが『現職にどこまで迫るか』程度の評価をしている日本経済新聞と各新聞を紹介し、それぞれにコメントを付した後、総合的コメントで、次のように解説する。

「序盤戦について各紙の共通の見方は、かつての『無風区』『微風区』東京七区に、風が強くなりはじめたと見ていく点である。

風の源は菅直人であり、あるいは秋本候補とみている新聞もある。が、どの紙も『風力』の測定にはとまどっている。

今後、この風力をより強めることができると菅勝利の条件だろう」

序盤戦の出足は上々だとスタッフは判断していた。私自身の分析も同様だった。しかし、中盤にアクシデントが起きた。総理大臣大平正芳氏の急死（六月十二日）である。

一般にこの種の事件は故人あるいは故人の関係者（すなわち自民党）に圧倒的に有利に作用す

る。スタッフは企画会議をもち、対応策を検討した。

企画会議の結論は、「マクロ的地すべり現象はあるだろうが、この七区での選挙運動は従来の方針で進んで大丈夫」というものだった。

「弔い合戦」という言葉が生まれる中で、やがてマスコミは終盤の情勢分析を始める。今回の調査は、各候補者の得票率を出してくるのが常で、選挙事務所のほうにも知らせてくれていた。

各調査の実施日が大平首相死去の前か後か気にはなつたが、どの調査も「菅直人は四位以内」の結果を示していた。

「この調査結果みて、今度はまちがいなく入ったよ。菅さん三位で当選だね」

学生村議の村上仁士君は軽口をたたいていた。

そして、スタッフが勝利の確信を得たのは、NHKの調査結果をみてからであった。

「なにしろ、菅直人は得票率20・3%でトップ。しかも、小沢は四位で五位との差はわずか0・9ポイント。ひょっとしたら『小沢を落とし、菅のトップ当選』が実現するかな」

片岡勝君は若干興奮していた。

●雨をふきとばせ！ テルテル坊主プロジェクト

私の立会演説会の付添役として、いつも私のそばで、私の「イライラ」が起こらないように世話をしてくれた、自称「菅直人の乳母」藤岡郁子さん(25)は、ある日、素晴らしいアイデアを思

いついた。天候に恵まれた今回の中選挙戦だったが終盤二日間は雨がふった。山田まこと君と雑談していく「前回の選挙は雨にも負けたんだろう。テルテル坊主でもつくろうよ」という話に大いに乗った。「どうせつくるんなら千個ぐらいつくって部屋を飾ろう」

そう決心した郁子嬢は、二十一日の夜、ティッシュ五箱とチリ紙数束、輪ゴムをもって事務所にあらわれた。

二十一日の遊説活動は午後八時で終わらなければならない。電話部隊を除く運動員は、テルテル坊主プロジェクトに組み入れられ、郁子隊長の指揮のもと、テルテル坊主の量産にとりかかつた。私はこの夜、早目に家に帰った。外は雨のようだった。

そして、期待どおり雨は止んだ。

●候補に負けない一人一人の闘いを

六月十九日未明、こつ然と「最後まで、候補者に負けない一人一人の闘いを！」と大書された横幕（といつても模造紙三枚大にマジックで書かれたもの）が掲げられた。

作成プロジェクトのリーダー青山拓君（20）はびっくりしている私に説明してくれた。
「実は、片岡さんから言われたんです。このごろ他党からのいやがらせが強くなり、この選挙は候補者だけの戦いではなく、僕ら一人一人の戦いだということを強調するために作つたらどうだ、と。僕もそう思いますから……」

私は、先日出された共産党のビラのことを思い出していった。「市民運動の名を汚す社民連の『市民政治』」というタイトルのビラは、全く中傷もいいところの内容のものであった。

私たちは、こうした中傷ビラ、妨害行為については、敢えて無視する方針をとつた。
「あのような中傷をして、昔に投票する人は減つただろうか。むしろ相手の党の悪口ばかり言つてている党に対して、市民はきっと軽蔑したに違いない」

選挙の結果が出たあと、片岡君がそれまでの怒りをはき出すように言ったのが印象的だった。

●「あと〇〇日、命の限り」

車長補佐というのは、候補者カーに関して、ガソリン点検、バッテリー・チェック、明日配布予定のビラ枚数確認、ポケット、地図の確認などをする仕事である。
選挙戦後半、この仕事をやってくれた近藤近衛君（20）は、終盤に入つて少々楽観ムードになりかけていた選挙態勢に不安を覚えた。

「ひきしめる必要がある」そう思った彼は、毎日「あと五日、あなたのすべてを」「あと四日、命の限り」「あと三日、全力を出しきれ」と紙に書き、候補者カーと事務所の入口に貼り出した。
みんな思い思いに全力を出しきろうとしていてくれた。この時期、企画スタッフはもう何もすることがなかつたようである。

「終盤二日は本当に選挙に関しても何もすることはなかつた。みんな自分がするべきことを十分理

解していくれど、勢いがついていたというか、とつてもいいムードだった。それより、スタッフの関心は勝つてからどうするかを考えるべき段階に入っていた

運動員は自分の役割を客観的にみる余裕をもち始めていたらしい。それでもまだ自分で判断して行動するという訓練が私たちには欠けているのかもしれない。

会計責任者で総務を担当した川田道子さんの話。

「本当に自分で判断することができない人が多いんだから。ちょっとしたことでも、これどうしましようって聞いてくるのよ。」

私なんか前の選挙手伝ったから、知っているとアテにされるのね。でも、私だって素人に近いんだから、みんな自分の判断で行動する訓練をしなけりや。」

市民政治って、そういうものを積み上げてこそ可能だと思うのよね」

私たちは、自発的な参加によるボランティアの人たちによって戦いを組んできた。しかし、まだ未知の世界に入る時のためらいを持つている。これは、政治を市民のレベルに引きずり降ろしたからといってただちに市民政治が実現するとは限らないことを意味しているのではない。市民自身にも政治へ参画していこうとする能動的な態度がもっと必要なのだろう。

●マスコミが騒ぎはじめた

終盤戦の盛り上がりの中で、マスコミが菅直人に注目しはじめた。

外部からの電話を担当していた山田まこと君は、マスコミの応対にかなりの時間をさかれるようになつたと言う。

「なにしろNHKだけでも定期ニュースの録画、特集番組のための取材、二十三日開票日の打ち合わせと、三人の担当者が訪れるんですから。本来のスポーツマンの湯川さんは、『この時期はマスコミへの対応以上にすることがある』とばかりに逃げてしましましたから、本当にたまりませんよ。」

私自身は選挙運動が終了するまでは平常の行動をとつていた。二十三日以降のスケジュールについても、まだ全く立てることができない状態だつたし、とりあえず勝った場合にはどことどこに行く必要があるかということを指示し、あとはスケジュール担当の川田、山田両君にまかせきりだつた。

二十三日の開票日にはTV局が二局とラジオ局が一局入ることは知らされていた。マスコミの騒ぎ方も情勢分析の一つの決め手になるのかもしれない、と考えたりした。

●もう一度ポスターを貼り替えよう

今度の選挙では、二種類のポスターを作つた。一枚はこれまでの流れを受けついだ正統派のポスター、もう一枚は少し冒険的な作品として作つたものである。この二種類のポスターのどちらを先に貼るかについて、激しい議論があつた。

結果的には、一回目は今までのイメージのポスターを、二回目は少し意欲的に構成されたポスターを貼ることにした。すでに述べたように、この二回のポスター貼りには、主婦の方々を中心としたコミュニティ・ボランティアの協力を頼った。

一回目は二百五十四箇所のうち百四十四箇所を、こうしたボランティアの人たちに貼つてもらつた。これを分析すると、普直人の協力者の地域的分布が一目でわかる。従来、「普直人が弱い」とされている市域には、ポスター協力者も少ないという結果が歴然と出た。

このコミュニティ参加型のポスター貼り作戦の効果は、次のような協力者の感想からもうかがわれる。

「私は三番目の掲示板まで他の候補より先に貼ったのよ」

「背が届かない掲示板があつて困っていたら他の候補の運動員が助けてくれたの」

「自分が貼ったポスターはどうも気になつて、選挙期間中何度も見に行つたわ」

そんなわけで、ポスターはていねいに、しかも迅速に貼り終えることができた。その上、ポスターについて、前回までは紙質についての知識がなかつたのだが、丸屋さんという人が雨につよい紙質を教えてくれて、それが大変効果をあげた。

さて、ポスターは、予定では二回の貼り替えで終了するはずだったのだが、誰からともなく、「はじめのポスターのほうがいい」という声が出はじめた。

急拵、ポスター貼り替えプロジェクトが結成された。ポスター刷り増し、裏への両面テープの

貼り付け、画鋲の購入、投票区の分割と担当者の決定。「一夜あければ普のポスターが全部貼り替わつていななんてカッコいいじゃないか」

あいにくの雨の中、予定外の三回目のポスター貼り替えがすすめられた。

●投票率六八・五%

六月二十三日投票日。テルテル坊主がきいたのか、雨は止んだ。

この日、運動員は地元に戻つて投票をすませてから、午後、事務所へ出てくることになつていた。
衆参ダブル選挙と、この好天。私は「高い投票率になりそうだ」と思った。前回は雨に泣かされていて、天気が良く投票率が高ければ、私のように組織をもたない候補者は有利である。私は投票所へ向かう途中で何人かの人から声をかけられ、今までの選挙戦の手ごたえを思い出していた。

前日（最終日）は中央線国立駅前の演説に始まり、午前中は昭島市、東村山市、立川市をまわり、午後は中央線立川駅前から中央線の各駅頭で演説をくり返した。
打ち上げは吉祥寺駅南口と決まつていた。応援にかけつけてくれた江田五月参議院議員と共に、駅前に集まつた大勢の人々の反応に十分な手ごたえを感じたものだ。

投票を終えて三鷹の選挙事務所へ向かつた。午前中の投票状況は前回より十数ポイント良いと

いうニュースが入っている。このままいくと、七〇%近くまで上がるかもしれない。

深夜、六八・五四%という確定投票率が発表され、各市別の投票率も入手できた。

「目標得票率から算出すると、菅直人は一五万四、九二三票とれるはずだ」

湯川憲比古君は、自分の票読みを披露しているが、彼の大ぶろしきにはついていけない者が多く、誰も本気にしていない。

しかし、誰もが勝利への確信を抱いていた。

●三つのプロジェクトの発足

終盤の企画会議は、すでに「勝った後」のことについて議論を重ねていた。

宮城健一、湯川憲比古、片岡勝、大宅憲一、山田まこと君等を中心として三つのプロジェクトが進行していた。

「事務員一人一人に①この選挙にどういうきっかけでかかわったか②これまで一番燃えた時期はいつか③選挙運動として何をやったか、自分・他人・候補者・有権者に對して何を感じたか④これからこの運動にどうかかわるつもりか、かかわらないとしたら、どんな問題があるか——の四点をインタビューして出版しようというアイデアがあつたんだ。大岩たまみ君と藤瀬素子君と俺でやりはじめたんだ」

第一の「事務局員へのインタビュー・プロジェクト」のリーダー、片岡君はこう話してくれ

た。

「同時に、どうしても今回の選挙を一般に増幅したかったから単行本プロジェクトを発足させ、俺と宮城が中心になつて動き出した。これはどうしても出版したかった」

そして第三のプロジェクトは、すでに述べた「お祝い電話録音プロジェクト」である。

「たぶん、開票の結果、当選が決まれば、非常に多くの人からお祝いの電話がかかってくると思われたのです。結果的にそのとおりでしたけど

で、その人たちに『今後の菅直人に望むこと』を語ってもらおうと思ったんです。お祝いを言ってくれた人の住所や名前も聞きたかったし、それなら録音してしまおうと考えたわけです。

あとでテープをおこしてみると、ピック・アップの操作が悪いのか、あまり役に立ちませんでしたけど」

プロジェクト・リーダーの山田まこと君は、苦笑まじりにそう言つた。

同時に、片岡、宮城の二人は、出来る限り多くのマスコミ媒体を通じて今回の選挙を一般に知らせよう動き始めた。

一方、湯川憲比古君は、村上仁士君と連携をとりながら「百人市議プロジェクト」を別働隊で動かし始めた。

当選後の大きなスケジュールは、このようにして決められていった。

●早すぎた当確

とにかく手ごたえはあつたので、何とか滑りこめたという気はしていたが、午前中に当確が出るとは思つてもいなかつた。いつもの時間より遅く起きた私は、あわてて自宅を飛び出した。おかげで、妻の伸子は大分遅れて事務所へ着いた。

山田まこと君は次のように話している。

「朝七時に日本テレビがテレビカメラのセッティングに来るということだったんで、早く起きて出かけたんです。部屋の模様替えは前日やつておきましたから、あとはテレビ局の人にはまかせきりでした。NHKの人もセッティングしていましたから、報道関係の人で二十人ぐらいいたかもしません。ところが運動員はいつまでたつても集まらない。午前九時半ぐらいまではマスコミの人が多いくらいでしたよ」

私が事務所に入るころには、さすがに多くの人が集まり、みんなニコニコして私を迎えてくれた。

午前十一時すぎ、私たち勝った。

確定投票数十五万七、九二一票。小沢候補は二位に入つたが、四万票以上の差があつた。結果だけをみれば圧勝といえよう。前回が六万七千票だから、大変な伸びである。湯川君は実力九万九千五百票で、あとはフロックだと分析していたが、確かにそれは正しいといえる。

しかし市民選挙は、それなりにちゃんとやつていれば、段々わかつてもらえると思つていたが、それが確実になつたと思つている。

選挙戦という狭い範囲ではなくて、全体的な運動の輪の広がりがあつたと思う。

私が何度もくり返した「市民の勝利」とは、そうした輪の広がりの勝利という意味である。

●次は「政治の市民化」

私たちには市民政治実現の布石として、「市民選挙」は衆議院選のレベルでも可能であることを証明し得た。

片岡君が「構造が変わつたんだ。組織を動員したり、金で票をとる時代は終わつたんだ」というのは、この市民選挙を通じて、私のみならず運動員全体が等しくもつた実感である。次に私たちが取り組むべき問題は「政治の市民化」である。もつとも、それは必ずしも「政治の市民運動化」ではない。私自身、市民運動の代表として議会へ出るのはなく、"市民運動の経験を持つた一人の人間"が政治運動にそして議会に参加するのだと自覚している。つまりこれまで土地・住宅問題やリサイクル運動、医療問題などに取り組んできた。もちろん、そういうものを国政に反映させてゆきたいと考えている。しかし、そのことだけで、"市民の政治"が実現できるとは考えていない。一つには議員の機能を生かして市民運動も含め、市民の政治参加の前提となる情報共有の場、意見交換の場を作つていきたい。

さらに言うなら、私たちは、もっと先のこと、つまり今の既成政治勢力にとつて代わることを目指している。ロッキード事件以降の自民党をみても、自浄作用が有効に働くことはほとんど期待できず、今後も密室の政治がくり返される恐れは少なからずある。一方、既成野党の側にも、その体質は市民の声を吸収しうる構造にはなっておらず、政党の組み合わせをいろいろ考えてみるだけでは開かれた連合政権は望み得ないだろう。

私たちは、ようやく市民政治を国政の場で実験するための足場をつくり上げた。「選挙」を市民の手のとどくところ、いわば「お祭り」のレベルまで引きずり降ろした。私たちの次の課題は、いかにして「政治」を市民の手の届くところまで引きずり降ろすかである。

祭りは常に戦いの序章であった。

私たちは、市民による市民政治実現にむけて、大いなる序章に新しい市民の文字を書き始めたい。

第三章●対談 市民運動から国会へ

ききて
正村公宏
(専修大学教授)

*なぜ国会へ出るか

正村 菅君とは一九七七年の五月に、江田三郎さんのお葬式のときに初めて顔を合わせて以来三年間のおつき合いで、選挙のたびに多少のお手伝いをしたりしたんだけど、案外いままでやつてきた菅君の運動とか、その中の動機とか、そういう点をあまり突っ込んで議論したことがないで、きょうは少し時間をかけて話し合ってみたいと思います。

最初に、いくらか大上段にふりかぶった質問ですけれども、そもそも市民運動と呼ばれるようなタイプの運動をやつてきた人間が議会政治していくということは、いったいどういうふうに考えたらいいんだろうか、ということです。

つまり、市民運動というのは、議会がうまく機能していない状況の中で、外側でいろいろ抗議をつきつけたり、新しい要求を発掘して問題提起したりする、そういう点で非常に成果を上げてきている面もあるし、意味があったと思うんですけどね。一方、国会へ出ていくということは、いわばプロの政治家になることだと僕は思うし、そして恒常に政治を問題にしていくということ

とであるし、もつと長期的に考えれば、広い意味で統治の機構に積極的に関与していくということですね。そこになにか質的な違いがあるんではないかと思う。

今度の選挙を見ても、市民的な団体に推されたから出たとか、そういう種類のものを国会の中でつくろうとかということを言つておられる方もいるけれども、僕は、市民運動というものと国会といふものは相互に関連づけなければいけないし、まさにそれが必要だから菅君のような人に出でもらうことに意味があると思うけれども、この二つは同じものではないと思うんですね。そのへんは、おそらくなにか考えてやつてこられたか、あるいはやりながら考えたか、ますそのへんを聞かせてもらいたいと思う。

菅 私の場合、社会へ出て最初に、土地や住宅問題の研究会から始まって、食品公害の問題とか、医療の問題とか、そういうテーマの運動に少しづつ加わってきたんですけども、たしかにいま正村さんが言われたように、市民運動というのは、スタイルとしては一つのテーマを追う運動ですから、そのテーマの代表としてたとえば議会へ出るということは、考え方としてはあり得ても、議会というのは一つのテーマのためのものじやないですから、そのあたりにはある種の違ひがあるという感じは、私もしているわけです。

私は、江田三郎さんが社会党を出られたあと、当時の社会市民連合の結成に参加するときに、議会というより、政党というものに属することと市民運動がどういう関係をもつかということを、だいぶ考えさせられたわけです。そのことと議会に出るということは、かなり関連があると

思うんですけども、私自身は正確には市民運動の代表として議会に出るわけじゃないんだというふうに自覚しているわけです。つまり私流の言い方で言うと、市民運動の経験を持つた一人の人間が政党に参加していく、また立候補して議会に出ていく、そういうことだと思っているわけです。

もう少し中味でいいますと、それじゃ、たとえば市民運動と国会というのはどういう関係を持ち得るかといえば、私は政党なり国会なりと市民運動というのは、テーマといいますか、政策のテーブルにおいては非常に共通点を持つてていると思うんです。ただ、運動のスタイルとか、それを実現していくプロセスというか、やり方にはかなり相違点がある。

たとえば食品公害の問題一つ取り上げてみても、市民運動的にいえば、有害なものは皆さん使わないでとか、場合によつたら不買運動というスタイルがある。それが議会という場においては、その安全性を厚生省にいろいろ聞いたとして、場合によつてはその認可を取り消せるような立法措置を講じていく。それはある危険な食品添加物を廃止させるという運動の全体の流れでいえば、ワンパックのものなんですね。そういう点での共通点というのは、非常にいろんな場面で、特に政策テーマという場面であるんじやないか、そういうふうな感じですね。

* 五五年体制の崩壊と新しい政治勢力

正村 旧来の保守革新の対立という図式が、どうもあまり実態と合わなくなつてきてているとい

うことは、だいぶ前からいろんな人が言つてきた。特に旧来の保革対立の図式で保守を代表する

政党としての自由民主党というものの問題性と、逆に革新のほうの代表としての社会党の問題性とが、ずいぶん長いこといろいろ言われてきて、人によつては「脱保革時代」という言い方をしている人もある。たしかに日本の社会で解決していかなければならぬ問題点といふか、あるいは政治の場で取り上げていかなければならぬイッシュといいますか、論争点といふものが微妙に変わってきていることは事実なので、五五年体制の崩壊というようにいわれてきたことの中味は、単に自民党が多数を占めていて、社会党がそれに対立しているという一・五大政党みたいな構造が変わったというだけじゃなくて、政治の場での議論の内容が、政治の中味が変わらなきやならないということだと思うんですね。

そういう意味で、今度はいろんな要因が重なったと思うんだけども、自由民主党が大勝した。しかし、その中でなお新自由クラブが善戦したり、小さいけれども社民連がそれなりに議席を守つた。あなたを含めて、プラス一ということになつたんですけれども。

菅 衆議院では五〇%の伸びですから（笑）。

正村 成長率は高い。しかし、ちょっと小さすぎるんですね（笑）。まあそういうこともあるし、それから参議院で無党派と呼ばれる人たちにわりに票が集まつて。この評価はむずかしいと思いますけれどね。しかし、そういう動きを見ても、政治の中味をえていかなきやならないということは感じられてくると思うんですね。

そういう点で、あなたが言われたように、市民運動の経験を持つた人間が政治の場に出ていくということは、いわばさまざまな形の市民的な運動を国政に結びつけていく橋渡しをするということでしょうし、国政に恒常にかかるプロの政治家として立つた以上は、ワン・イッシュ、ワン・パーティではなくて、いろいろな問題を取り上げることのできる一つの新しい政治勢力をつくっていくということだと思いますね。あなたが当選直後のテレビのインタビューで、市民運動のリーダーとして国会へ出ていて何をしようか、というアナウンサーの質問に、市民運動のリーダーとして出ていくんではないんだ、市民運動の経験者として出ていくんだというふうに答えていたのが、たいへんおもしろかつたんだけど、どうもそういうことだろうと思うんですね。

菅 そうですね。だから、市民運動ということで多少奇異に感じられてるとすれば、逆説的にいうと、たとえばいま労働運動の代表が国会の中にたくさんいるわけですね。その人たちだって、本来ならあくまで労働運動の、または労働組合運動の経験を持つた人物として政治に、また議会に出ていかなきやいけないのに、その人たちの中には——かなりといつていいのかもしれませんが、結局、労働運動の部分的利益代表としてしか機能していない人物なりグループなりがいます。もつといえば、そういう傾向が強すぎることが、いまの革新政党の政治家の非常に大きな問題点だと思いますね。

それから、もうちょっと全体的に考えてみると、先ほど正村さんは五五年体制の崩壊というこ

とを言われましたけれど、一九六〇年代のいわゆる高度成長時代に、大企業をバックにした自民党と、大労組をバックにした社会党という二つの柱があつた。その中の議論は、常にその背景にある大企業対大労組という構造の中での議論が大部分で、もちろん外交論争はまた別個の次元でありましたけれども、内政問題でいうと、そういう対応関係だったわけですね。

そうすると、まさにその議論は、国内問題でいえば、一つは生産の場の中での賃上げといった分配論の問題、また企業・自民党のほうでいえば、法人税がどうだとか、産業界の高度成長に必要ないろんな財政投融資の問題とか、そういう問題が中心になっていた。しかし、そのときに抜け落ちた問題が、まさに環境問題であり、土地・住宅問題であり、広い意味の都市問題であつたわけです。そういう問題に五五年体制的政党が対応できなかつたから、それに対し市民運動がどんどん各地で勃発してきたと、構造的に見ればそういうことだと思うんですね。

つまり、こうした構造の中で市民運動が出てきた。繰り返しになりますが、五五年体制なり、既存の政党体制がそういうテーマに対して十分な対応能力を失つてきた。そのときに、たとえ労働組合出身の人であつても、労働組合の利益代表としてじやなく、まさに労働運動の経験を持つた一人の人間として、もっと幅広い対応能力を持つていれば、社会党やそのほかの政党は、もつと都市問題にも取り組めたはずなんですね。しかし、たとえば環境問題に対して、労働組合も企業あつての組合なんだという形で、押さえにまわつたり、そうでなくとも消極的にしか対応してこなかつた。それから、住宅問題その他の医療や年金の問題にしても、企業内的な解決は求めた

けれども、生活者の立場に立つた対応は怠つてきた。そういうことが、市民運動をスタートさせ、政治構造の中にも矛盾として出てきたんじやないかと思うんですね。

ですから、最初の話に戻りますけれども、私自身が今回当選したことが注目される背景には、この十年、十五年間の都市問題、環境問題に対する政治の立ち遅れに対応できるような人材といいますか、まさに市民運動の経験なり、自治体のいろんな運動や活動の経験を持った人が、国政のレベルでの参加を阻まれていた、ということがある。そのことは、私は非常に大きな問題だと思つうんです。私の当選がその壁を破る突破口になればと思つてゐるんですけれどもね。

正村 僕はかなり長い間社会主義的な思想の流れの中に生きてきて、社会党の運動にも間接的にかかわりを持つてきた人間なんですが、そこでいろいろ問題にしてきたことが、少し狭い枠の中で考えすぎていたのかなという感じがします。いろいろと口では言つてきたんだけれども、君たちのグループと接触するようになつて、なるほどなと思ったことがあります。必ずしも僕が問題にしてきたことが間違いだとは思はないんだけど、いくらか具体的な形でわかつてきましたというか、いわば教えられたという感じが非常に強い。

今度の選挙を見ても、自民党が大勝したとか、保守への振り戻しが起つたというふうに思われているけれども、僕は、保守というのはかなり固いと、そう簡単に底割れしないというふうに思つていたわけです。今までの世論調査をずっと見ていても、自民党のほうがむしろ構造変化に対応していく、社会党のほうは、たとえば都市でも支持を失つていますしね。

その理由は、一つはあなたが言われた都市市民といいますか、都市生活者の関心に社会党が応えていない。自民党が応えてるわけじゃないんだけれども、社会党は革新を唱えてるのに、ほんとにその面では革新的ではない。労働組合というのは、たしかに勤労者の最大の組織だけでも、一つは生産点での集団的な利益擁護しかできないということと、それから戦後の民主主義の枠の中では一種の小さいエスタブリッシュメントになってる。つまり確立された勢力ですね。その上に乗つかつてるということがまずあって、環境とか、あなたの言われる住宅問題とか、そういう生活的な関心に対応しなかつたということがありますね。

それともう一つは、社会党の中にイデオロギー的な分裂があつて、特に非常に古い、いわばソ連・東欧型の社会主義を掲げたグループが非常に影響力を持つていて。そのため多數の国民に不信の目で見られている。今度の選挙でも、僕の友人のある経済学者は、「保守が勝つたというけれども、ほんとうに勝ったわけじやない。国民の多数が社会党政権が恐くなつて、保守にしがみついただけだ」という表現をしていましたけどね。これは当たつてると思うんですよ。

僕などは、今までの社会主義イデオロギーではだめなんだ、もつと先進国に合つた民主主義的な社会主義、あるいは自由主義的な社会主義の思想的、政策的な立場を確立しなきやいけないんだということを、しきりに言つてきたんだけど、どうも振り返つてみると、社会主義なら社会主義という枠の中で物事を議論しすぎていたのかな、という感じがするわけですよ。

僕はそういうことを最近非常に感ずるんですけども、江田三郎氏が社会市民連合の結成を呼

びかけたときに、あなた方のグループが参加されたんだけど、そのときにおそらく政党にかかわりを持つこと、同時に社会主義的な政治勢力にかかわりを持つことに、グループの中でいろいろ議論もあつたと思うし、抵抗があつたんではないかと思うんです。そういうのを乗り越えてきたのかな、という感じがするんですけどね。あるいはまだひつかつててあるところもあるかもしれないし、あつたら卒直に教えてもらいたいんだけど、そのへんのところはどうですか。

*市民運動と政治のカルチャーショック

菅　社会市民連合の結成に加わるべきか加わらないでいくかという議論は、當時いつしょにやつてた仲間の中では相当激しくやりました。しかし、社会主義云々という議論は、実はほとんどなかつたんです。そうではなくて、市民運動的な、無党派ということに対するある種の純粹性とでもいいましようか、そういうものが既成政党的なものといつしょになることによつてなくなつていくんじやないかというのが、参加反対派のだいたいの大筋なんですね。市民運動は特に既成政党に対する不信感が強いのですが、その中味は、必ずしもイデオロギー的不信感じやないんですね。つまり、イデオロギーをいう前というか後というか、要するに体質に対する違和感なんですね。なんかぜんぜん違うんです。たしかにスローガンや政策をみれば、既成政党も環境問題をいふし、内容的には市民運動の主張と、かなりオーバーラップするところが多いです。しかし、実際の運動の上でみてると、そういう場面には既成政党、特に社会党はまったく出てこないん

ですね。たとえば合成洗剤追放運動なんかには、出てこないわけです。そういうことに対する不信感、違和感というのがいちばん大きかったですね。

これは卒直なところ、社市連で一年、そのあと田英夫さんたちといつしょに社民連として再スタートして二年、合わせて三年間、社会党を離党された方といつしょにずっとやつてたわけですけれども、その中でも一種のカルチャーショックとでもいうんでしようか、違和感というのは、相当根強くいろんなところで、けつしてイデオロギー的な議論というスタイルじやなく、運動のスタイルで出てくるわけです。

一つの例を上げれば、会議の内容の多くは路線問題ですね。社公民がどうだとか、会派をどうするかとか、他党との関係をどうするかとか。そういう議論はたくさん出るんですよ。そういう中で、私がもう一つといって、社民連は合成洗剤反対の運動を少し運動としてやろうじやありませんかと、たとえばそういう提案を出すわけです。そうすると、皆さん、それは非常にいい、それじや菅君、がんばってくれ。議論はそれで終わりなんですね(笑)。社会党とか共産党とかの話は二時間あつても足りないんですけど、合成洗剤反対運動の話はすぐ終わっちゃうんですね。反対はないんですよ。それじやといって、私が合成洗剤でない石鹼を持っていて部屋に置いといても、いつの間にかなくなつて、またもとへ戻つてるという感じなんですね。

いつしょにやつていく中で、わりと市民運動スタイルというのはしつこいですから、じわじわやついくうちに、少しずつは変わってきてるし、いい意味でそういうことに対するウエイト

もだんだん重くなりつつありますけれども、やはり私個人としては、卒直にいつてまだまだの感じですね。たしかに路線問題も重要だし、けつして軽く思うわけじゃないんだけども、合成洗剤追放運動にしろ、リサイクルの問題にしろ、そういう問題にいかに取り組むかということは、路線問題と同じぐらい、場合によつてはそれ以上に深刻な議論があつていんじゃないかと思つてゐるわけです。

だから、さつき言われたことでいえば、イデオロギー的な面というのは、市民運動を含めて普通の市民の中では、特に極端な協会派とかソ連的マルクス主義みたいなものに対しても当然違和感はありますけれども、大部分は、そういうイデオロギー上の反撥じやないような気がするんですね。もっと現実的な目に見える行動なり、実際にその人とつき合つてみての感覚なりの問題だという気がするんです。

正村 それで思い出すんだけど、この間、ある機会に、戦前から労働運動を苦勞してやつてきた人と話をしたんだけど、その人が言うには、自分たちの時代には、労働運動といふと、なんにもないところで、飯も食えない状態で、一生懸命組織づくりをやつたというわけです。ところが戦後の運動をやつてる人たちは、でき上がつた組織と運動の枠の中で動いているという感じがするつていうんです。これはまあ、"このごろの若い者は"式の議論になりかねない問題ではあるんだけど、そういう感覚の違いはあると思う。だから、常に新しい問題を取り上げ、追及していく社会運動というものが起つてきて、その運動が提起した問題を政策的あるいは制度的に解決

していくために、しかも部分的にではなくて全体として体系的に解決していくために、政治への新しい勢力の進出ということが課題になる。過去においては、労働運動というのが、いわば市民的な権利を大衆のものに拡げていく最も重要な社会運動だったわけですね。そして、そういうものをバックにして、労働者政党みたいなものが各国でつくられ、議会の中に大きな勢力を占めていった。そういう発展段階があつたわけですね。

いまあなたの話を聞いてると、もう一つ新しい形の社会運動、したがつてそれを背景にした新しい政治勢力の登場ということが課題になつていて。それがなくて、でき上がつた労働運動の組織の枠の中で、でき上がつた運動の上に乗つかつて候補者を立て、議員さんを出していくという運動を既存の革新政党、特に社会党がやつていて。また、まさにそうであるがゆえに、世の中あまり通用しないようなイデオロギー的グループにガチャガチャかき回されている。われわれのような少し理論過剰な人間が、理論が問題だとかイデオロギーが問題だとか言つてただけでは、どうも世の中変わらないんでね。やはり、そういう新しいスタイルの運動をつくつていかなきやならない、そういうことなのかなあという感じが非常にするんですよ。

* 状況から運動が生まれる

菅 いま正村さんの言われたことなんですけど、実は私自身にも個人史的に若干そういう変化があるんです。私の学生時代は、ちょうど一九六九年のいわゆる学園闘争時代で、私の出た東工大前期はわりと感覚的に好きだったんですけども、だんだん末期になるにつれて、セクト主導の一種の革命の基地論みたいなものが出てくるのを見て、どうも違うなと思って、仲間が集まつて一種の改革派のグループをつくったことがあるわけです。

そういう経験を経て社会に出て、その前後にずっと考えたことは、一つの理論なり、ガチッとしたイデオロギーなりが確立していて、それが体系的に一つの分厚い本になつて、それを全国に呼びかけて、そこにだんだん人が集まつてきて、新しい運動が起きるのかなと——いわゆる左翼運動の運動スタイルって、わりとそういう面がありますよね。私もそういうのをそばで見てましたから、そういうスタイルなのかなと思った。そのためには、自分なりの体系的な理論を構築しながらやいけないのかなと。しかし、大英博物館に三十年通うわけにもいかないし、なかなか運動には移れないのかなと。

正村 大英博物館ね（笑）。

菅 マルクスが資本論を書き上げるのにたしか三十年近く通つたそうなんです。そういう根気もないしと思つた時期が、卒直なところあるわけですね。ただ、そういうやり方はどうもピンとこないなど半分思つてた時期に、今度の選挙でもいろいろと働いてくれた仲間に出会つたわけです。

これは運動論として非常におもしろいんですけど、いろんな人間をつなげていく人間がいるんですね。

たとえば私を一橋大学で大学祭やつてある連中と会わせる、上智でやつてある連中と会わせる、東大に行つた連中と会わせる。そういういろんな世代の、なんやかやで動いていた人間、イデオロギー的にはかなり右から左までいるんですけど、それをつなげていくんですね。私も初めはやや狭い幅で話してみて、あ、この人はおもしろい人だけど、ちょっと自分とは考え方方が違うなと思ったような人がいるわけです。で、じゃ、またと言つて別れて、これで終わりかなと思っていると、また電話がかかってくるわけですね。こうして、いろんな人間関係が生まれてくるわけです。

実は私の社会に出てから最初の市民運動というのは、一種の学生の研究会の延長のようなもので、現役の学生たちといっしょに大学祭という場を使って運動をスタートし、それを社会的に展開したという経緯があるんです。そういうときの協力関係は、イデオロギーのほうで先に区切つたら、ほとんど成立しなかつたんですね。たとえば土地問題ということでは、いまは自民党議員の秘書になつてあるような人も当時手伝つてくれたり、今では宗教運動に走つた人もいたり、いろんなメンバーがいましたが、個々の問題に關しては、それぞれの立場で協力してくれたわけです。私自身、社会へ出てからの運動をそういうスタイルからスタートしてやつてきた。もちろんそれぞれに、イデオロギーという表現が的確かどうかは別として、なにか持つてゐるものはあるわけですけれども、それが一〇〇%一致していなくとも共通する部分で運動が組み立てられてつ

ながつてきたという感じなんですね。

ですから、政党のような、やや恒常的な政治運動団体をつくつていく上では、上にかぶせる理論が必要だということは認めますし、それはなくちや困るんですが、運動論としては、理論があつて運動が起きていくというスタイルはちよつと逆じやないかと思います。さつき正村さんが言つてゐた戦前の労働運動も、イデオロギーがあつて運動が起きたというよりは、ある状況があつて運動が生まれ、運動があつて一つの理論が生まれてきたと思う。まあこれは当然のことなんですね。戦後も、その過程はたしかに経てるんでしょうけれども、戦後の状況の中でそれがやや逆転をして、先に理論や組織があつて運動があとになった。そしてその運動は、実際は完全に管理化された労働組合組織というものの中に閉じ込められて、非常に大きな矛盾が起きてきた。そういう感じが非常にしますね。

* 理論と運動の分裂

正村 それは重要な問題ですね。僕はいま日本の資本主義の歴史を書くことを、当面の大きな仕事の一つとして抱えてましてね、一生懸命古いところを掘つてゐるんです。非常に古いところを掘る一方で、昔君みたいな新しいのとつき合つんだから、たいへんなんですけどね(笑)。古いところを掘つてみてつくづく思うのは、あなたがいま運動の中から思想が形成され、理論が形成され、それで統治していくということを問題にされたけど、実際にはあまりにも体系化された理論

がでてきたことで、運動の分裂を招いてる面がものすごくあるんですね。戦争前の労働運動とか社会主義運動を見ると、これは分裂の歴史ですよ。ロシア革命の影響が大きくて、コミニンテルンができて、その衝撃で日本共産党ができるて、という過程があつて、それが非常に筋金入りの運動みたいなものをつくり出したんだけど、逆にそのことが運動を分裂させちゃったんですね。大正デモクラシーの土台の上に、もう少し平和主義とか民主主義とかを拡げていくことが必要だった時期に、運動の幅が非常に狭くなっちゃったということが、いま深刻に反省されるべきだらうと思ってるんです。その議論は意外になされてないんですがね。

そういう意味では、新しいイツシューというか、新しい論争、新しい社会的な課題を提起するということと、その課題に取り組む運動の新しいスタイルをつくるということ、それからその新しいスタイルの運動を土台にした新しい原則で政党をつくり、国会という、いわば議会制民主主義を機能させる方法をつくり出していくことが、もっとセットにならなきやいけないのかなという感じが非常にしてるんですよ。

それで、あなた方の運動のグループの人たちと話をしてみて非常に感じたのは、どうも僕などが政党とか議会とかについて考えてきたことは、ずいぶん教条主義だったなあということ。僕は教条主義批判を一生懸命やってきたつもりなんだけどね(笑)。自分もどうも教条主義なんだなあという気がする。

というのは、選挙というと政党の政策で投票しなきやいけないとか、それが本当だらうという

ふうに考えるわけ。個人ではなくて政党だという意識がずっとあったわけですよ。しかし、ほんとにそりかなあ、と今思うわけ。そうじやなくて、一人一人の議員というか候補者というか、その個人のイメージなり、あるいはあの人大から運動やつてやろうとか、そういうことが支えになつてゐる運動というのは、必ずしも全面的に否定すべきものじやない。

たとえば、自由民主党は個人の後援会中心の選挙になつてるといわれますね。中選挙区の日本では、同じ選挙区に自民党的候補者が何人も立つから、政党の選挙にはならないんだ、個人後援も悪い面でも自民党的強さの原因になつてるんじやないかと思うんですね。あなたもさつき言われたと思うけど、政党の組織とか政策とかということじやなくて、それをどういう人がどういうふうにやつてるのかという感覚ね、僕なんかが教条主義者だつたなと思うのは、そういう肌ざわざみたいなのをだいじにしようというところがあなた方のグループにはあつて、僕などは多少肌ざわりが悪くても、これが正しいんだからこれでいかなきやいかんというところがちょっとあることね。それは非常に違うなあと思う。

*議会政治の構造変化

菅 そうですね。これは正村さんに言うのは釈迦に説法なんですが、この間もジェラルド・カーチス氏がある雑誌でいってたこと、それから彼のかつての著書『代議士の誕生』の切り口は非

常に興味深いんです。つまり保革とかイデオロギーで政治構造を見るのではなく、代議士というものがどういうスタイルの中から生まれてくるかという見方で分析している。切り口がぜんぜん違うわけですよ。

つまり、なぜ革新が負けたか、保守が勝ったかという問題でも、連合政権構想が十分でなかつたとか、または保守に回帰したとかいう議論が一般には中心になつていて。一方、ジエラルド・カーチス氏は、そうした影響はもちろん否定はしないけれども、それ以上に一人一人の自民党議員というものが根ざして選挙母体、支持母体はどんなものかということです。かつては農村型だつたけれども、いまはかなりホワイトカラーに支持される要素を持つてきているという。それは自民党的政策が変わったからだという言い方ももちろんあるけれども、逆ではないか。つまり、いま正村さんが言われたように、一人一人の議員の後援会とか、選挙の母体そのものにややホワイトカラー的なウエイトがだんだんふえてきている。そうすると、綱領は変わらないかもしれないけれども、政策そのものは見えない形でジワーッと、農村型からホワイトカラー型に微妙にウエイトが移ってきたということ。そういう対応能力だとと思うんですね。最初に脱保革だと言われたけれども、私はいまの革新の最大の弱さは、そういう意味での対応能力だと思うんです。

ちょっと話はズれるかもしれません、私、いまの政府がどこで実際の物事を決めてるかというのを一時調べたことがあるんです。これは保革接近の前のときですが、政府の決定構造というのは、政府と与党自民党的各部会の、政府・与党会談でほとんど決まってるんですね。それで結

果的に国会が形骸化されてしまつてゐるわけで、今度の自民党的圧勝でまたそんなんじやないかと心配しているんですが、そのときの決定スタイルを見ても、いまのような個々の代議士の背景の変化というのが、また微妙に政治を変えていく構造というものを……もちろんそこには利権がからむわけだから、問題は山あるんですけど、そういう構造になつてるということの強さは非常に感じるわけです。逆に、いまの革新といわれる政党の構造では、いくらいの理論をもつていても——もちろん協会派とかそういうものが弊害になつてるのはよくわかるんですけど、それを全部取り除いてみても、私はまったくだめだらうと思つてるんです。

正村

これはかなり手書きらしい。

*人材供給源としての連合

菅 きょうのテーマに合うかどうかわかりませんが、社公民連合の議論も私は反対ではない、賛成だけれども、それができたからといってなにか展望があるかといえば、実はぜんぜん展望がない。それは必要条件であつて、十分条件からははるかに遠いという見方をしているんです。

人材供給源という言い方をすると、ちょっと奇異に感じられるかもしれません、私はどちらかというと、イデオロギーよりも人材供給源によつて、路線なり選択が逆に決まつてくるんじやないか、そういう要素のほうが、長い目で見たときには大きいとさえいえるんじやないかと思いまますね。

正村

社公民連合というのは、いわば政治を機能させるための一つのステップとして意識されるべきものであって、それ自体がゴールではないことは明らかだと思います。つまり、これだけいろいろ膿が出てるのに、なおかつ万年与党化した自由民主党の政権が続いているということはどうもおかしい。政権担当者が変わっていく状況をつくり出そうじゃないかということですね。そこから政治というものに国民がもう少し目を向けていく機会も生まれてくるだろうし、それこそ政治の世界にもっと人材が流れこむきっかけにもなるかもしれない。そういう意味で、あるいはその限りでのみ意味があるんであって、それ自体ですぐに気のきいた政策を実行できるものだというふうには、僕も考えてはいなかつたわけです。

菅 いま言われた中で、人材が流れ込むというのは、社公民でなんとかという大きな可能性が見えたから流れ込むという可能性も若干はあるでしょうが、私はそれが見えたとしても、いまの構造では流れ込みようがないと思うんですよ。よく社会党の人々に言うんですが、とにかく十人の全国候補のうち九人までが大労組出身だという構造がある限り、人材は流れ込みようがないんですね。

正村 そうそう。

*トロイの馬でもいい

菅 つまり、障壁だけは高くしたまま縮小再生産を繰り返している。障壁の高さは実はぜんぜん

ん変わってないんですね、以前の大きいときと。極端にいうと、ますます高くなっている。だから、その障壁のあり方を変えて、ほんとにこわしていかないと……。”トロイの馬”でもいいです。私なんか、“トロイの馬”で国会に入っちゃって、内側から壁をこわして、それでもつとワツと乗り込んでいこうと思う。それをやらない限り、残念ながらどうしようもない。

私の友人の一人が大構想を立てましてね、自民党政権を倒すために、戦後世代の自民党への人材供給をストップさせようじゃないかと。いまから十年前ほどにそう言いましてね、いろいろやろうとしたことがあるんです。それが成功して二十年たてば、自民党政権は確実に倒れるわけですよ。

しかし、十年たつたいま、残念ながら、かなり優秀な連中を自民党に吸いとられてるんですね。具体的に友人を見てて思うんですけど、なかなかこっちに来ないわけです。これはいまの二十代から四十年まで二十年間ぐらいがんばらないと、自民党はやっぱり倒れないんじゃないかと。そんな気がほんとにするんです。

*自由な個人の連合としての政党

正村

今までの野党の運動には、そういうものを超える力がないわけね。で、菅君のような人がともかく東京七区でトップ当選したというのは、そういう障壁を乗り超える可能性が出てきたということなんだけれども、しかし、菅君一人がこれだけ騒がれたりするのは、逆にいえれば

かに数が少いかということであり、障壁が大きいということの証拠でもあるわけね。

120

僕は、そういう新しいグループの運動をバックにして当選した菅君の動きを見ていて、議会制というもののあり方を、もう一度ここに戻して考えなきやいけないのじやないかなという気がしましたんですがね。というのは、菅グループの選挙運動は、社民連という一つの組織を名乗つてはいたけれども、基本的には菅という個人に結びついた人間の運動であり、そして同時に、菅君個人というよりは菅君が目ざした市民的な運動に共鳴しているグループでもあるということですね。さつき言つた自民党の後援会中心のグループとはまた違つた意味で、個人中心の運動になつている。それは僕はとてもいいことじやないかと思うんです。

というのは、日本の政党は非常に党の拘束が強くて、自由な個人の連合体という色彩が非常に弱い。党規で縛つてしまふ。したがつて、国会では一人一人の議員が投票機械になつてしまふ。そういう傾向が非常に強い。そういう組織ではなくて、一人一人が選挙民によつて選ばれた自立した代表であり、討論に積極的に参加する主体でなければならない。そうした議会制の本来の考え方からいうと、菅君たちのようなやり方こそ本当のやり方なんだという言い方もできるんじやないかという気がしてゐるんですよ。

だいたい議会制というのは、非常に矛盾があつてね。有権者だけ考えたつて八千万もいるわけでしょう。これだけの人がいちいち討論して政策を決めるわけにいかない。だから代議制というものをとる。しかし、選挙で選ばれた代議士というのはいつたい何なのかな。国民に白紙委任され

たのか、それとも国民にいちいち相談しないと法案に対する態度を決められないのか、という問題がある。

いちいち相談してたんでは代議制の意味がなくなつてしまふし、煩わしくてしようがない。しかし、そとかといつて白紙委任しちゃつたら、民主主義はうまく機能しないんじやないか。そういう点が、今までの議会制の中で解けない点です。それから、代議士が一人一人バラバラに行動したんでは、法案一つ通らないから、やっぱり政党をつくる。パーテイーをつくる。日本では党というと非常にいかめしいけど、パーテイーですね。要するにグループをつくるわけです。しかし、そのうちに今度は政党が選挙民からなにか政策を請け負つて、議会で徒党を組んで押し通すという格好になつてきた。議会政治が政党政治になることで、本来の自立した個人の土台の上に立つた自立した代表の自由な討論を通じて政策を決めるという議会制の理想は、消えちゃつたわけですね。そこでレーニンに言わせれば、議会はおしゃべりの場でしかないという批判が出てくるわけでしようし、だから議会制ではない方法で政権をといふことになる。またカール・シュミットのように、政党政治になつてだめになつたというふうなことを言う。そして、レーニンの場合は左の全体主義を招き寄せたわけだし、カール・シュミットはナチスの理論を利用されたわけです。議会制民主主義についてのニヒリズムは、そういうところから出てきているわけですね。だけど、結局ほかにいい方法がないとすれば、やっぱり議会を活性化する以外にしようがない。そこで、もう一度出発点に戻つてみる。出発点の非常に理想化されたモデルがそのまま使える

とは思わないけど、もう一度、非常に自立性の高い一人一人の政治家というものを重視する立場から出発し直す必要があるんじやないか。そういう人の新しい連合をつくっていくということが必要なんじやないかなという感じが、僕は非常にしてきたんです。

* 運動スタイルそのものへの共鳴

菅 そのあたりになると、私には非常にむずかしくて、まだよくわからないところがたくさんあるんですけれども。今回の選挙を含めて私の運動体というのは、政党とか組織にくらべれば個人的な色彩が強いんですけど、ある意味ではそれ以上に、運動スタイルそのものへの共鳴によって成り立ってる運動だという気がするわけです。つまり、これは選挙のやり方でも、また一般的の運動のやり方をめぐつてでも、いろんな矛盾は起きるんですが、できるだけそういうことをやろうとしている。参加型の運動とでもいえましょか。ですから、そこで候補者である私が何を言うかという、話の内容ももちろん非常に重要なだけれども、その候補者なり、また選挙運動なり、さらに日常の運動なりがどういうスタイルで成り立ってるのかということが重要ななる。いわゆる一枚岩的に、どこかに委員長がポンといて、パッと命令を出してダツとやっていくというスタイルなのか、そうではないのか。もちろん私の運動は、そういうのじゃなくて、自分はたとえば医療問題について協力をしよう、しかし、食品公害は重要だけれども、ちょっとそこまでは手が出ないというふうにやる。逆に本をつくるとかいろいろな政策立案の部分は協力しようと、し

かしひラまきはちょっと時間がなくてできないとか、あるいは車の運転とかなんとかはやろう、いろんな話は聞きたいけども、あまりむずかしい文章を書けとかいうのはちょっと苦手だとか、そういういろんなスタイルの人があさに自発的に参加して、なんとなくこれまでやつてきた。これはやっぱりある種のノウハウなんでしようが、そういうスタイルの運動として維持し、場合によつては拡大することができると思つています。そういうスタイルの選挙を私たちは市民選挙と名づけたわけですが、その市民選挙をテコにして、一つのチームといいますか、グループがなんとなくできてきてるんじやないかと思うわけです。

それから、その問題と、議会制民主主義とがどうかかわるかという問題ですが、私がいちばんわからるのは、実は政党というものがどういう意味を持つかということです。これは非常にむずかしいですね。

私は政党を否定するわけではない。しかし、政党というものは、きわめてプライベートな性格と、たとえば自民党のように、きわめてオフィシャルな公的権力としての性格と、パワーの持ち方によつて両極端の性格を持つていて。

たとえば私と正村さんが二人で政党つくつてもかまわないわけで、こういう場合は明らかにかなりプライベートな運動の形なんですが、自民党が政権をとつて、今回圧倒的多数を占めてしまつた。そうすると、党の中で政府も構成するし、国会の過半数を占めるわけですから、事实上その中で日本のことほとんど決まつてしまつ。つまり、議会制民主主義においては、一人一人の

議員が政党に所属していて、議会で多数をとった政党が内閣をつくる。そうすると、政党といふものはたいへん大きな意味を持つていてはなんですが、どこで個人の集まりとしての性格と公的な性格を調和させていくか……変な言い方ですけど、いちばん緊張関係があるのは、そういう意味では政党の中かもしれないという気がするんですね。

その政党内部の意見集約の仕組みについていえば、自民党は陳情、派閥、根回しといったスタイルでいろいろ悪い面はあるけれども、ある種のノウハウだけは持つてゐるわけですね。また、ほかの政党は、たとえば共産党はいわゆる委員長の命令一下パシッと決まっちゃうという。はたしてあれでいいのかという疑問はあるけれども、ともかくノウハウを持つてゐるわけですね。ただ、ほかの社会党とか私のところの社会民主連合がどういう形で意見集約ができるかというと、特に社会党の場合、あの大きさは非常に中途はんぱなんですね。命令一下でもない。かといって、個人個人がいわゆる地盤といわれるところの意見集約をしながら調整していくかというと、そういうスタイルでもない。その間にもう一つ労働組合という大きな団体があつて、それがまた動いてる。動くのはいいんだけども、そこからはずれた議論は、政党というところからは消しとんでしまう。そのあたりに政党というもののむずかしい問題がある。だから、市民選挙の次は市民政党がテーマになるかも知れないなという感じが、いま非常にするんですね。それも政党のスタイルの問題かなという。

*議会制民主主義における個人

菅 それともう一つは、先ほど言われた議会制民主主義の中における個人の問題。特に参議院は、そういうスタイルをもつと純粹に追及していっていいんじゃないか。ただ、衆議院の場合には、政党と個人と、議会での多数決というものがどうリンクするのか。特に日本のような議院内閣制の場合に、どういう可能性があり得るかという点で、政党をもう一回市民化していくようないふべきだね。

正村 僕が言いたいのは、あなたの言う政党の市民化あるいは市民政党的なものというのとは議会制民主主義にとって異質なものではなくて、むしろ本質的に求められてるものだということです。

菅 そうでしょうね。

正村 二十世紀に入つて、巨大産業と巨大労働組合の対抗というような形の中で政治が動いてきたために、多くの人は議会制の本来の可能性について、だんだん悲観的になり、あきらめちゃつてゐるわけですね。そのためにむしろ圧力団体にくつついたほうが得だという格好で動いてきちゃつてるんだけど、案外そうじやなくて、非常に価値観も多様化し、社会階層形成も非常に多様化したというか、塊りがたくさんできる格好になつてきて、どのグループもそれだけでは多数派にはなれないような、そういう仕組みができ上がつてくると、つまり成熟した社会ができるく

ると、今までのような巨大組織と巨大組織がぶつかり合うということじやなくて、そのあいだにいろんな隙間がたくさん出てくる……。

菅 だから、その隙間を埋めなきゃいけないわけですね。

正村 そうそう。民主主義以外にわれわれの社会の政治制度が考えられないとすれば、もう一度そこにいくしかない。問題はたくさんあるけれど、だからといって、権威主義とか全体主義といふのはまずいということはわかつてゐるわけですからね。そうすると、これを追求する以外ない。いま、案外そういう条件が出てきてるのかもしれないな、という感じがするわけです。

ただ、なんといっても、まだ小さいわけね。だから、いまの日本の政治状況の中で、いつたい菅君に何ができるか、何を期待できるかということは非常にむずかしいんだけど、自由民主党が再び圧勝したけれども、いろんな人が言つてるように、十年前に完全に戻っちゃったわけではない。状況が非常に変わりつつあるということはもうあまり動かせないことであって、いわば螺旋状にまわつてゐる。ジグザグに動いて、もとへ戻つたように見えるけれども、それは螺旋型になつてゐるので、新しい要素がいろいろ出てきながらも、なおかつ保守が強いという仕組みになつてゐると思うんですよ。だから、小さい組織、小さい運動にはそれなりに、いわば情報的な衝撃力みたいなものを持つことが非常に重要なんで、あなた方のグループがともかく国會議員を一人出したというのは、決して小さなことじやない。そういう衝撃力のある情報を蓄積し、かつそれを拡げていくという意味で一つの橋頭堡を確保したんだというふうにまず考える。まあ、政権な

どというのはだいぶ遠い話ですから。もう二十年もすると、われわれはもう老兵になつて、菅君たちのグループがまさに日本の政治を動かすことになる。二十年か三十年たてば、状況は変わるだろう。それへの布石だと思うんですけどね。

*市民パワーの共闘

菅 そのあたりは、一つは情報の問題でいえば、いま正村さんが言われたように橋頭堡を一つ確保したということ。たとえば行政からいろいろな情報を手に入れて、もっとオープンにしていくとか、また市民運動と議会の連係ということでいえば、情報を共有するということがいちばん重要だと思うんです。直接の運動としては、それが非常に重要なことですけれども、もう一つは、市民運動、市民選挙、市民政党的な運動のノウハウ——これも情報といえば情報なんですが、これを広く伝え、共有化していくこと、さらに共同作業まで含めたトレーニングの場をつくつていくというのが非常に重要なんじゃないのかなという気がしてゐんです。

さらに、ここまで言つていいのかどうかわからないんですが、正村さんが言われたように螺旋状にだんだん変化しているということ、私もまだ七割、六割ぐらいはそう思つてゐるんです。が、実は最近、四割五分ぐらいは、へたをしたらそうじやないかもしないという非常な危機感を持ちはじめているわけなんです。つまり、政権を維持する構造としては、自民党は政治腐敗を含めて、明らかにおかしくなりつつある。しかし、それに代わるべき革新のほうの対応能力は、残念

ながらますます低下しつつあるとさえいえる状況だと思ふんですね。そういうものを見ていくと、はたしてそれが螺旋的に進んで行くかというと、これはやや主体的な意味も含めていくんですが、少くとも状況の流れの中だけでいえば、そう樂觀はできないんじゃないかな。

じゃ、具体的に、そういう螺旋型に進んでいく可能性を高めるためにはどうしたらいいのか、先ほど言われたように、われわれがいくら市民選挙だ、市民政治だ、また社民連だといったって、急に衆議院の三議席が百議席になることはあり得ないわけです。ただ、一つだけ考へてゐるのは、既存のパワーですね、それは労働組合であつたり、宗教団体であつたり、また別の意味でのパワーもあるわけですから、こうした既存のパワーとの共闘をある部分ではしていくべきではないかと。まあ、戦略論を言うのはちょっと早すぎるかもしませんが、いま少し考へてゐるわけなんですね。

つまり、たとえば総評に全国区候補を十名出す力があるとすれば、その半分ぐらいの組織を市民選挙との共闘に当ててもらう。そして候補者選びや選挙スタイルを含めて市民選挙的やり方でやれば、もっと多くの当選者が出せると思うんです。

つまり、市民選挙的なやり方と、これまでの労働組合的な選挙のやり方では、パワーの使い方がまったく違う。労働組合型の選挙はまず枠を広げてから内側に攻めていくんですね。つまり組織のメンバー五十万なら五十万、家族を含めて百万あるとすればいかにそれを歩止まりよくまとめてきるかということです。内へ内へ向かって、大幹部、中幹部というように、いろんなところへ

行つて、あいさつまわりをしながら固めていく。隣の家に頼むんじやなくて、まず外枠を広げて内へ内へと進む。だから、当選に必要なだけの票をもつた組織が必要になる。

市民選挙には、そういう何十万という組織がないせいもありますけれども、たとえばリサイクル問題とか薬品・食品公害とかいうテーマをもつて、外へ外へと拡げていくわけです。つまり候補者がやってきたテーマ、やろうとしているテーマが一般の共感を得られるものであり、それを確実に有権者に伝えるだけのパワーがあれば、支持の輪は意外なところまで拡がっていくわけです。それこそ労働組合の幹部であろうが、お医者さんであろうが、リサイクルというのは重要だからとか、食品公害の問題なんて誰も言つてくれないからという形で広がっていくわけです。だから、私は同じパワーの使い方でも、労働組合のパワーを今までのようく組織内の票固めでなく、候補者のもつているテーマを有権者に伝えるという形で使えば、選挙でもかなり効果的な使い方ができるんじやないかという気がするわけです。

*労組パワーと市民選挙の結合

菅　さらに、これは労働運動の中味、組合運動の中味の問題になりますけれども、そういうスタイルの運動だったら、特に若い労働者の中から一種の意欲を持って参加してくる人が間違いないいると思うんですね。つまり、上の幹部から司令が来たからやるという形だと、組合幹部でいもなろうかと思う人はがんばるかもしれないけれども、そういう意識のない人は、ああ、また

か、しかたがないな、ぐらいですんじやうけれども、一種のテーマに対する共鳴という形でくれば、いやな人はやらないかもしないけど、やる人はかなり自発的に参加するということもあり得ると思うんです。それが組織という形になっているから、情報的に非常に伝達しやすいし、パワーとしても、たとえば共鳴者があればまとまって協力しにくとか、チームプレーとして協力するとかといふ形で、非常にやりやすいわけですね。だから、もし急いでやるとすれば——というのも変ですがそういう既存のパワーと、市民選挙なり市民政治的なノウハウとがいい意味で共闘関係を結んでやれば、かなりおもしろいことができる。

私は、十分その可能性はあると思うんです。つまり、国民春闘でいわれているようないろんな政策にしろ、労組の政策推進会議でいわれている政策内容にしろ、実はそういうスタイルのほうがあいちばん取り組みやすいし、そういうスタイルでかつがれた候補者は、そういうものに対していちばん本音と建前の差がない形でやれるわけですね。たとえば減税の問題とか住宅問題とか。しかし、いまのような労働組合のスタイルでやった場合は、選挙のときだけは住宅問題、減税問題というのを取り上げるけれども、候補者も本来そうしたテーマは不得意な人が多いから、選挙が終われば、やっぱり出身組合の利益代表に終始してしまう傾向がたいへん大きいわけです。

正村 その点はなかなかむつかしいとは思うけれども、可能性はなくはないと思うんです。それは旧来のようなタレント候補というか、顔の知られてる候補者を呼んできて、それを労働組合なり何なりの既存の組織の上に乗つけて票がためをして当選させていくというやり方ではもちろん

んだめなんで、それははつきりしてゐるわけですから、むしろ既存の社会党なり、あるいは労働組合的な勢力をバツクにしている人たちの政治運動のスタイルを変えるという性格を持つたものにしていくということでなきやならないんだけど、これは組合のほうも影響力の衰弱を感じてゐるわけですよ。

つまり、いま有力な労働組合の一般組合員の世論調査やると、社会党支持なんてものすごく少いわけ。むしろ自民党支持のほうが多いくらいなんですよ。そういう現実があるから、あなたが言わされたように、囲い込んで枠をつくって、少くともこれだけはとらなくちゃと、一生懸命がんばるわけ。そうじやなくて、労働組合もまた自分の組合員が持つてゐる関心の拡がりを意識せざるを得なくなつてます。賃上げだけやればいいというんじやなくて、社会保障制度とか、住宅問題とか、都市の環境とか、医療とか、そういうことについてやはりなにか言わなきやならない。

僕は前から、労働組合が政治を取り上げるというときに、旧来はなにかでき上がつた政治イデオロギーで組合員を引っ張っていくことがしばしばあつたけど、そうじやなくて、組合員自身の関心の拡がりから考えて、もっと政治的、政策的な問題に出ていかなきやならない。だから、それは枠に閉じこもるんじやなくて、当然拡がらなきやならない。僕は「自己拡張的組合主義」と言つたんだけどね。それ自身の論理によつて運動の枠を拡げなきやならない。そういう必要が出てきていると思う。それに共鳴してくれる組合の指導者もいないわけじやないんです。ただ、そういう人たちも、どうやつたらいいかわからないんだと思うんですよ。だから、そういう

ものに新しい問題提起、政策の拡がり、そして運動のスタイル、そういうものを示していくどうか……教えるという意味じゃなくて、いつしょに考えていく。

菅 いつしょにやりながら考えていく。

* 東京七区はどういう選挙区か

正村 そういう可能性は僕はあると思うんですよ。

ただ、それはまたなかなかむつかしい点があつてね。ちょっと関連して聞きたいんだけど、たとえばそういう新しい形の運動が非常に可能性を持つて動いていくことと、それがなかなかむつかしいところと、現実にはあるわけね。非常に具体的な話になるけど、東京七区で菅君が出たというのは、必ずしも偶然じやないわね。やっぱり東京七区という選挙区の特徴があると思うんですよ。僕はある意味ではだんだんそういうところがふえていくだろうと思うんだけど、いまの段階では、あそこはやや特殊なところというふうに見られなくもないね。そのへんをどう考えますか。

菅 七区というのは、たしかに典型的な大都市郊外地域なんですね。基本的には住宅地域で、工場も多少はありますけれども、どちらかといふと工場のほうが例外的な存在で、団地と平家住宅と、そこに住んでいる人たちのショッピングのための商店街。吉祥寺とか立川のように大きな町もありますけれども。そういう意味で、たしかに典型的な郊外地選挙区です。そして比較的教

育水準が高く、自立した市民の多いところですね。ですから個人的なつながりがなくとも、有権者のほうが候補者の言動をよく見ていて判断するという感じが強いところです。いま日本においては、こうした郊外型選挙区が非常に多くなってるんじゃないでしょうか。つまり、東京、大阪、名古屋という大都市郊外地域であり、同時に、場合によっては中都市のある部分までもが、ややそういう傾向になってきてるんじゃないかと思うんです。だから、衆議院の百三十選挙区の中で、数えてはいませんけれども、場合によつては三割とか三分の一ぐらいを占め得る、または半分近くを占め得る要素はあるんじゃないかという気がするんですね。

社民連には、阿部昭吾さんという山形二区から出た衆議院議員がいます。私、よく地元の話を聞くんです。もちろんスタイルは非常に違うんですが、あの方も労働運動じゃなくて農民運動、それも大都市の共同購入の生産基地的な要素とか、または漁業まで含めた一つの事業共同組合みたいなものをつくる、そういう生産の場——地域的な農業、漁業という生産的な構造まで含めた一つのチームづくりをやっておられるわけですね。

しかし、いま大都市郊外型選挙区での新しい運動論と組織論の必要性を痛感しています。大都市における都市住民の政策というのが、非常に今まで遅れてきたわけですが、それは都市住民が自分たちの利益を代表する議員を農村のように送り出せないことに大きな原因がある。そして、こうした構造が作りにくい原因は、実は都市住民の利害関係というのを集団化しにくいためなんですね。たとえば土地問題にしたって、住宅問題にしたって、そういう土地や住宅の組合を

つくつたからといって、特に土地が安くなるわけでもないし、それから医療組合をつくつたって、簡単にはいかない。しかし、農村型とかそういう形の場合は、そういう面もたくさんある。地域による性格の差はあるんですが、私はそういうのを見ると、これも運動のもう一つ別のノウハウなんでしょうけども、あり得るんじゃないかという感じが非常に強いんですね。

つまり、今まで日本のいろんな運動、または政治構造が硬直化したというのは、そういう運動のノウハウの開発が特に社会党において遅れましたと。せっかくかつての蓄積があつたものまで放棄してしまった。戦前の農村地域というのは、私も詳しくは知りませんが、農民組合という形での小作争議というものがベースにあった。それが農地改革でなくなつたというけれども、そのときにそれに対応した形の運動が組み立てられた地域もある。そういう形は山形で残り、場合によつたら、今度は落選されたけど、新潟の三宅さんのところに残つている。岡山の江田三郎さんの運動母体も、歴史的経緯はそういうことだったと聞いてるわけですけれども、それも同じことじやないか。まったく同じという意味じやないんですけど、運動という意味でいえば、同じことじやないかという気さえするんですね。

正村 つまり、農村の場合も、農業構造、農村構造の変化に対応した新しい運動のスタイルを創造できなかつたところに、革新の一つの問題があるというわけね。同じように、急速な都市化によって生じた都市住民の拡大という事態に対しても、実は革新政党は対応できなかつた。なんとなくフワッと、護憲とか中立とかいう路線に沿つて票を入れてきた選挙民の関心さえも、最近

では逃がしちゃつたということだろうと思うんですけどね。

菅 そうですね。

正村 選挙区の話を伺つたついでに、もう少し具体的に教えてもらいたいんですけど、いままでに、何回選挙をやつしたことになりますか。

菅 最初がロッキーのときの衆院選で、七六年です。それから七七年が江田五月さんといつしょにやつた参議院の東京地方区。それから去年の衆議院、そして今回です。衆議院は三度目、

その間に一回、参議院の地方区が入つたということです。

正村 僕はそう細かく追つてないんだけど、とにかく素手でというか、まったく無名の菅直人が七六年に立候補した。その前に、市川房枝さんを担ぎ出す運動の事務局長かなんかをおやりになつて、それで多少選挙の感触は覚えられたのかもしれないが、七区ではあまり知られてない新人だつたわけでしょう。で、一挙に七万票だかをとつたんですよ。

菅 七万一千余り。

正村 そして、東京地方区に立つたときにも、残念ながら、ちょっと届かなかつたわけですが……。

菅 ええ、一九万九千余り。

正村 で、去年はやっぱり七万いくら……。

菅 票数は六万七千ちょっとですが、率でいようとほとんど変わつてない。ちょっと上がつたん

です。

正村 で、今度ぐっと上がったわけですね。非常に都市化してサラサラした砂のようになつて、うまく系列化もできないし、補助金で釣るわけにもいかないし、橋つくつたからといって票をもらうわけにもいかない。そういう非常に都市的な選挙の中では、無名の新人にしては予想外の票をとり、最終的には当選にまで結びついたわけだけれども、そういう選挙の場での選挙民の支持と、あなたが今まで実際にやつてきた市民的な運動とは、どういうふうにつながっていると考えておられるんですか。

* 生活のなかの選挙

菅 基本的には、市川さんの選挙をやつしたことやロッキード事件に対する政治姿勢、いまの腐敗した政治、先ほどから言つて硬直化した政治に対しておかしいじやないかと言つてきた主張なり姿勢なりがホワイトカラーとその奥さんを中心とした人々にある種の共感を呼んだというのが、たとえば最初の選挙のああいう予想外の結果の基礎になつてゐるんじやないかと思うわけです。前回もだいたいそのスタイルが基本になつて、世代交替論、世代交替と政治姿勢というのをやオーバーラップして表われると思うんですが、そういうものも重なつてきました。それから私が取り組んできた都市問題やエコロジーといったテーマに対する共鳴。今回の選挙では、大きく分けて三つのことを訴えたわけです。

一つはいまの腐敗に対する政治姿勢の問題。もう一つは都市に住む生活者の立場に立つた政治。住宅問題、医療問題、食品公害、年金、こういった問題について訴えたわけです。もう一つは自然と調和をした生き方、エコロジー的な問題を、マツクイムシの話とか、リサイクルの話とか、そういうことを例にとりながら訴えた。だいたいこの三つの柱があるわけです。

それから、選挙構造の拡がりといふことでいえば、今回の選挙で、これまで非常に入り込めなかつた、たとえば吉祥寺とか立川の商店街の若い層ですね。二代目というか三代目というか、二十代、三十代、四十代ぐらいの若い層の商店主の中にかなり支持者ができたり、また積極的な応援をしてくださるチームが出てきたということなんですね。私もそういう人たちとつき合つてつくづく思つたんですが、商店の若い経営者というのは、地域問題に関しては非常に関心が強いんですね。まあ当然といえば当然なんですけども。

同時に大きな企業との問題でいようと、当然利害関係はかなり違つた立場です。それともう一つは世代的な共鳴があるわけですが、そういうところに前回までにない支持の拡がりがあつたといふこと。それから年齢構成もかなり高い層まで……たとえば非常に典型的な方は、七十七歳で、三かつてある町の町長をやつてて、七期ぐらい市会議員もされている保守系無所属なんですが、三多摩では非常に信頼を持たれてる方がおられて、そういう人が、それこそ保守・革新ということじやなくて、政治姿勢に共鳴して、三多摩からこういう若い連中を育てなければという形で応援して下さつた。そういうように、支持者の年齢構成もかなり拡がつた。

そういう意味では、私はいつも、組織も金もない選挙と言つてたんですが、もちろん巨大組織とか大きな金とかというのは今回もなかつたんですが、地域的な人間のつながりという意味での組織はかなり拡がつてきた。固有名詞でわかり、また固有名詞で応援をしてくださる人のバリエーションといいますか、それがかなり多彩になり、かつ拡がつてきたという実感は、今回の選挙では非常にありました。まだ前回から半年しかたつていなかつたわけですが、前回に比べて、私の感じで少くとも三倍ぐらいは実態的に拡がつてるという感じがありましたね。

それと主婦の応援でも新しい試みがたいへんうまくいった。自分が行く投票所一つについて、だいたい七ヵ所から八ヵ所の公営掲示板があるんですね。それを一投票地区というんですが、私の選挙区では二百五十四投票地区あるわけです。その二百五十四投票地区について、その近くに住んでる主婦に、七枚なり八枚なりのポスターを貼つてもらえないかと頼んだわけです。初めはできるかななんて、多少不安がられたんですが、半分ぐらいの地区をそういう形でお願いして、あとでどうでしたと、お札の電話をかねて聞くわけです。そうすると、たいへんだったという返事よりは、ほとんどの方がおもしろかったというわけですね(笑)。初めて貼つてみて、おもしろかったと。ちょっと掲示板が高すぎたけど、公明党の人が来たから貼つてもらつたとか、子供連れでちょっと貼りに行つたとか、そういう話なんですね。

つまり、これまで子供を持つている主婦の方には、私たちも何をお願いしていいかななかわからなかつたということもあつたんです。それが、今回は自分の地域で生活をしながら応援する

という形ができてきました。それはポスターを一回貼つてもらうと、その分だけ労力が助かるのはもちろんですが、それ以上のすごい効果がある。毎日買い物に行くとき、そこを通るわけですね。すると、気になるわけです。誰かといっしょにいると、これ私が貼つたのよ、という。ちょっと汚れたなとふいたりする。そのコミュニケーションですね。ものすごいコミュニケーションのチヤンネルが、それで一気にできる。

これまでだいたい普通の家の奥さんとかサラリーマン、いわゆるややインテリといわれる人というのは、自分は支持してるけどあんまり他人に物は言わないというスタイルなんですね。それがちょっとと参加をしてもらうことによって、他の人にも言っちゃうわけですね。

それから選挙はがきも、枚数は少くともいいから、できるだけ多くの人に書いてもらうことに頼めば三千枚ぐらい書いてくださる方がいて、もちろんそういう方にも部分的にはお願いしましたんですね。公選法上三万五千枚のはがきが使えるんですけど、たとえば市会議員や区会議員の方に頼めば三千枚ぐらい書いてもらつたら十二人ぐらいで終わっちゃうわけですよ。それをたんですが、たとえば三千枚書いてもらつたら十二人ぐらいで終わっちゃうわけですよ。それを十枚ずつ頼めば、三千五百人の人に頼めるわけです。その人たちはやっぱり同じなんですね。必ずそこに電話が入つたりするという。そういう意味で、私たちはそれを「地域参加型市民選挙」と名づけたんです。そういう形でわりときめが細かいというか、もう一つ参加をした形での応援が得られたり、これまで応援が得られなかつたというか、なかなか入り込めなかつた商店街にもかなり入り込みたり、それから年齢構成も拡がつたり、ごく一部ですが無党派的労働組合の人も

多少応援してくださったりという、そういう点ではかなり基盤が拡がったという感じがします。

正村 なるほど。菅直人が東京七区で立ったおかげで、政治参加を初めて経験したという人がものすごくできたわけね。

*ゲームとしての民主主義

菅 少くとも今まで投票したあと、テレビを見てああだこうだといってただけの人が、もう一步踏みこんで参加したという例はかなりありますね。それから、この間もある人から、菅さんがやつてたからカンパをちょっととしたと。自分にとつて、やや積極的な政治参加としては初めての経験だったなんて、手紙もらつたりしました。それはたしかにあると思いますね。

これはほかの政党の人と話しても、そういう自発的参加のスタイルがかなり拡がりつつあることは間違いないですね。こういう形を積極的に掘り起こして新しい形の組織がつくれるか、どこかであきらめて、いやあ、手間だけかかつてめんどうだから、お金はどこかから大口でもらつてきてバラまいたほうが効率的だと考えるかによつて、将来は変わると思いますけれども、少くとも可能性としてはかなり拡がってきてるんですね、ほかの人の選挙を聞いても。

正村 戦後民主主義が空氣みたいに定着してゐるんだよね。それをうまく組織化できていないだけの話で。

菅 そうですね。

正村 組織化というと、いままではカッチリと党に忠誠を誓うような党員をつくることが組織化だと思つてたから、やっぱりうまくいかないんですね。しかし、僕はそれは一つは、菅君の政策に共鳴したというよりも、最初に言われたようなフィーリングというか、僕の言葉でいうと肌ざわりといふか……。

菅 スタイルですね。

正村 スタイルね。菅個人及び菅グループの持つてる雰囲気がそういうものを可能にしたと思うんだけど。

僕があなたの選挙事務所であなたの運動してゐる人たちと接触して感じたのは、非常に楽しんでやつてることなんですね。そして菅君自身が非常に楽しんでやつてる。まあ、本人はえらい苦労もしてるんでしようけどね。楽しそうにやつてるという感じね。もっとも、菅君自身がえらく深刻な顔してたら、選挙事務所の雰囲気も深刻になるんだろうけどね。その秘訣って何なのかな。つまり、そういう楽しい雰囲気があるから、さつき言われたような二百何十かける七ないし八ですか、そのポスター貼りも気持ちよく引き受けてくれることになつてくる。まあ、何回かやつてるうちにそういう雰囲気が伝わってくると思うんだけどね。その楽しんでやつてるといふことはどういうことですかね。あなたが担がれて立候補してゐる感じなのか、それともみんなを引っ張つて運動をやつてる感じなのかというふうに、仮に問題を立てるとき、どっちでもないような感じが僕はするんだけどね。そのへん、もうちょっと聞かせてられないかしら。

菅 秘訣ということもないんですが、一つ、私なんかの運動のある大きなエポックになつてゐる

のは、六年前の市川さんの選挙ですね。市川房枝さんを担ぎ出したときの私を含めた若いグループ。そのときは、市川さんに候補者という“みこし”になつてもらつて、パツとやつたわけです。そのときの雰囲気なりノウハウみたいなものが、いい意味で再生産されながら続いています。う感じはするわけです。つまり共同作業なんですね。だから、私が候補者になつた最初の選挙でも、もちろん私は候補者という立場ですけれども、いっしょにやつてる仲間の中では、一種の役割分担として候補者を受けたという要素も、運動としてはあるんです。ただ、候補者というのには、もう一つぜんぜん別な側面がある。投票をしてほしいという以上は、運動の一員というだけではもちろんいけない。有権者といいますか、国民の代表としての役割をになうという覚悟がなければいけない。そういう二つの側面があるんですが、運動の仲間の雰囲気としては、やっぱり役割分担的な感覚が相互に自然に維持されてるということですね。

いま正村さんが言われた中で、非常に典型的な例は、私の家内が今回もかなり選挙をいろいろ手伝つたわけですが、選対の中で居心地がそんなに悪くないというわけですよ。悪くないというのではなくて、どうして悪くないかというわけですね。まあ、変な見方なんんですけどね。もちろん、礼儀としてのあいさつはやらなきゃいけないし、またやつてたようですが、少くとも仲間的な運動の中では、候補者の奥さんというのはこういうスタイルでなきやいけないというようなことが、あまり雰囲気としてはないんですね。

それから、やや個人的なことといえば、私自身の中に、半分は候補者そのものであるという意識と、半分は私自身を含めてこのチームを外から見て、なかなかおもしろいことやつてるなどいう客観的な目が、自分の中になんとなくあるわけですね。だからといって、けつしていいかげんにやつたとか、遊び半分にやつてたということじやないんですけど、自分なり自分たちがやつてることをやや客観的に見てる自分が、ある部分に残ってるんですね。これがときどきは逆に言われましてね。あなたはどうしても当選したいという気持ちが最後のところで少し足りないんじゃないかと（笑）、言われたことがあるんですがね。

正村 楽しんで選挙やつてる間は当選しないとかね。

菅 そう言われるんですけどね。そのあたりは運動の体质と個人の体质も若干あつて……けつしていいかげんにやつてるわけではないんだけど、どうも少しそういう目が残りますね。

正村 選挙事務所へ行つて、あなたの奥さんにもお目にかかるけど、夜遅くまで事務所にて、けつこうたいへんなことはたいへんなんだけど、非常に楽しそうにしておられるところがあつてね。非常に愉快に話をしたりしたんです。悲壮な顔して頭を下げて歩いてる、どこかの候補者の奥さんの写真を新聞で見たりすると、非常に違うんでね、たいへんおもしろいと思つたんですけど。

やっぱりそういう……不面目というわけではないんだが、非常に真面目なんだけれども、自分を客観化させていて、まあ、それならちょっとやってみようかというんで、やりながら自分を

観察しているというか、そういうところがあるのは僕も感じられる。それは菅君自身もある面では非常に醒めているし、運動をやつてる人たちもある面では非常に醒めていて、しかも楽しんでやつてるというのはたいへんいいところだらうと思うんです。まあ、そういう選挙ができるというのは、大きいくらい日本が非常に平和だということでもあるんでしょうけどね。なんとかしなくちや、これはたいへんだ、ファシズムが来るという状態でないということが、一つはあるんですけど。しかし、逆にそういう日本の社会の状況なのに、ファシズムが来るとかなんとか言つて深刻ぶつてばかりいる政治家たちが一方にいるんですね。それは僕は成功してないと思うんだけど、そういうコントラストがありますね。

菅 そうですね、もちろん広い意味では平和だというのが反映してるんでしょうけど、これも一種の、まあ、近いところは戦後生まれ世代が多いわけですが、必ずしも戦後生まれという世代の問題だけじゃないんでしようが、ある意味ではまさに議会制民主主義とか民主主義というものをルールとしてというか、——これは誤解を招きやすい言葉なんですけれども、ゲームとしてというか、見ているところがある。また逆にいうとそれに対してもうろん疑問はものすごくありながらも、一定の信頼を持つていて。つまり、矛盾は多いが守るべきものも多い現状の社会では、そういうルールの中でやることがいちばん大きな、逆の意味での影響力がある。ルール外のことまで何をやろうがかまわないんだというスタイルで権力を握ることそのものが、逆の意味で影響力が小さくなるということを、私を含めて本能的に知ってるようなところはあるんですね

ね。だから、こういう私たちのような運動があちこちに存在している限りはそう簡単にファシズにはならないと。こういう形が次々に存在できなくなっていくときは危いと、まあ、そんな感じを持つっています。

正村 さっきの言葉を繰り返せば、戦後民主主義というのは、危機だ、危機だとうふうに叫んでる人が考えてるようなものではなくて、もうちょっと幅広く、また深く国民の中に、いわば空気のように入透してくるんであって、これはそう簡単にはこわせないと。しかし、そういうものを絶えず政治参加の場所に引き出してくるというか、そういう政治参加の場をつくり出して、一つの政治的な力として活性化していくという努力をやらないと、ほんとにファシズムになつてしまふかもしれない。そういう努力をほんとうにやらないで、ファシズムが来ると叫んだり、ただ汚職がけしからんと叫ぶだけだったら、あんまり成功しない。そういう意味では、あなた方がおやりになつてているような、ある意味で楽しい選挙運動というか、そういうものをだいじにする必要があると思いますね。

*パースペクティブの必要性

正村 最後にもうちょっと真面目な……いままでも真面目な話だつたけど（笑）、もう少し真面目な話にして締めくくりたいんですが、最初に問題を出しましたように、むつかしくいえば成熟した産業社会の直面している基本的な問題と正面から取り組んでいかなきやならない。それが市

民運動の提起したものである。個々の問題について抗議をしたり、要求を提出したりというのではなくて、それらの問題を一つの体系的な思考につなげていく。それもさつきから問題にしてい

るよう、古い昔の壮大な理論体系みたいなものに無理矢理くくっていくような、つまりイデオロギー化するようなものであつてはならないんだけど、しかし、やはりある種の系統的な取り組みみたいなものがいりますよね。たとえば洗剤の問題、あるいはリサイクルの問題、医療の問題、住宅の問題、都市住民が直面している問題といふうに、菅君の言う問題は複数であつて、かなり多い。しかもそれは一つ一つ非常にむつかしい。しかし、それを一つ一つ取り組むというところで問題にしていくばかりではなくて、それらを一つ一つ解決するためのペースペクティブというか、長期的な見通し、あるいは問題を解決していく場合の原則といいますか、方法というか、そういうものをはつきりさせていかなければならぬという気がするんですがね。

それも僕は、まあ、言うまでもないことですが、いままであなた方が問題にしてこられたように、誰かが請け負つて作文をつくつて政策にするというようなものではなくて、討論の素材みたいなものは専門家の知恵を借りながらつくつていかなければならないにしても、まさに楽しみながら選挙をやつたと言われるのと同じように、いわば楽しみながら議論してつくつていくということ。つまり、国會議員菅直人として政策活動の面でも開かれた新しい方法を工夫してつくつてもらえたならばというのが、僕の希望ですけどね。

菅 その点はなかなかむずかしいですね。ただ一つの理論に基づいてすべての政策を方向づけ

ることはもちろん不可能だと思います。そうではなくて、何をやるべきかの決め方をどうするか、つまり民主主義のルールの問題にも戻つてくるんですが、決め方のある種のルール化が必要じやないかと。たとえば医療問題や消費者問題の中で医師会が悪いからこうなるんだとか、農協が悪いからこうなるんだということ、よくいう場合があるんですけど、私はほんとはそろは思つてないんですね。医師会とか農協に比べて、都市住民の政治的ニーズをうまくパワー化する運動が、または組織がうまく機能しないから、相対的にいまの議会制民主主義の中でバランスが悪くなっている。そのバランスが悪いことを政治家なりいろんな人が言うことは、もちろん非常に必要なんだけども、それと同時に、こういうものを相対的にパワー化していく、それは選挙区制度の改革かもしれないし、またいろんな運動の新しい拡がりかもしれないんですけども、そういうこともものすごく必要だと思うんですね。

私もいろんな個別テーマ的市民運動に参加してきた、それを整合性のある政策に変えていくときの優先度のつけ方は、それも画一的な論理じやないんですけど、シビル・ミニマム、分権といった基準に立つてある種のルール化していくやり方というのがあるんじやないか。それをいまの議会制民主主義とうまくマッチさせながらルール化していくたときに、特に内政の問題についてはかなり変わってくるんじやないかと思うんですね。外交の問題についてはたしかにもう一つ別の視点が必要だと思いますけれども、内政については、私は市民運動的感覚とそういうものとの間に本質的な矛盾はないと思うんですね。あとはやり方の問題なり工夫であつてね。

けど、僕は菅君の一つの特徴は、市民運動をいろんな形でやつていながら、意外にバランスのとれた人だなという感じを持ったんですね。で、バランスがとれてるというのはしばしば悪い意味に使われることがあるんですね。いろんなバランスを考えて真ん中へんのところに行くという、バランスもあるわね。だけど、菅君はどうもそういうもので、僕は前から言つてゐるんだけど、要求というものと政策というものはちょっと次元というか、レベルが違うものでね。要求をたくさん並べれば政策になるというものではないわけですね。都市住民の要求も、みんなが感じることをたくさん並べたからといって、政策にはならないわけね。こっちをやればあっちが実現できなくなるとか、そういう矛盾することもあるし、制約条件を考えればとうてい不可能なこともある。そういう問題を考えなきやいけないなということを理解してゐる人だなという感じがあつたわけ。だからこそ、あなた方のグループ全体として旧来の市民運動的な枠の中でなにかやつていいこうということにとどまらないで、国政への参加ということを積極的に問題にしたということにもなるんだろうと思うんですけれどもね。

その場合に、非常に重要なのは、あなたが言われるようく、都市住民のバラまかれてしまつてゐる生活者の感覚からくる要求を一つの力にしていくということ。それは、僕も賛成なんで、職場で組織された組合を通じて要求を突き上げたり、ある程度要求が吸い上げられたりするということはある。しかし、地域に帰つて生活している普通の都市住民としての感覚からは問

題が提起されにくいという現実がある。そういう状況があるから、菅君の運動も今までのところ一定の成果を上げたと思うんですけどね。

ただ、それは僕の言うような要求ではなくて政策が必要なんだということにつながると思うんですね。つまり、医師会の要求に都市住民の要求をぶつければそれで解決するというものではありませんよ。やはり医師会の要求に都市住民の要求をぶつけなければそれで解決するといふのではなくて、非常に総合的な政策が必要になつてくるわけね。そやはりないんでしようね。そういうだけでなく、非常にだいじな点だと思うんですね。要求抜きに政策だけ掲げるのは、これはもちろん空虚で、非常にだいじな点だと思うんですね。要求抜きに政策だけ掲げるのは、これはもちろん空虚だし、非常にテクノクラート的になつてしまふ。後追い的になりますよね。要求が出てきたら、それをその都度その都度糊塗するために、政策を動かしていくだけの話になつて、対策だけが出てきて、ほんとうの政策がないということになると思うけどね。そういうやり方でなくて、要求をほんとうに重視しながら、しかし要求にとどまらないでそれを政策化するといふのは、やはりこれも菅直人を中心とする一つの集団的な共同作業として、新しいやり方でつくり上げていつてもらう必要があるんじゃないかなという気がしますね。

菅 いま正村さん言われたことで、私が最初にやつた土地問題というのは、いまでもいちばんむずかしい問題だと思うんですが、そのあたりがすぐ出てくるんですね。たとえば住宅をもつと供給するために、ある程度宅地並み課税が必要だという政策を考える。しかし、そのときに、大都市の緑地保全の問題とか、それからいまたいへん問題になつてきてる都市農業ですね、いまのようにものすごく長い流通経路じやなくて、もつと短い流通経路でやれるんじやないかとか、

特に有機農業とからんだ形で、そういうことの問題がまたこちらへ出てくると。同じ仲間の間でも、環境保全派から宅地並み課税はやっぱりまずいという議論がかなり強く出てくる。住宅供給派からはやはりこれは必要だというのが出てくるわけですね。それが現実に、たとえば七区の中にいくと、反対だと看板が立つてゐるわけですね。そういう中で政治的な妥協という面も実際の活動では出てくるんですが、政策的にも、住宅供給を進めながらしかし同時に緑地保全をやら、都市農業とのバランスをどうするかというの、すぐにもう一つ上のレベル——こういう言葉はあまり好きじゃないんですけど、どうしても上のレベルが必要になる。そういうことは、最初に取り組んだテーマでも、偶然かどうかわかりませんが、非常に感じましたね。まあ、いちばんむずかしい問題に最初に取り組んだような感じで……。

正村 いわば”盲蛇に怖じず”で取り上げたようなところがあると思うんだけどね（笑）。

菅 たいへんなテーマですね。

正村 でも、それは最大の問題ではあるわけで、今後も一つの大きな問題だけど、住宅問題といふのは専門家の間でも非常に意見が分かれてましてね。特に東京、大阪を中心とする大都市の抱えてる問題であつて、簡単には解けないと思うんだけど、しかし、簡単に解けないなら解けないなりに、どういうルールをつくっていくのかということで、整理をつけていかなきやいけないんでしようね。そういう政策の総合化というようなことを考えていく必要があると思います。

（80年7月4日・読売新聞社で収録）

私の市民政治宣言

第四章●提言

I 政治を市民の手に——否定論理からは何も生まれない

私は大学を卒業してから、仕事のかたわら土地、住宅問題、食品公害、有害洗剤追放、医療問題、リサイクルなどの市民運動を、仲間とともに進めてきた。

そのなかで、ロツキード事件が発覚し、金権体質化し腐敗した自民党と、それに対し何ら有効な手を打てずに硬直、形骸化した野党の存在を、いやというほど見せつけられた。そこにあつたものは、市民常識のかけらも存在しない、特殊社会であつた。

これを見る限り「政治は唾棄すべきもの」「政治家は軽蔑すべきもの」とする市民感情が生まられてくるのは当然である。しかし形骸化した民主主義社会とはいえ、唾棄すべき政治を許してきいた責任の一端は私たち市民一人一人にある。政治を利権にまみれた、あるいは、特殊社会の利益代表を自認する既成プロ政治家集団にまかせており、政治は限りなく堕落してゆく。市民が政治に参加してゆくことだけが、唯一政治に市民常識を取り戻す道ではないだろうか。

1 既成の保・革の枠組の風化

戦後三〇年、保守対革新という形で政治の問題が語られてきた。しかし、ロッキード事件とそれに対する国民の反応の中に、保守対革新という枠組み自体の風化を感じたのは私だけではないであろう。

確かに戦後のある時期までは、「復興・成長」を掲げる保守に対し、革新は「平和・民主主義」「憲法擁護」を掲げ、それなりの成果をあげてきた。また、この時期にはまだ、大衆運動としての政治への市民の自発的参加の場があつた。

だが、左右社会党の統一、保守合同を経て高度成長時代に入るなかで、保守も革新も次第に変質を始めた。保守は大企業からの献金＝構造汚職に全面的に依存する金権体質を強め、革新の側も大企業・官公庁労組に依存する労組政党として硬直化を始める。

こうして政党が選挙での投票行為でしか市民と接点を持たなくなるにつれ、市民の政党不信、政治不信は深まり、政党は健全な活力と市民感覚を失つていったと思う。市民感覚を持たない政党と、政党を信頼しない市民との離反である。

そのなかで、高度成長を背景に自民党は長期単独政権を維持し、政・財・官のモザイク的絶対権力をつくり上げていった。野党は有効な対抗策を提起できぬまま「アンチ自民党」をとなえ

るだけの批判政党に安住してきた。

ロッキード事件は、こうした金権腐敗の自民党とそれを有効にチェックできない野党の存在と

いう現在の日本の政治体質を象徴するできごとだったといえる。
そのなかで進行した高度成長が環境破壊、有害食品や欠陥商品の氾濫、地価の異常上昇と住宅難、医療制度の矛盾の深刻化など多くの都市問題を生んだ。賃上げ＝労使対決というパターンでは解決し得ないこれらの問題に対し、自民党はもちろん労組依存型野党も市民の意見を行政に對して積極的にフィードバックさせる機能を果たせないでいる。ここに市民運動、住民運動が発生する最大の素地があつた。

こうした市民運動のなかから、自治体政治の分野では、市民委員会、市民と首長との政策協定など、さまざま形での市民参加が試みられ、実現している。が、国政レベルではいまだに「政党政治」という枠に妨げられて、市民は国政から疎外されている。「腐敗した自民党」と「硬直化した野党」という現在の政治体質を変えるためには何が必要だろうか。当然、政党がみずからの変革のためのプログラムを用意しなくてはならない。だが、それ以前に、というよりも、それ以上に、私たち市民が「参加」する努力、国政選挙への市民参加を通して市民感覚を備えた政治勢力をつくり上げることが必要である。今までにも、政党側から政治浄化・体質改善の声が何度も聞かれたが、一度たりとも、具体化した試しはなかつたのである。

選挙は、武力的権力闘争を平和的、民主的権力闘争とするための制度であり、本来権力闘争の

場である。市民が自らの意思を国政に反映させようと思ったら、この権力闘争を市民の手で戦いぬくほかない。

選挙において市民が投票するだけの役割しか果たさず、候補者の推薦、選挙費用の分担などの選挙運動を既成の政党、団体にまかせている限り、建前は“市民派”、実体は選挙母体の“利益代表”という政治家の体質を変えることはできない。市民が参加して候補者を推薦し、選挙費用を分担する市民選挙を各地で実現させることができ、政治体質を変える上で何よりも必要なのである。

このような市民選挙は、今までにも全くなかったわけではない。市川房枝さんにより長年主張され実践されてきた「理想選挙」は、その先駆的役割を果たしてきた。特に昭和四十九年の参議院選での市川房枝さん、戸村一作さん、野坂昭如さんの選挙は、それぞれ多少性格を異なるが、市民の自発的参加に基づく選挙であった。また地方選でも各地で市民運動グループが候補者を推薦する市民選挙が見られた。

こうした市民選挙は保守的政治勢力からだけでなく、既存の革新政治勢力からも有形無形の圧迫を受ける。初期の市民運動も周囲から圧迫を受け、それを打ち破り実績をあげることにより、今日のような大きな拡がりを持つにいたった。市民選挙もさまざまな圧迫や既成政党に有利な選挙法上のハンドディキヤップをはね返して当選者を出すことではじめて、拡大し、定着してゆくであろう。

これまで市民運動をつづけ、また何度も選挙にかかわってきた私たちのグループは、こうして考えに基づき、昭和五十一年の衆議院選に東京七区から候補者を立てて戦うことになった。その時の候補者が私であった。

2 「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」

私の推薦母体は、六年前の参議院選で市川房枝さんのかつぎ出しに参加した人と、その後の活動を通して加わった人からなる市民運動グループである。もともと市川さんのかつぎ出しの運動は四つの市民運動グループ——土地・住宅問題をテーマとする「より良い住まいを求める市民の会」、食品公害をテーマとする「恐怖の化学物質を追放するグループ」、青空市をやっていた「消費を考える葛飾の会」、慶應大学で活動していた「政治資金問題研究会」——のメンバーが、市川さんの主宰する「理想選挙推進市民の会」で出会ったことがきっかけとなつて始まった。

グループ全体に共通なものとして『シビル・ミニマム』という月一回発行の機関紙と渋谷に三坪の事務所を持ち、それらの活動資金は大学祭へグループ全体の名前で参加することによってかせいだ。各テーマごとの運動には名前があるが、グループ全体の名前はなく、選挙については全体で討議し、参加、不参加は各自の判断にまかされていた。このように、このグループは組織というよりネットワークといった感じのものである。

そして選挙準備のために名前が必要になつてからその名称を「あきらめないで参加民主主義をめざす市民の会」と名づけた。

3名もなく金も組織もなく

当時、私たちの選挙は無謀だと言われた。看板、地盤、鞄の三つともない『三無選挙』では、選挙にならないと思われていた。

確かに私たちのグループ自体の力は既成政党や労組に比べて圧倒的に弱かった。また表面に現れている市民政治勢力はまだ小さかった。しかし、その背後には六〇年代以降の市民運動を通して直接間接にトレーニングされた幅広い市民層の存在がある。こうした幅広い市民が動き出す時に、はじめてロッキード事件を生んだ現在の政治体質を変えうる政治的転換が可能となるであろう。

このような信念を持つてカンパとボランティアによる選挙戦をたたかた。その結果、マスコミ、世評に抗して、七万一、三六八票の支持を集め、次点になった。

当選は果たせなかつたが、私たちの提起した市民選挙が、そして参加民主主義による政治変革の可能性が、確実に拡がりつあることが実感できた。その後、選挙記録をまとめて本にした『無から有への挑戦』(読売新聞社刊)のあとがきで、私は次のように書いた。

「日本には政治に関して二つの神話がある。一つは、政治はけがらわしいものだとする神話であり、もう一つは、政治体制は変わらないという神話である。私たちは、この二つの神話に挑戦したい。」

第一の神話を信じている人は、私たちが市民運動を開拓してきて、その後、政治にチャレンジしたことに対する、本来の市民運動から逸脱した行動であると批判する。しかし、政治をけがらわしいものにしてきたのは誰か。われわれ市民の側にも責任があるのでないか。政治を大切にする層が薄いことが、ロッキード事件を生んだのだ。ロッキード事件以来、いつまでも政治をけがらわしいままにしておいてよいかという反省のムードがある。今回の参院選でも、革新自由連合や日本女性党にいたるまで、政治への直接参加が行なわれている。市民選挙というモデルを作れば、運動がひとりでに拡がることが実証された。確かに政治は権力志向である。だから私たちは、その中でもまれ、うす汚れるかも知れない。しかし、政治を大切にする政治風土への可能性を求めて、私たちは挑戦をつづけていきたい。

第二の神話を信じる人は、政治体制といふものは変わらないものだと思い込み、無関心になり、シラケきついている。確かに一九五五年の保守合同以降、政治は不可変なものであった。しかし、自民党の長期単独政権の崩壊が確実となる中で、連合政権の時代が近づきつつある。このような時代こそ、市民の手の届くところに政治が来ていると言えるのではないか。それはま

た、市民の政策要求が通りやすい状況でもある。たとえば「分権」という政策はどの政党でも言っている。しかし、本気でその実現を目指している政治家は一人もいない。分権化は、土地改革を行なったGHQにすら出来なかつた政策である。その実現の可能性が近づきつつあるということは、きわめて革命的なことだ。今なら市民の政策を実現しうるだろう。

私たちはこの二つの神話を破りたい。あの政党もダメだ、この政党もダメだでは、すべての可能性が失なわれてしまう。現在の政治風土の中で、その神話に挑戦すれば、はげしい批判が予想される。しかし、私たちは、市民主導の政治のきっかけを作つていきたい。市民としての責任を果たせば、手をつなぐ人も増えるはずだ。

私たちは、市民運動を開拓する中で、三年前、参院選に市川房枝さんをかつぎ出した。素人ばかりで選挙などやれるものかと笑われた。しかし、実際に戦つてみると、他の選対以上のことはできた。保革伯仲実現の一翼を担うことができた。そして先の衆院選では、有名だからこそ出来たといわれた市川選挙と同じ理想選挙方式で「金も、名も、組織もない」選挙戦をたたかいぬき、多くの市民層の支持で七万余票を獲得することが出来た。そこに集まつた連中のうちに、選挙プロはない。サラリーマン・技師・学生・主婦と性格はさまざまだが、いずれも仕事を持つたままのボランティアによる選挙だつた。

私たちのグループは、二十歳から三十歳代までの数十人の活動家と、機関誌『シビル・ミニマム』を通じての全国の市民運動グループとのネットワークからなる小さな組織だ。ここでは、

どんなことでも徹底的に議論する。自主性と多様性を許しあう組織が、大きなエネルギーを生みだしていく。しかし、それだけに組織運営は大変だ。私たちは時間をかけてじっくり話しあう。決定機関も、はつきりしたものはない。それでも何とかここまで運用してきた。

この方法に対しても、内部でも批判というか、将来に対する多少の危惧がある。「組織が大きくなれば、きっと官僚化してしまうだろう」という不安である。たしかに、その危険性がまったく無いとは言わない。しかし、いまそれを批判していても始まらない。企業や組合の中での疎外状況は進んでいる。官僚的にならない組織作りの可能性を、あらゆる局面で共にやってみようではないかと呼びかけたい。既成の政党が音をたてて崩壊する中で、いまこそ正規軍としての市民が動き始めなければならない」

その後、私たちは運動をより前進させる意味をこめて、グループの名称から「あきらめないで」をとり、「参加民主主義をめざす市民の会」と変更した。

II 社民連への参加——市民政治勢力の実験

1 江田三郎氏との出会い

昭和五十二年四月、社会党を離れ社会市民連合を結成した故江田三郎氏から、私たちのグループに会見申し込みの連絡が入った。

江田氏の離党、社市連結成については、新聞報道などで興味をもって見ていて、既成政党内のものであり、私たちのグループとはまったく別な外側の世界のことだと思っていた。

それが急に、私たちの目の前に現れたのだ。江田氏の提唱した社会市民連合は、確かに市民の参加を謳っているが、それは私たちが主張してきた市民政治と同じものだろうか。当然、こうした疑問がわいた。

そこで、それまでにもいろいろ指導していただけていた篠原一・東大教授、青木茂・サラリーマン同盟代表に立会人をお願いし、社市連と私たちのグループの公開討論会を行なうことを企画

し、次のような申し入れ文書を送った。

公開討論会への出席のお願い

「今回の江田氏の社会党離党、社会市民連合の結成は、そのねらいが無党派市民の結集にあるとすれば、私たち、市民の政治参加の拡大をめざすグループとしても無関心であるわけにはいきません。

私たちのグループ「参加民主主義をめざす市民の会」は、昨年暮の総選挙で仲間の一人を東京七区から立候補させる運動の中から生まれたものです。もともと、このグループは、土地・住宅問題・食品公害・医療問題・教育問題などのテーマを持つ個人や市民運動グループが、いろいろな運動を契機に集まって形成されてきたグループです。

特に前回の参議院選で市川房枝さんに出馬を要請し、選挙戦の中で各地の市民・住民運動グループと出会うといった経験、また五十年の統一地方選では、武藏野市議選に仲間の一人を推薦し、一票差で敗れた経験などの中から、企業や労組という利益団体に依存した選挙ではなく、市民が候補者選び、資金集め、選挙運動に参加する“市民選挙”を可能といいかない限り、建前は“市民派”、本音は選挙母体たる企業や労組の“利益代表”といった政治家の体质を変えることはできないと考えるようになりました。

そして、昨年のロッキード事件を契機に、自民党に憤りつつも既存の革新政党にも期待を持

てない私たちは、市民が参加できる自発性と多様性を備えた“市民政治勢力”を作るための一歩として、東京七区より菅直人さんを推薦し立候補させたのです。

選挙は、自・社・公・共の政党の壁を破ることができず次点に終わりましたが、投票数の約一二%の七一、三六八人の支持を受けることができました。しかし、組織も金も無い私たちの運動がこうした広い支持を得られたのは、硬直化した既成政党への批判とともに、参加の可能性を拡大するための“分権化”、都市問題に対する政策立案といった主張が理解されたためだと思います。

こうした運動を通して、自民党はもちろん、既成の野党の体質について厳しく批判してきた私たちですが、昨年結成された新自由クラブ、そして今回旗上げの社会市民連合から聞こえてくる“参加”“無党派市民”“分権”といった主張が、それ自体としては私たちの主張とかなりの共通点を持つことに、率直に言つてややとまどっています。

もちろん、私たちはこうした“参加”“分権化”的方向がより多くの人々・政治勢力によって主張され支持されること自体は喜ぶべきことだと思っています。しかし、長年の間、政党によつて掲げられたスローガンや公約が選挙用であつて、実現のための十分な努力さえなされてこなかつたということを考えると、主張の内容が文章として共通部分が多いからといって、それだけでその政治グループを信用することができないということも理解いただけでしよう。

私たちは、既成政党を批判して生まれた“新自由クラブ”や“社会市民連合”がどういう主

張、方向性を持っているか、またどういう人々によつて構成され、支持されているのかということに注目し、これまでマスコミ等の報道などを通して注意深く見守つきました。しかし、こうした“間接的対話”だけでなく、こうした政治グループについて私たちの持つ疑問や意見を、直接に交換する機会を持つことができないかと考えるようになりました。

こうした対話の場は、従来の“政党主催の市民の対話”にみられた陳情でも、また単なる政党にもの申すといった性格のものではなく、私たち自身、市民の参加による政治勢力をめざし、それなりに運動を続けている主体として、相互に意見を交換し、学ぶべきは学び、互いに厳しく批判する場にしていきたいと考えます。

私たちが、江田氏そして社会市民連合の方々と意見を交換したいと考えている主な論点は、次のような点です。

まず第一に、新聞報道などによりますと、社会市民連合は、政治制度だけでなく、政治グループのあり方としても、中央集権的性格を排し、各種の市民運動グループや学者・文化人グループのゆるやかな連合体としての新しい組織原理をめざすとあります。私たちもこの考え方には全く同感です。そしてこれまでにもすでに、市民運動自体がこうした“自発性”と“多様性の容認”を組織原理として形成されてきています。

しかし、社会市民連合が、こうした組織原理を実際に身につける上で最大のポイントは、労働（組合）運動との関係をどうするかにあると思います。私たちがいろいろな市民運動に参加

してみて、労働組合の“利益団体”としての実体とその強力さを痛感することが、しばしばあります。労働組合運動は、組織的にも資金的にも、市民の個人参加によるどんなグループよりも強力なだけに、社会市民連合もいつの間にか社会・労働組合連合となるのではないかと懸念するのは、私たちだけではないと思います。

私たち自身にも、市民運動にみられる自発性が同時に、“一時性”でもあり、また多様性が同時に、“責任主体の不明確さ”でもあることは認識しており、市民の個人参加による“政治グループ”的あり方について決して十全な展望を持つているわけではありません。しかし、都市化の進展と市民層の拡大の中で存在し得る政治グループの型についても、一つの考え方（具体案）を持っていました。こうした私たちの持つ案についての意見も是非、お聞かせいただきたいと考えています。

第二に、社会市民連合は“労働者の政党”をめざすのか“生活者の政党”をめざすのかといつた点です。この立場の相違は、政策を考えるときに微妙なニュアンスの差として現れるだけでなく、時には明確な対立点となる相違です。

例えば、健康保険制度が官公庁や大企業の共済組合、組合健保と中小企業の政府管掌保険、農民その他個人業の国保に分断され、負担や医療内容に格差があるという問題はその典型的な例です。

これまで“労働者の政党”を自認してきた社会党は、官公庁・大企業の“労働組合の政党”

として、この保険制度の階層性を容認してきました。しかし、生活者の立場からすれば、こうした健康保険の階層性は絶対に認められないはずです。今日の都市問題の立ち遅れの大きな原因は、実は企業内福祉との関係で、住宅問題・医療問題の多くが労働組合政党にとつての切実な課題とならなかつたことにあると思うからです。

第三に、“社会主義”についての問題です。

社会市民連合は「新しい社会主義」の柱として、議会制民主主義の堅持、分権と自治の徹底、制御された市場の活用などの項目を挙げています。私たち自身、こうした項目については基本的に賛成であり、共通の認識といつていいでしょう。

しかし、私たちにとつてこうした方向を“社会主義”と呼ぶかどうかということはさほど気にならないことです。“社会主義”という言葉は、内容の多様化に伴つて、“社会主義者”の魂“社会主義者の態度”といったように、心情の論理に転化してきてるのでないでしょうか。そしてこの心情は、“世代的な差”が大きいように感じられます。

こうした意味からも、何を社会主義と呼ぶかといった論争を行うつもりはありませんが、個人の心情の論理としての“社会主義”という言葉への拘束が“本家争い”的政治論争となる人の不毛性だけは避ける必要があると考えます。

私たちは、既成政党に対する不信感から、食わず嫌い的に新自由クラブや江田氏と社会市民連合の行動を批判するのではなく、その主張・行動を含めて積極的にとらえ、見極めた上で、

協力し、しかし批判すべきは厳しく批判していくという態度をとりたいと考えています。

そしてまた、私たちだけでなく、多くの市民運動グループや無党派市民にとつても、新しく生まれた新自由クラブや社会市民連合が、市民の参加にどのように応じようとしているのか、どういった立場に立つのかといった点に大きな関心を持っています。

こうしたことを見明らかにしていくための対話の場として、是非、公開の席での討論会への出席をお願いする次第です。

昭和五十二年四月十四日

参加民主主義をめざす市民の会

代表 田 上 等

社会市民連合

江 田 三 郎 様

」

私たちの申し入れに対し、江田三郎氏からは、次のような回答が寄せられ、四月二十二日、保谷市立東伏見小学校体育館で、公開討論会がもたれた。

公開討論会について

「市民の政治参加を実現するため、日夜御努力をいただいている貴団体にたいして心からの敬

意を表明します。今回、貴団体から「公開討論会」への出席を要請されました。このような集会を企画していただきことにお礼を申し上げるとともに、私ほか二名の代表が参加したいと考えております。

社会市民連合はいまスタートしたばかりで、正式な準備会の発足も五月末を予定しております。したがってどの程度、貴団体の問題提起にたいしてこたえ得るか十分な自信はありません。しかし、貴団体が私どものめざしている参加と分権——連合の基本方向にたいして深い理解をしめされていることについて、心強いものをおぼえます。

くわしくは、四月二十四日の討論会のおりにふれるとしますが、私どもが社会市民連合の組織、政策の理念として考へてることを二、三申し上げておきたいと思います。

その第一は、今後の政策形成過程、組織づくりの過程における市民の直接参加を保障することです。

したがって私どもは準備会の発足までに、さまざまな階層の方や、さまざまな市民運動の方の参加をねがって、第一次素案をつくりあげたいと思います。要するに、はじめから固定した組織、固定した考え方を持たないということです。社会市民連合の中に、無党派市民の方々が自由に発言し、自由に提言できる「市民委員会」をつくります。「市民サロン」をその一つの場として活用していただきたいと思います。

第二には、すでに報道機関などでもふれておりますが、私どもの組織は、中央、地方がそれ

それに独立したものであり、タテの関係でなくヨコの関係、文字通りの連合体です。

既成政党の中央集権型、民主集中型は抑圧の構造であり、仲間以外は排除するという閉鎖的な政党からの脱皮をめざしたいのです。連合は異なるものが一致点を見出すものであり、個の存在と、個の意見、その自発性、自立性を最大限に尊重するものでなければならないと考えるからです。

第三に、私ども社会市民連合は、新しい時代への困難な課題にたいして挑戦したいと思います。

できもしない政策を羅列して、国民の関心を買おうというスタイルを捨てなければなりません。さきにあげた市民の政治参加や、連合の組織論も、戦後三十年間の社会党と総評ブロックのあり方を根本的に転換することを意味しております。同時に社会市民連合自体も古い社会党の殻をもつております。どれをとりあげても新しい実験であり、困難なテーマであり、大きな矛盾を内包しています。

私は、「新しいレールを敷くための、捨石になりたい」と離党宣言のなかでのべました。それは、このような課題に挑戦することが政治家としての最後の責任であると考えるからです。

私自身も戦後三十年間、社会党の一員として日本の政治にかかわってきました。既成政党の批判にたいしても、私自身の責任もふくめて重い意味をもつてうけとめています。貴団体から討論の柱として提案されている、

①労働組合運動との関係

②生活者の党か、労働者の党か

③社会主義についての考え方

などは社会市民連合にとっての重要なテーマであり、私どもの考え方を率直にのべたいと思ひます。

日本の政治のあり方に対し、単なる批判や逃げ腰でなく、新しい可能性を追求しておられる貴団体が、私どもにたいして寄せられた「討論会」の試みは、日本の政治状況をきりひらく「連合」のための一石でもあります。率直な意見、歯に衣を着せぬ批判、建設的な提言を相互に交流したいと考えます。

一九七七年四月十九日

社会市民連合

江田三郎

参加民主主義をめざす市民の会

代表 田上 等 殿

討論会終了後、江田三郎氏は私たちのグループの事務所（といつても資金づくりのためにやっていたアパートの学習塾の一室）を訪れ、私に対して社市連の代表に就任するよう要請された。

突然の“参加要請”である。私は、グループの仲間、そして、それまでにいろいろ協力し合って活動してきた人々と連絡をとり、討論を繰り返したが、なかなか結論は出なかつた。当然、市民運動は政党に参加すべきでない、という意見もあつた。市民運動と政治についての私の考え方は後で述べるが、私と主要な仲間は参加を選択した。

当時の私の決意を述べた記録があるので引用してみよう。

△参加を決意した理由

「私が社会市民連合への参加を決意した最大の理由は、”破壊”しながら”建設”することの可能性をこのグループに見出したからである。

まず”破壊”についてみれば、私たちがこれまでもめざしてきた市民勢力が、社会党に代わり本格的な”生活者の政党”として成長してゆくためには、どうしても社会党の解体が必要である。江田氏はこうした破壊を促進する上で私たち無党派グループでは持ち得ない巨大な”位置エネルギー”を持っているのである。現在進行している社会党地方議員、活動家の離党、党内での対立激化からも、江田氏の行動が”社会党解体”において決定的な意味を持つていてることは明らかであろう。

それでは”建設”的可能性についてはどうか。

率直に言つて、江田氏を始め社会市民連合に集まつてゐる多くの人に、”市民連合”として

の明確な建設イメージがあるとは思われない。放置すれば労組依存体質が再生し”第二社会党”となることも、また社共からの批判により民社党のごとく”反共”を自己目的化する”第二民社党”に変質する可能性も持つてゐる。

しかし同時に、”市民連合”という名称にも現われてゐるように、単なる小型社会党にしてはならず、幅広い市民層の支持を受け得る政策、組織体質を持たなくてはならないとの問題意識を、江田氏をはじめとするすべてのメンバーが、強く持つてゐることもまた確かである。

こうした現在の混沌とした状態をみると、”建設”的方向性については、そこに参加する人の考え方、政治体質、力量などによってこれからどのようにも変わり得るというのが、私の判断である。

私が東京で会つた社会市民連合のメンバーは、江田氏を中心とした旧江田派グループ、学者、理論家ブレーン、自治体の議員、労働組合関係者、そして環境問題、生協活動、区長公選運動などをテーマに十年以上にわたつて市民運動を続けてゐる何人かの人たちである。

私はこのようないろいろ異なる経験を持つ人たちと話し合うなかで、こうした人と協力することにより、社会市民連合を組織体質の面でも政策面でも、市民参加型の政治グループとして形成してゆける展望を持つことができた。例えば政策立案についても次のような過程をとることにより、市民の参加を拡大することができると考へる。

まず、消費者、医療、不公平税制、環境、住宅、余暇問題など、個々のテーマに取り組んでいる市民運動など各種の団体に、政策提案という形での協力を要請する。そしてそこからもたらされた現場的実感のこもった個々の政策を、学者や理論スタッフにより社会市民連合としての基本理念、例えば分権・参加・公正・市民的自由といった理念とつき合わせ、またテクノクラート的スタッフにより、経済、財政、外交といった面から政策の整合性を持ち得ない政策については、その政策を提案した市民運動グループにその理由を提示し、積極的に議論を行う。

こうした過程のくり返しのなかから政策を立案してゆくことにより、単なる学者の作文でも、また要求の羅列でもなく、生活者の実感を重視し、かつ実現可能な政策体系を創造していくことができる」と考へる」

△予想される危惧、批判△

「社会市民連合へ参加するという私の行動に対し、無党派としての純粹性を喪失するという意味での危惧や批判が予想される。

確かに、私たちはこれまで自民党や社会党の体質や、都市問題に対する無策ぶりを強く批判し、既存の政党とは独立して活動してきたことにより、『無党派』の市民グループと見られてきた。しかし批判の対象であつた自民党、社会党が崩壊しつつある今日、批判してきた私たちに

も、これら既成政党に代わり得る政治グループを形成してゆく責任があるのでなかろうか。

この意味で、『革新自由連合』のように無党派だけの集まりとして、自分たちの主張を実現し、うる新しい政治グループをめざすのも一つの道であると思う。しかしそれと同時に、既成政党を批判して、そこから分離した新自由クラブや社会市民連合などについても、その母体が既成政党の分裂により生まれたことだけを理由に、そのグループへの参加について全面否定することができないことも明らかであろう。こうした新しい政治グループが自分たちに近い主張と体质を持っていれば、そこに積極的に参加してゆくこともまた一つの選択である。

『批判勢力』の結集ではなく、市民参加型の『責任勢力』をめざす上で、いくつかの選択肢のなかで、私は社会市民連合に参加することが最も大きな可能性を持つと考え、そこへの参加を決意したものである」

他方、江田三郎氏もまた、次のような手記を残された。

開かれた市民参加の道——社会市民連合の実験

「公開討論会の当日、私は身体の調子がよくなかった。しかし、議論の進むなかで、身体の奥からエネルギーがわき出てくるのを感じた。私たちがはじめた社会市民連合の新たな実験が広がりうる具体性をそこに見たからである。

菅君は三十歳だという。私の下の息子よりも若い。たしかにゼネレーションのちがいはある。討論のなかでも、たとえば社会主義についての評価などで、この違いを感じた。だが、若者の特性は社会と時代の流れに身をゆだねるのではなく、自らの熱情によって変革の意志を具体的な行動でぶつけていくことであるだろう。私の青春時代にはそれが社会主義であつたし、そのまま現在にいたつてている。

菅君たちにとつては、社会主義というイデオロギーよりも、アクティブな市民派として直接的な行動にたちあがることの方が、より社会変革の意図を具体化することに直結しているのであろう。社会主義を心情としてとらえても意味はない、と批判され、「クールだな」と感じつつも、イデオロギーを教条的にとらえ自己満足している青年たちとは違うなという印象をうけた。社会主義に魅力がなくなっている現在、イデオロギーでそれをおしつけるよりも、現実の社会変革の方向と行動を具体化することによって再生することの必要性を、新鮮な印象とともに痛感したししたいである。

さて、社会市民連合はだんだんと形造られつつあるが、最大の課題は「市民」の積極的参加があるか、どうかにかかっているといつてよい。このことが成功裡に展開されないかぎり、この実験は意味のないものとなるであろう。小型社会党として何人かの議員を持ったとしても、まったくそれは意味はない。社会主義協会とわかれた政党をつくっても、古い社会党体質そのままひきつぐとすれば、五五年体制の崩壊から新たな連合時代の政治を創造することはでき

ない。こうした危惧をのりこえる道は、市民の積極的参加をえる以外にはない。

「市民」という概念は、日本の政治風土においては定着していない。社会党のなかでよく言われたのは、革命をおこなうのは労働者階級なのであって、市民ではない、ということであつた。たしかに、現代社会において労働者は大きな位置をしめている。だが、労働者という概念で現代の革新指向の人々をすべてくることができるであろうか。私はそうは思わない。

というのは、労働者自身も第三次産業労働者が五〇%をこえ、第二次産業労働者もブルーカラーからグレーカラーへとかわってきている。労働の質の変化は、労働者の意識的変化と結びついている。また、公害反対闘争やさまざまの市民闘争のラジカルな提起は、これまでの労働組合運動の質を問い合わせてきてている。こうしたことから、総評も「国民春闘」を提起し、生活動争をおこなわざるをえない状況になつてきているのである。

アクティブな市民の登場が求められているのは、このような状況変化によつてだけではなない。それは、日本における市民社会の成立がきわめて遅れているからに他ならない。社会主義のモデルがソ連型であつてはならないということについては、大方の共通認識となつてきてゐるといつてよい。だとするならば、日本における市民社会の成立が、社会主義へむけた過渡期社会との関連できわめてクローズアップされざるをえない。

民主主義についても単なるスローガンではなく、参加民主主義とか直接民主主義という提起があり、具体的な運動展開がされていることは、市民社会の形成へむけての動きに他ならぬ

い。民主主義が、社会主義者による単なる戦術的スローガンから市民社会と結びつき、社会主義社会への戦略的な位置が与えられるときにはじめて、圧倒的多数者が参加する社会建設が可能となるのである。

こうして、いまや市民の役割は、既成の教条的な左翼や利益団体のエゴを打破するとともに、新たな社会を建設する主要な勢力なのである。私はこうした観点から社会市民連合が市民派の大々的な登場の舞台になることにかけたのである。

公開討論会が終わって、菅君をはじめとした「参加民主主義をめざす市民の会」の若い諸君と親しく懇談した。そこで、私は菅君に社会市民連合の代表になつていただけるように依頼した。その後、正式に受諾する旨の回答をいただいた。私は心からありがたいと思う。

公開討論会で篠原先生から、社会市民連合がこの討論会を重大なイベントにすることができるかに今後がかかるつているという指摘をうけた。この指摘に、菅君の代表受諾でこたえることができたようだ。ようやく社会市民連合は態勢がとれ、本格的なスタートをきれるることになつた』

2 江田三郎氏の急死と社民連

このようにして、市民連としての第一歩を踏み出した矢先、提唱者の江田三郎氏が急逝され

た。思い起こせば、公開討論会の席上で江田氏は身体がだるいと言っていた。あれは、こうした事態の予兆だったかもしれない。

江田氏の突然の死は、当然、歩き始めたばかりの社市連に大きな動搖を与えた。しかしながら、参議院選挙が目前に迫っていた。

小さいながらも政治勢力として名乗りをあげた以上、選挙を戦わないわけにはいかない。

故江田三郎氏のあとに子息の五月氏を全国区候補に立て、そして私も、準備がととのわなないままに東京地方区の候補者として、あわただしく選挙戦に突入した。

結果は、江田五月氏は全国二位で当選、私は十九万九千票で落選した。

江田氏の急逝直後、大柴滋夫衆議院議員が社会党を離党して社市連に参加していた。とりあえず江田三郎氏亡きあとの社市連は、大柴氏、江田五月氏、そして私という三人代表制をとることになった。

ところで、現在の社会民主連合代表、田英夫氏はこの年（昭和五十二年）の秋、檜崎弥之助、秦豊、阿部昭吾の三氏とともに社会党を離党、新しい政党「社会クラブ」を結成していた。

翌年三月、社会クラブと社会市民連合が合流して社会民主連合が結成された。私は副代表・市民委員長となり、現在に至っている。

五十四年九月、大平首相が誕生して解散・総選挙が行なわれた。私は再び東京七区から立候補

することになった。この時の選挙は、前回の衆院選とは異なり、私は無所属革新ではなく社民連である。もともと政党を名のつてはいても、私には相変わらず、金もなければ組織もなかつた。ある選挙通の友人は、私の選挙を見て、七・五・三の法則だと言つた。つまり、前回衆院選の得票数七万余票は、五十二年の参院選の七区内得票数で五万になり、その次は三万になり、そして消えてゆく、というのである。

私たちは再び、市民選挙で挑んだ。菅直人株の発行、選挙事務所に市民画廊や託児所を開設するなど、できるだけ多くの人々に参加してもらうスタイルを考えた。

選挙結果は、六万七千余票であった。私は正直なところ、「これで生き残れた」と思つた。グループの仲間も、同じ気持のようであった。

そして、それからわずか半年後の五十五年六月、大平内閣の不信任案可決により突然の総選挙がやつてきた。今回の選挙も、これまで述べてきた市民選挙の原則で戦つた。

ただ、今回は、地域に住んでいる人々に、住いの近くのポスター掲示をたのみ、選挙ハガキを書いてもらうなど、前回よりはさらに参加の輪が地域的に拡がつた。私は今回の選挙を「地域参加型市民選挙」と呼びたい。

六月二十三日、十五万七、九二一票の支持を得て、第一位で当選することができた。

III 政治と市民参加

1 市民に開かれてない既成政治

政党の市民感覚からの遊離

無党派層の拡大に象徴される、政党に対する信頼低下の原因はどこにあるのだろうか。

その一つは、従来の政党が上意下達という発想しか持ち得ず、多様な市民層の自発的参加を受け入れる組織体質を持っていなかつたこと、そしてもう一つは、都市化の動きに適確に対応する政策体系を打ち出せないでいることである。

すなわち、戦後の十数年間は、"復興・成長"をかける保守政党に対し、革新政党は"平和・民主主義・憲法擁護"をかけ、それなりの成果を挙げてきた。また、この時期には、革新政党は戦前からの大衆運動家を数多く擁し、六〇年安保に見られるように、大衆運動として市民の自発参加の場を持つていた。

それが左右社会党の統一、保守合同をへて高度成長時代に入つてから保守政党も革新政党も次第に体質を変え始めた。つまり、保守政党は長期単独政権の中で、官僚主導による産業育成政策推進を前提に大企業からの献金＝構造汚職に全面的に依存し、利権獲得と地元利益還元に専念するブローカー的金権体質を強めた。また革新政党の側も、官公庁、大企業の労組に資金も人も依存する労組政党という色あいをつよめ、それが硬直化につながつていった。

こうして、政党が選挙での投票という点でしか市民と接点を持たず、市民を参加主体としてでなく獲得すべき票としてしか見なくなるにつれて、市民の政党不信、政治不信が深まり、政党は健全な活力と市民感覚を失つていった。

他方、政策面においても、保守党政権は、道路、港湾といった産業基盤の整備に力を注ぐ反面、工業化に伴つて当然予想された住宅などの生活関連社会資本の整備に関しては、ほとんど無策のまま放置してきた。これに対し、大企業、労組などを背景とする革新政党は、賃上げ・合理化反対といった生産点での問題には取り組んできたものの、公害、住宅難などの都市問題に対する取り組みは決定的に遅れている。このような革新政党の都市問題に対する消極性は、大企業労働者が社宅や健康保険など企業福祉の面で比較的めぐまれていること、公害発生に直接関与していることなどに大きく影響されている。

参加を要求する市民層の増大

六〇年代にはじまる高度成長は、環境破壊などの都市問題を発生させる一方では、生活水準の上昇と平準化を促し、多くの人々が余暇と教養を持つことを可能にした。この過程で、職業や職場での利害関係から独立した自由な意志を持つ市民層が拡大してきた。

こうした市民層は、産業公害、有害食品の氾濫、住宅難などの都市問題に対して、自らの主張をかかげて多様な市民運動を展開しはじめる。

また、テーマごとの市民運動に加えて、自治体レベルの政治の分野では、市民委員会、市民と首長の政策協定など、さまざまな形での市民参加が試みられ、実現しつつある。

このように市民の参加要求は急速に高まりつつあり、ある調査によれば、七〇%の人々が、身の回りで問題が生じた場合、市民運動へ参加するという意向を示している。
しかし、こうした市民の参加エネルギーは、国政分野においては、旧体質の政党政治に妨げられて十分機能していない。その最大の理由は政府への批判を結集すべき野党、革新政党が労組、宗教団体といった組織の上に構成されているか、またはイデオロギー過剰のために、多様な考え方を持つ市民の個人的参加を不可能にしているからである。
参加の余地のない政党に対して市民の不信が高まるのは当然であり、意識的無党派層の増大の原因はここにある。

2 市民運動の中での“社会主義”

私は、今まで私自身が加わってきた運動のみならず、多くの市民運動、住宅運動の集会に同席する機会をもつてきた。しかし、そうした集会で“社会主義”というものが議論のテーマになつたことは一度もなかつた。

それにまた、こうした運動の機関紙の中にはもちろんのこと、マスコミで見られるいろいろなグループの見解や記事の中に、“社会主義”という言葉を見つけることもついぞない。

「これは、どういうことなのだろうか」

日本の革新政党、特に社会党や共産党の文章や学者の論文の中であれほどまでに頻繁に現れる“社会主義”という言葉が、いな一般の人々の間でも政治を論ずる時にしばしば登場する“社会主義”が、同じ体制批判の色の濃い市民運動ではほとんど使われないのはなぜだろうか。

その答えは、わが国の“市民運動”というものが生まれてきた動機や背景をたどるなかに見つけられよう。そしてそれは、基本的には次のようなことであろうと私は考へている。

すなわち、日本の市民運動といふものは、社会主義運動がその大前提とし、最も強く主張してきた資本家階級対労働者階級の対立といふ図式とは、かなり異なった構図をもつて生まれてきているからである。

わが国の市民運動は、その源流は明治にさかのぼるが、今日のような形態の市民運動が活潑になつてきたのは一九六〇年代に入つてからであり、その後高度成長が進むのと歩調をあわせて展開されてきた。六〇年代の高度成長は“所得倍増”を実現させ、テレビ、電気洗濯機、自動車などの消費財を豊かにしたが、その一方では大気汚染、海洋汚染といった環境破壊の問題や都市への人口集中を促し、過密、住宅難などの都市問題を深刻なものにした。

こうした高度成長の中で、政府や自民党は本来手段であるべき成長を自己目的化し、企業の保護育成に力を注ぐばかりで、そこに生活する人々の生活環境が悪化することには目をつむつてしまつた。一方社会党を中心とする野党側も、公害などの都市問題に対する取り組みは、きわめて消極的なものだった。その背景は、たとえば大労組を背景とする社会党の場合、労働者も加害者側に含まれる産業公害や、地主（農民）、買い主（サラリーマン）、開発業者の利害が複雑にからみあう土地・住宅問題のような都市問題等、イデオロギーを超えた問題への積極的な取り組みを逃げてきたからである。

市民運動は自民党にも野党にも取り残された都市問題等に対して、被害を受けた住民や問題意識を持った市民が“自分たちの手で何とかしよう”と立ち上がつた運動なのである。だから市民運動はそれまでの政党や労組の運動のように組織的リーダーに指導されて政府や企業経営者と対決するという運動の形態とは異なり、市民が直接、行政体や企業に働きかけるという形で展開されてきているのである。

このように市民運動は革新政党が理論展開のよりどころとしてきた“労働者対資本家”的争いという形で表れないため、運動を進める上では“社会主義”理論は有効性をもっていない。これが市民運動において“社会主義”が語られない一つの大きな理由である。

もう一つの理由は“社会主義”運動がマクロ的視野に立って体制変革を究極の目的とする運動であるのに対し、市民運動は具体的テーマに個別に取り組み、その問題解決自体を目的とする運動であるという性格上の差に求めることができよう。

“社会主義運動”といえば、例えば私自身の学生時代のいろいろな運動経験を思い起こしてみても、学生運動の各セクトはその時点の問題としては日韓、ベトナム、大学問題といった個別のテーマを取り上げてはいるが、それらは常に“社会主義”革命へ向けての運動の一環といった位置づけがなされていた。こうしたマクロ体制論からスタートする運動では、どうしても個々のテーマの解決よりも自分たちの勢力拡大自体が自己目的化してくる。

市民運動は自分自身が直面し問題意識を持った市民が個別のテーマを解決するために始める運動であり、現実には同じテーマであっても、それを手段化して勢力拡大を目的とする政党のかかわりに対する感覚的に強いアレルギー反応を示してきた。

こうした意味で“社会主義”というマクロ的な体制論は市民運動側からみて、運動体にイデオロギーと党派性を持ち込むものとして違和感が強く、従つて市民運動の中でほとんど語られることがなかつたのである。

3 市民運動の考え方

市民革命としての意義

では市民運動が個別の問題解決を目的とするものであるなら、権力構造や政治経済制度などのマクロ的“体制”的”あり方とは無関係と考えてよいのだろうか。私にはそうとは思われない。いやかえつて、市民運動のもつ“自發的市民による運動”としての側面を考えた場合、市民運動の本質には、これまでの政治体制に対する根底からの問い合わせが含まれていると思われる。

その考え方とは何か。それを一言でいえば「自分たちのことは自分たちで決めたい」という考え方だということができる。

自分で決める“という発想を市民層、それも国民の相当の割合を占める市民層が持つということは、日本の歴史上初めてのことである。この意味で私は現在の市民運動を“ゆるやかな市民革命”と呼ぶことができると思う。

確かに、明治維新はそれまでの封建制社会では世襲制によって受けつがれてきた「権力」つまり「公共的決定に参与できる人」の枠を打ち破り、その幅を広げた。また戦後民主主義は普通選挙法の制定により、さらに幅広い人々の政治参加の可能性が拡大したにもかかわらず、つい十年余り前までは、大多数の国民にとって「お上」の決定は犯しがたいもので、それに従うことが善

良な市民あるいは国民であるとされてきた。そこでは、"決める人"とそれに"従う人"の区別が当然の事とされていたのである。

こうした考えは、現在の選挙法の成立の前提に、選ぶ側と、選ばれる側という考え方があり、画然と存在していることにも表わされている。

それが一九六〇年代の高度成長の裏返しとして進行した環境破壊や都市問題の激化の中で、比較的高い教育を受け、自分の生活のための時間（余暇）を持つようになつた多数の市民の存在に支えられて、被害者自身が直接、企業や行政に働きかけて問題を解決してゆこうという"市民運動"が全国各地で展開されるようになった。

私の場合も、土地・住宅問題に関する勉強会を持つなかで、"市街化農地の宅地並み課税推進"の運動を始めたことが市民運動にかかる契機であった。その運動を通して私は、都市住民の生活上の利益が、なぜこんなに軽視されているのか、という思いを強くし、一般市民にはまったくといっていいほど、それに参加する道が開かれていないとということを痛感した。

こうした市民運動の展開を通じて、運動に直接加わった人ばかりでなく、それらを共感を持つて見守っていた多くの人々の中に、「自分たちのことは自分たちで決めたい」とする思いがより強く実感されるようになつてきた。このような実感のなかには、歴史的、社会的背景は異なるものの、十八世紀のヨーロッパにおける"市民革命"がもたらした"共和"の考え方と共通する何かが含まれていると思う。

「市民」とは何か

市民運動に対する直接、間接の経験を通して、参加民主主義を要求する市民層は今や確実に増大してきている。しかしその参加の主体となる「市民」という言葉に対して、それはいったい何を意味するのか、という疑問が多く発せられる。つまり国民、人民、庶民といった言葉とどういう関係にあるのか。また労働者、資本家という階級概念とはどうか。さらには農民、漁民という職業区分とはどうかという疑問である。これに答えるには、それぞれの言葉の発生した社会と、その後の使われ方の変遷を追わなければならない。それに解釈も多様なものになろう。私は「市民」という概念を次のように考えている。

歴史的にはフランス革命に代表される市民革命の中で、その革命の主体として「市民」が登場していく。当時の市民階級は封建社会を構成する地主、僧侶、農民とはまったく異なる経済基盤、つまり商品経済、市場経済を基盤とした都市の商工業者から構成されていた。このことから、市民革命の中で"自由・平等"をかけて闘つた旧「市民」は、封建的身分拘束から解放された自由意志を持つ"主体"として理解されてきた。

しかし、その後の資本主義の発展の中で、封建社会の身分的不平等よりも、労働者の窮乏に代表される経済的不平等が大きな問題となるに従つて、「市民」概念に代わって「労働者・資本家」という階級概念が強調されてくる。そこで戦後日本の革新的政治活動も、労働運動を中心にして

労働者対資本家という対立概念に沿って展開してきた。

それが六〇年代以降、"市民運動"が活性化するに従って「市民」という言葉が再び生き返ってきた。それではこの再生された「市民」は旧「市民」の概念とはどう違うのか。私はこの新しい「市民」を"職業から独立した普遍的価値観を有する主体"と定義したい。

つまり、職業に従事している人が、その職業上の利害や職場での身分関係を離れて一個の人間としての普遍的価値観を持つていること、それが「市民」の属性といえる。

私の選挙に参加したある女性は、主人は日立に勤めているので自民党の女性候補者に投票するらしいが、私は、大嫌い。私は普さんを応援する、といつていて。これなども、職業にも、まして、職業の論理を受ける世帯主からも独立した価値観をもちつあることの一例であろう。

ところでこうした普遍的価値は、欧米の場合、「神の前での平等」といったキリスト教文化によつて支えられている。しかしわが国の場合、歴史的にもそうした文化的支えを持たないため、個としての普遍的価値は大衆的には一般に未成熟である。

しかし生活水準と教育水準の向上を背景に、上からの価値の押しつけに反発することを通じて市民運動は、個としての価値観養成のトレーニングの場を多くの人々に提供してきた。こうした大衆的、歴史的蓄積を通して大量の「市民層」が生み出されてきている。

そしてこの中から官治型政治に独占されてきた"公共性"を問い合わせし、それにとって代わる、自治の基準たる市民の"公共性"が提起されるところまでやつてきている。

4 市民運動と政治運動

市民運動も広義には政治運動の一つの形態である。しかし前述したように政党による政治運動が自分たちのめざす社会をつくるため"権力"を奪取しようとするのに対し、市民運動は問題とするテーマの解決自体を目的とし、権力奪取を目的としない。こうした点から、市民運動はテーマへの直接参加とアマチュア性という特性をもち、政党のもつ代表性やプロ性とは大きく性格を異にする。

つまり市民運動は個別のテーマに共感した人が直接運動に参加し、参加の度合は自らの生活との調和の中で決められるというアマチュア性が保たれている。これに対し政党の活動は、めざすべき社会像をかかげ、これを実現するために権力を握ることを目的とした共同作業である。そのためには国民の一人としての立場というよりは国民から権力を委任された時に国民の代表として何を行なうかという立場での発言、行動が必要となり、組織や運動の継続性と長期的展望とが要請される。

こうした性格の相違から、多くの市民運動団体にとって政党や権力志向につながる選挙と深いかかわりを持つことは大きなタブーであった。

しかし近年、市民運動グループのなかで選挙への挑戦が次第に拡大している。「市民運動によ

る選挙」の形態には、選挙運動を市民運動のテーマを主張する効果的な場と考え当落は度外視する型と、代表的人物を当選させることにより議会内外への影響力を活用してテーマの実現を図るという型の二つの取り組み方がある。

前者の例としては五〇年の大阪府知事選でポスターに奇形魚のX線写真を掲げて、琵琶湖の水質汚染を訴えた市民運動による選挙があげられよう。

市川房枝さんの提唱する「理想選挙」、四九年の参議院選舉にみられた野坂昭如さん、戸村一作さんの選挙、そして前回の参議院選舉での“革自連”や“連動する会”的選挙などは、それぞれ少しずつ性格は異なるが、市民運動が参加し当選をめざして戦われた後者の型の選挙といえるのではなかろうか。

私自身、江田三郎氏の誘いで社会市民連合に参加するまでは、どの政党にも属さず、住宅問題、食品公害、医療問題をテーマにして市民運動にかかる一方、四九年の参議院選で市川房枝さんを推した選挙、ロツキード事件批判に端を発し、市民政治勢力をめざして革新無所属として私自身立候補した五〇年の衆議院選など、無党派市民運動グループによる選挙にかかわってきたが、かつて社市連に参加したとき、市民運動と政党について深く考えさせられた。

それは市民運動が参加した選挙ではあっても、次々と候補者を立てたり複数の候補者を持つてゆくと、その運動体は政党化を余儀なくされるということである。つまりたとえ候補者や推薦している人が主観的には“非権力志向”であっても、選挙で当選をめざすこと自体が国民に権力の

委託を求めることがあり、権力を政党に委託する一市民の立場を放棄することを意味する。こうなると、候補者は市民運動のように“権力を政党に委託する一市民”としては、政党を批判できなくなる。つまり、市民運動が一人の市民としての立場から政党を批判することができるのは、権力を求めないということによって認められることであって、権力志向にむかうとそうした資格を失うことになる。

こうした点で、市民運動としての運動と、政治運動としての運動の間に大きな性格上の相違があり、運動に加わる者にとって、その自覚が必要であることを私自信強く痛感している。

それでは、こうした相違があるため、市民運動と政党とは協力関係を持つことはできないのであろうか。私はそうは思わない。市民運動が提起し取り組んできた公害、医療といったテーマは、やはり戦後に新たに生まれた都市問題として、これからの中において非常に大きなテーマであり、政党としても本格的に取り組まなくてはならない。そうしたことから、市民運動と政党とは二つの面、つまり政策面と人材面での協力、交流をもつことが、こうした新しい問題の解決のために有効であり、必要だと考える。

それにはまず政党の側が市民運動からの提案に謙虚に耳を傾けることが必要である。つまり市民運動を“票になるかどうか”という目で見るのでなく、政策立案に当たっての協力者として臨む態度が政党に必要である。

そして、労組出身者で大半を占められている革新政党の中に、もっと市民運動経験者が参加す

ることが望ましい。もちろんこの場合、市民運動のグループ自体が政党に参加するのではなく、市民運動の経験をもつ一人の個人として、政党に参加するという点を明確にしておかなければならぬ。こうした市民運動経験者の政党への参加は、政党の本質をもとと開放的で、明るいものに変えてゆくことになる。

IV 市民政治の展望

1 市民政治の政策

社会民主連合（かつての社市連）は漸進的改革をめざす社会主義者と市民との連合として発足した。しかし政治における民主主義、経済における社会主義、外交における平和主義という社会党立党の精神は、社民連に参画している多くの人々によって今も色濃く受けつがれている。それでは社民連に“市民派”として参加している私たちが市民運動と政治運動の接点としてめざす方向は何なのか。政治における民主主義、外交における平和主義はもちろんのこと、経済に

おける社会主義も、経済運営に資本家だけでなく、労働者はもちろん、生活者の意向を加えていくという意味では賛成である。しかしそれでは“社会派”的人々と考え方がまったく同じかといえば、それらの理念を現実の場で設定する時の比重の置き方、言葉のニュアンスにおいて微妙な差がある。

つまり私たち“市民派”がめざす社会の方向とは、「参加民主主義とエコロジー（環境保全）とシビル・ミニマム（福祉）とを重視した社会」と表現することができる。

参加民主主義

参加民主主義は、これまでの代表民主主義、具体的には議会制民主主義というものが政党化の進行とともに形骸化し、その結果、固定化した政治集団や官僚に長く政治の独占を許していることの反省に立って生まれた。すなわち参加民主主義は、一般市民が、今までの形式的主権を実質化しようとする意欲に基づいた形での民主主義の実現をめざすものである。つまり少なくとも市民生活の場においては“自分たちのことは自分たちで決めたい”という市民運動的実感をいかに継続的に政治に反映させるかということである。

明治以来、わが国の政治的構図は行政が中心で、“お上”が方針を決め国民はそれに従うという暗黙の了解が定着していた。そこでは、国民の政治参加は選挙の投票という行為にのみ、実質上制限されてきたといえよう。

また反体制を掲げる従来の社会主義諸政党も、社会主義社会の実現をめざすイデオロギーに沿つて大衆を指導するという前衛党的発想に論拠する側面と、労組の利益代表の側面とが混在していた。そのため自分たちの主張が通るかどうかという面は重視するが、政治への市民参加の拡大ということ自体には非常に关心が薄かった。というよりも一般市民を知らずしらずのうちに「投票者」へと追いやっていた感がある。

これに対し市民運動が提起した「自分たちのことは自分たちで決めよう」という考え方は、『参加』を、単なる為政者に形式的正当性を与える手続きとしてとらえるのではなく、『参加』自体に価値を認めようとするものである。つまり決まる内容が同じであるとしても、「お上」や「聖人」によって決められるよりは市民の参加によって決められることが市民の自發性と自治能力の発露という点で価値があると考えるものである。

こうした『参加論』に対して、決定の適切さが保証されず非効率であり、衆愚政治をまねくという批判がある。特に長年にわたる官僚主導型の中央集権政治の中で、官僚は豊富な情報蓄積を背景に、事態に最も適切に判断できるのは自分たちである、部分的なエゴを振りかざす市民運動や素人である市民の政治参加は政策の整合性をくずし効率の低下をまねく——とする。

はたしてそうであろうか。官僚の職業的優秀性は認めるとしても、それはあらかじめ設定された目標を達成するためのプロセスを提示する能力に関してのことである。しかし生活水準ではほぼ歐米に追いつき、しかも経済成長自体が環境破壊と資源浪費の点で行き詰ることによつて、明

治以来の『追いつけ追いこせ』という暗黙の国民的合意は失われてしまった。今日最も必要とされるものは、目標達成のプロセスを提示することではなく、目標それ自体をどう設定するかという選択なのである。しかもこの選択は今日の不足を明日満たすといったバラ色の選択ではなく、長期的に見た人間の健康、安全と短期中期的に見た物質的豊かさ、便利さのどちらを選ぶかという苦汁に満ちた選択である。

われわれが直面している「選択」が苦汁に満ちたものであればあるほど、その選択を官僚、政治家といった一部の人々にゆだねることはできない。それは国民の一人一人が自らの生き方を含めて思慮した上での選択でなくてはなるまい。

市民に十分な情報を公開せず、行政・企業主導で一方的に決定するという今までの官僚主導型の方式がいきづまっているのは、成田空港建設、原子力船「むつ」号、原子力発電所建設などからも明らかである。これは、かつてゴミ戦争と騒がれた杉並のゴミ焼却場問題が住民エゴを徹底的にぶつけ合う中から生まれた自治能力により、住民の納得の上で決定され、平穏に着工されたのと、まさに対照的である。飛行場かそれとも増便ストップか、原発か、それとも電力使用を押さえる生活か、といった選択についてどちらが適切であるかという客観的基準はない。結局、選択された結果の影響を受ける国民の一人一人が考へざるを得ないことであり、その選択を国民の前に提示することが政府や政党の責任ではあるまい。

こうした参加民主主義を実現していくためには制度面での改革のみならず、そうした制度をつ

ねに実質的なものにしてゆく運動の両面が必要である。制度面においては地方分権の推進と、行政や企業情報の公開の推進がそのための大きな柱となろう。

地方自治の拡充

わが国では、明治以来の中央集権官治型制度の中で、地方自治体は国の下部機関として位置づけられてきた。

戦後、新憲法は国会・内閣・裁判所と並んで、地方自治体を憲法に基づく機関として位置づけ、知事・市町村長の公選制を規定した。またシャウプ勧告により地方財源の自立が計られた。

しかし、長年の官僚型政治の伝統の中で、地域住民による自治、すなわち中央政府と並存する地方政府としての地方自治体という考えが十分根づいていなかつたため、地方自治体は次第に戦前と同様、国家の下請機関となってきた。

たとえば財源の面においては、自治体の財源の約六割を占める国からの交付金、補助金を操作することにより国は実質上、自治体の全ての支出を制御することができる仕組みになっている。また国は法律解釈権を独占し、それを通達などによって自治体に押し付けることにより、住民が“自治的”に決定できる条例などの内容を制限してきた。

しかし、近年の市民運動や革新自治体の成立を背景に、国の基準よりきびしい公害基準条例の各自治体での制定や、超過負担に関する国を相手どつての自治体による訴え（摂津訴訟）など、

自治体の国からの自立傾向が強まっている。

こうした現実を踏まえて、自治体に対する理論的とらえ直しも進んでいる。すなわち國も自治体も、国民主権により国民一人ひとりが原初的に有する立法権、行政権を信託することによって成立している機関であり、両者は機能・役割を分担するが、支配・被支配の関係にはないとするとらえ方である。

自治体の自治権を拡充して市民参加をいつそう有効なものとするためには、租税の約七〇%を占める国税の財源のいくつかを地方に移管し、地方財政を自立化させることが急務である。こうして国からのひもつき補助を廃止し、国からの財政援助は自治体相互間のアンバランス是正に限るべきである。こうした地方自治の拡充は、地域の実情と要求に即した社会資本、社会的サービスの充実のために必要であり、同時に地元利益還元型の政治体質を払拭することになろう。

これまで中央政府の自治体支配を許してきた原因の一つに「中央官僚信仰」がある。確かに理論研修と権限を与えられての実践トレーニングを繰り返す中央官僚の職業的優秀性は否定できない。しかし、地方自治体においても財源を含む大幅な権限委譲が行われれば、自治体職員の仕事はいつそ魅力を増し、中央官僚に劣らない優秀なスタッフが育つ条件が満たされることになる。

こうしたスタッフの協力のもとに市民自治が実現していくば、地方都市は経済的にも文化的にも魅力的な存在となり、巨大都市から的人口分散も自然に進行するはずである。

行政及び企業情報の公開

行政機関は専門家集団（官僚）を定常的に擁し、あらゆる情報を集中させるシステムを持つことにより強大な権限を有しており、放置すれば立法や司法を超越する過大な権力となりがちである。またロッキード事件でも見られたように、政策決定過程のブラックボックス化は権力の私物化につながる。

こうした行政権力の過剰膨張や私物化をチェックするため、行政決定過程や各種の政策情報を公開する仕組みが必要である。このため現行の制度においても、国会には国政調査権が認められており、それを補強する意味で証人喚問も認められている。

しかし、田中金脈やロッキード事件に見られるように、三権分立を根拠に行政の側は自ら判断した事項については国会の調査を拒否するため、国政調査権は実質上形骸化している。果たして憲法に定められた国会の国政調査権を、行政は自らの裁量による守秘義務を理由に拒否できるのであろうか。

国会は機能分担として立法機関であるだけでなく、国民の代表機関として国権の最高機関であり、守秘すべき範囲の判断を含め行政に対する調査権は強力に保証されていると理解すべきである。また、こうした国政調査権を有効に作用させるためには、スタッフの拡充など国会の調査機能の充実が必要であり、それなくしては複雑化した行政をチェックすることは困難である。

こうした国政調査権の活性化に加えて、もつと根本的な情報公開制度の確立が望まれる。つまりそれは特別の事項、たとえば外交や安全保障、プライバシーなどに関する事項を除いて、行政機関がもっているすべての情報について、国民の請求があれば知らせなくてはならないという制度である。

さらに私企業についても不正な政治介入防止や消費者保護の観点から、詳細な経理内容、製品の材質、廃棄物の内容などについて公開を義務づけることなどの制度の確立が考えられよう。

他方、運動面ではこれらの制度を生かして、行政や企業の行動を日常的に監視すると共に、自治体への市民参加をそれぞれの地域の中で工夫して推進することが必要である。

環境保全（エコロジーの尊重）

生体系に対して悪影響を及ぼす恐れのある産業廃棄物、食品添加物などに対し、どこまできびしい態度でのぞむかという問題がある。私は人間が原子爆弾を作った時から、人間という生物は生物学的に矛盾したものだと考えている。つまり人間という生物が自分たち自身の種属（ホモ・サピエンス）を絶滅させ得るものを作るというのは何と考へても矛盾である。そうした観点から見てゆくと、科学技術の進歩や文明の発達ということは、それ自体決して喜んでばかりいられることではない。原子力にしろ最近の遺伝子を人工的に変化させる技術にしろ、はたしてこれらの技術が人類の寿命を伸ばすものか、縮めるものか疑問だからである。

今日のような不況下においてはどうしても目先の景気刺激が優先され、長期的な安全性といったエコロジー的観点は軽視されやすい。先日、福井県に出かけた際、当地の地場産業である絹織物業者が次々と倒産に追い込まれているという話を聞かされたが、当事者を前にすると、「それは構造的に見てしかたないことだ」とは、なかなか言い出せないものである。

また近年、私が取り組んでいる資源ゴミのリサイクルの問題も、基本的には、将来とするべき私たちの生活様式のあり方が問われるものである。つまり、資源エネルギーの供給源をいかに確保してゆくかといった問題設定だけでなく、いかに資源エネルギーを有効に使うか、風力などの再生エネルギーの利用を進める、そして資源エネルギーをどのようにして、リサイクルさせるかということも考えなければならない。それにはどのような生活をするべきか。この問題も、私たち市民が、自分の役割を自覚した上で、生活様式の選択の問題である。

このように、目前の生活にかかる問題に取り組むことも政党の役割であると同時に、数十年単位で人間の将来を考えることもまた政党として重要である。フランスにおけるエコロジー派の台頭も、こうした人間の将来に対する国民の懸念のあらわれといえよう。

シビル・ミニマム

“シビル・ミニマム”という用語は、都市における「市民生活基準」を意味し、都市型社会での生活の社会化に伴って不可避とされる社会資本（住宅、上下水道、学校など）、社会保健（医療・介護）社会の進行による年金の負担増、行政体における人件費率の上昇など、むずかしい問題が山積している。

私は政治というものは、人々に精神的喜びを積極的に与えることを目的とするものではなく、人々が不幸になることを最小限に防ぐこと、つまり最小不幸をめざすことにその目的があると考へている。というのは強制力を持つ政治権力が、精神的喜びの押し売りをすることの怖さを考へると、政治の受け持つべき範囲は、最小不幸社会の実現に限定し、精神的喜びについては、宗教や芸術にゆだねるべきだと思うからである。

こうした観点で考えるシビル・ミニマムの実現こそが政治の大目的であり、行政上の工夫を重ねながらねばり強くその実現を図っていくことが必要である。

2 市民派議員としてめざすもの

私は今回の当選を、私と私たちのグループの特殊な例とは思っていないし、またそりあつてはならないと思つてゐる。つまり、この当選を、これまで既存の大組織によらねば当選できないと

されてきた国政参加への障壁に対する突破口として意義づけ、これを足がかりに、さらに市民政治の新しい波をまき起していくこと、それが今後私のめざすもののすべてである。

これまでにも、市民運動グループや自治体の議員、特に無所属議員のなかには、地域社会に根をはるすぐれた活動をしている人たちが多数存在している。しかし現在の政治構造では、国政への参加に対して、保守党から革新政党の分野まで、既存の大組織に属していない人には高い障壁をめぐらせてきた。大組織に属さない国政参加の道は、著名な人が参議院全国区から選出される場合が唯一の例外としてきた。この傾向は近年ますます厳しくなってきており、社会党の人材涸渴の元凶は、ここ二十年来、労組以外からの新しい人材を国政にほとんど送り込めなかつたという事実にある。

私はこうした障壁を打ち破るために、市民派議員として次のような活動に重点を置いていきたい。まず第一に情報センターを作つていただきたい。これまで市民運動を進めていく時、まずぶつかるのが情報の壁である。例えば、ある食品添加物の危険性が呼ばれても、どういうメンバーの審議会でどんなデータに基づいて許可されたのかを知るのは、行政の非公開の壁にはばまれて非常に困難である。また、自治体の議会活動でも、例えば、国民健康保険などのように全国的な問題でありながら、他の自治体の情報を知るのはなかなか難しい。

国会議員には国政調査権を初め、国政に関する情報を知る上では大きな権能が与えられている。こうした国会議員機能を最大限に生かして、市民運動や自治体に関する情報を提供できる“市民

情報センター”とでも呼べるものを作つていきたいと考えている。

第二には、”市民選挙”を拡げていきたい。これまで既成政党の選挙は、あらかじめ大きな組織があるとか、多大なお金を用意して、それで票を”囲い込む”という形の運動が一般的である。しかし、私は一九七四年の市川房枝さんの参議院選や私自身の選挙の中から、選挙運動そのものを多くの市民の参加の場としていく”市民選挙”が可能であるという確信を持つようになった。つまり選挙を市民運動への自発的参加と同じように、多くの市民が自分の運動として候補者と共に選挙運動に参加していくこと、それが”市民選挙”的な方である。

すでに、こうした”市民選挙”的な芽は全国各地に育っている。例えば私の選挙の応援をしてくれた茨城県桜村の村会議員、村上君。彼は筑波大学のドクター・コースの学生であると同時に議員である。また私の十年來の友人で、大阪・堺市で長年”こんにちは新聞”という地域新聞を主宰し、現在、堺市の市議会議員でがんばっている長谷川さんなどもそうである。こうした選挙のあり方が拡大していくれば、大組織を背景にしなければ国政に代表を送れないという組織神話を打ちこわし、市民派議員を次々と生みだすことが可能になるであろう。

さらに、政治運動にかかるようになって、若い人の政治活動におけるトレーニング・システムの無さを痛感している。保守の側が、官僚、地方議会議員など、それなりの政治トレーニングをへた人物が国政に参加しているのに比べて、”革新”と呼ばれる側の弱体ぶりは目を覆うばかりである。これまで”革新”と呼ばれる”陣営”では、労働組合や社会党の協会派に見られるよう

な『学習活動』やごく限定されたトレーニング・システムしか存在していない。しかもその『革新』トレーニングの内容は、根回し多数派工作や自己の党派的正統性の『理論武装』といった内部的な政治技術に偏重し、ふつうの主婦や商店主の中に入り込むような地域活動や、自治体予算の実際的な対案作りといった政策提言など、社会的に通用する人材供給のためのトレーニングの場はほとんど存在していない。

企業においても、新入社員教育には多くのエネルギーを使っている。政治活動においては、政治にかかわろうとする志が何よりも必要であるが、それだけでは政治的活動家としては不足である。それと同時に、社会的に信頼が得られる人物であり、エキスパートであることが必要である。そこで市民派政治家を輩出させていくためには、志ある若者を育てあげる新しい型のトレーニング・システムがぜひ必要である。そのため、市民運動や町づくりにかかわる地域的実践活動、自治体の予算政策にかかわる政策的実践活動、そして選挙活動への参加などを組み合わせたトレーニング・システムを多くの人と協力して、形作っていきたいと考える。

二十代、三十代の若者の政治離れが言われ始めて久しい。しかしこれから十年先、二十年先には、いやおうなく社会のかじ取りは、今の若者の肩にかかる。これから厳しい社会状況に適応できる新しいスタイルの政治運動『市民政治』の運動に多くの若者の参加を期待したい。

そして、それが次第に、実現していくことこそが、市民が政治の主権者となる『ゆるやかな市民革命』につながるであろう。

菅直人●市民ゲリラ 国会に挑む——一九八〇年八月二十五日 第一刷 定価九〇〇円

著者／菅直人 ©Naoto KAN 0031—503510—8715

編集人／守屋健郎 発行人／大原規男

発行所／読売新聞社

〒100 東京都千代田区大手町一―七一

〒五三〇 大阪市北区野崎町八―一〇 〒八〇二 北九州市小倉北区明和町一―一

印刷所／明和印刷株式会社 製本所／豊文社 〈落丁乱丁本はおどりかえします〉

'80衆院選東京7区(定数4)

確定得票数(得票率)

菅 直人(社民連・新)

当157,921(22.8)

小沢 潔(自民・前)

当114,334(16.5)

大野 潔(公明・前)

当107,135(15.5)

長谷川正三(社会・前)

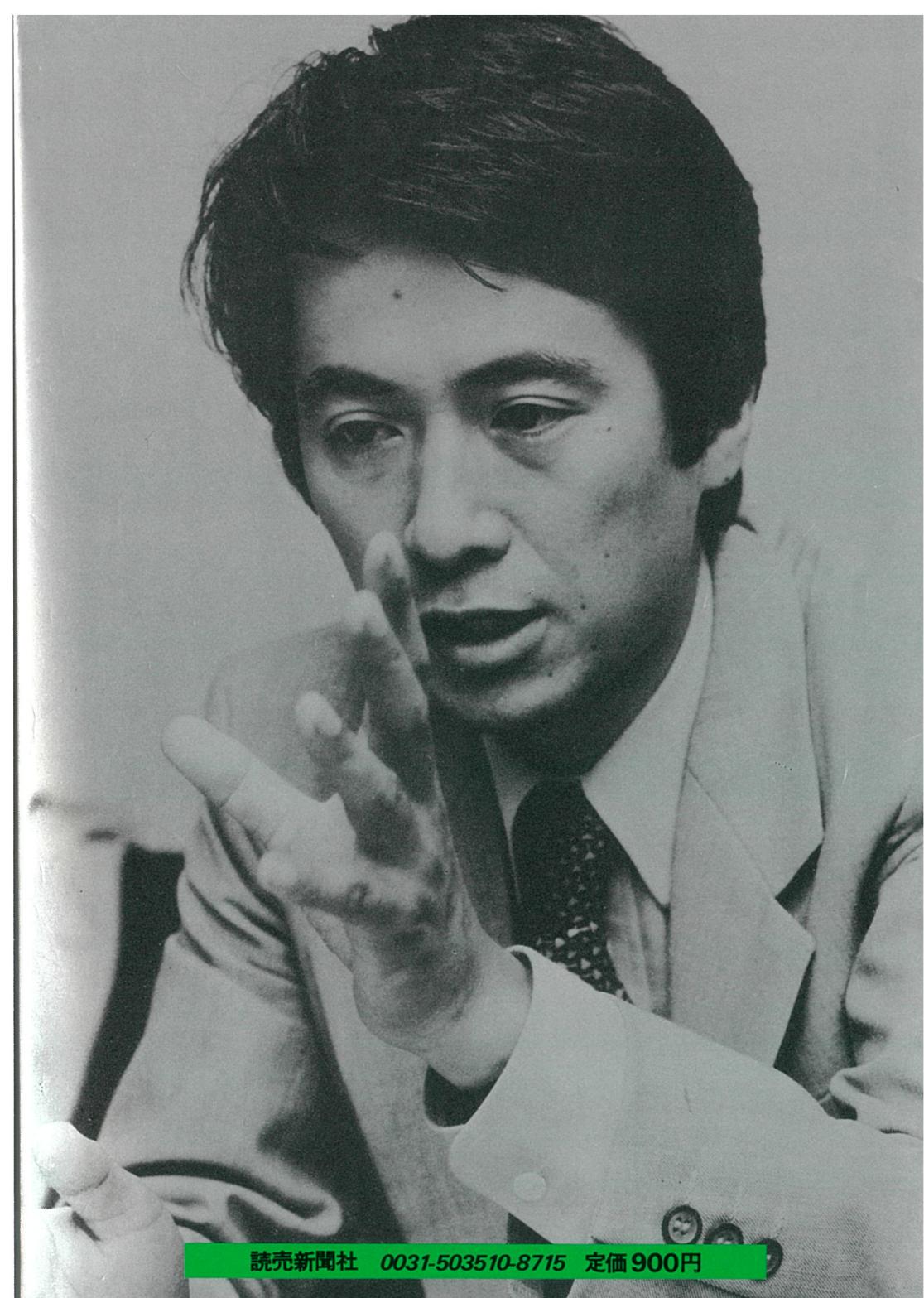
当107,002(15.5)

秋本文夫(自民・新)

次103,362(14.9)

工藤 晃(共産・前)

102,198(14.8)



読売新聞社 0031-503510-8715 定価 900円